

V 宮山遺跡第1次発掘調査概報

本文目次

I. はじめに	1
II. 調査の概要	2
1) 各トレンチの状況	3
2) 検出した遺構	4
3) 出土遺物	5
III. まとめ	8

挿図目次

第1図 宮山遺跡周辺図 (1/25000)	1
第2図 宮山遺跡トレンチ位置図	2
第3図 第4・第8トレンチ (建物1) 実測図	3
第4図 第10トレンチ (建物2) 実測図	4
第5図 第4トレンチ出土遺物実測図	6
第6図 トレンチ内出土遺物実測図	7
第7図 トレンチ内出土鉄釘実測図	8

図版目次

図版1 宮山遺跡遺構	1. 調査前の状況 2. 調査終了後、埋め戻し状況
図版2 宮山遺跡遺構	1. 第4トレンチ・第8トレンチ礎石検出状況 2. 第8トレンチ礎石検出状況
図版3 宮山遺跡遺構	1. 第4トレンチ礎石と遺物出土状況 2. 第4トレンチ下層遺物出土状況
図版4 宮山遺跡遺構	1. 第1トレンチ石垣及び遺物出土状況 2. 第6トレンチ石垣検出状況
図版5 宮山遺跡遺構	1. 第5トレンチ石垣検出状況 2. 第5トレンチ石垣及び遺物出土状況
図版6 宮山遺跡遺構	1. 第9トレンチ地山検出状況 2. 第1トレンチ参道石敷検出状況
図版7 宮山遺跡遺構	1. 第10トレンチ礎石検出状況 2. 第10トレンチ礎石検出状況
図版8 宮山遺跡遺構	1. 第1地点調査風景 2. 第1地点の現状
図版9 宮山遺跡遺物	第4トレンチ器書土器30・31、土師器皿9・13

- 図版10 宮山遺跡遺物 第1トレンチ(土師器皿33・34・49) 第5トレンチ(土師器皿52)
第8トレンチ(瓦器椀48) 第7トレンチ(土師器皿35、瓦器椀45、
皿37) 第10トレンチ(瓦器椀40)
- 図版11 宮山遺跡遺物 第4トレンチ土師器皿、椀、瓦器椀
- 図版12 宮山遺跡遺物 第4トレンチ(土師器椀22、瓦器椀11・28) 第7トレンチ(土師器
椀44、平瓦86・87、丸瓦88) 第6トレンチ(平瓦90) 第8トレン
チ(平瓦91)
- 図版13 宮山遺跡遺物 1. 瓦器椀(第2トレンチ42、第5トレンチ50、第7トレンチ43・53、
第8トレンチ47)
2. 瓦器椀(第4トレンチ19・82、第7トレンチ46・79・81) 瓦質
脚(第7トレンチ80・83) 磁器(第7トレンチ85)
- 図版14 宮山遺跡遺物 1. 土師器羽釜(第3トレンチ59・93、第8トレンチ57・58・92)
2. 鉄釘(第4トレンチ64~66・72、第5トレンチ70・71、第7トレン
チ61・67、第8トレンチ63・68・69・74)

宮山遺跡第1次発掘調査概報

I. はじめに

宮山遺跡は、東大阪市上石切町1463番地に所在する祭祀遺跡である。

近鉄奈良線石切駅から、興法寺・生駒山宝山寺に至る参拝道（辻子谷道）の北側山中に、江戸時代のはじめ頃まで、石切剣箭神社の上之宮の社殿が建てられていた。社伝によると、神社は上下二社に別れ、上ノ社は生駒山哮ヶ峰に祀られ、下ノ社は現在の本社であった。上ノ社は、江戸時代慶安3年（1650）に現在の上之宮の地に遷座された。その後、明治40年に上ノ宮は、下ノ宮に合祀され、一時もとに復するなどの経過はあったが、現在は上ノ宮として祀られている。生駒山哮ヶ峰にあったという上ノ社が、宮山遺跡である可能性が高いと考えられている。このたび、石切神社では、宮山の地を整備し社殿を復元する計画があり、事前に確認調査を実施することになった。発掘調査は、石切剣箭神社の委託を受けて、(財)東大阪市文化財協会の担当で、昭和60年10月1日から10月24日まで実施した。

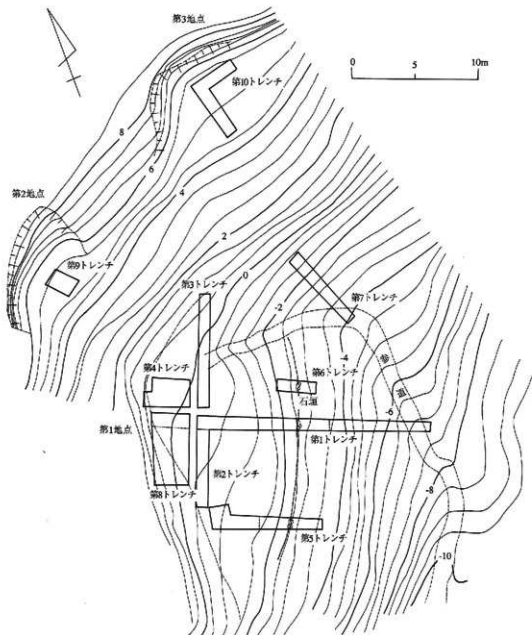
本遺跡は、興法寺に至る参拝道より、宮川を隔てた北側丘陵の南側斜面、標高約300m付近に位置している。本遺跡の周辺には、東南約400mのところへ鷺尾山興法寺がある。山岳寺院として、古代から中世にかけてかなりの勢力をもった大寺院であったことが知られている。



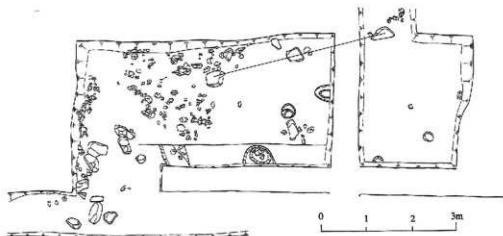
第1図 宮山遺跡周辺図 (1/25000)

II. 調査の概要

調査地は、丘陵の南斜面であり、樹木や笹に覆われているため、まず現地の草刈りを実施した。草刈りの結果、尾根の南側斜面には、3カ所の小規模な平坦地が存在することがわかった。斜面中央部に東西約12m、南北6mぐらいの平坦地があり、ここに中心建物の存在が推定され、



第2図 宮山遺跡トレンチ位置図



第3図 第4・8トレンチ（建物1）実測図

第1地点と仮称することにした。第1地点の10m北には、東西6m、南北3mの平坦地があり、これを第2地点と仮称する。また、第1地点の北東20mには、東西約6m、南北5mの平坦地があり、第3地点と仮称することにした。この3地点を中心にして、計10箇所のトレンチを設定し、遺構の検出を行なった。

1) 各トレンチの状況

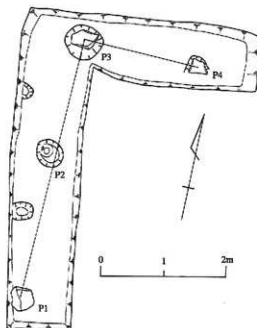
調査は、中心建物の存在が予想される第1地点に幅1m、長さ21mの第1トレンチを南北に設定するとともに、遺跡周辺の地形測量もあわせて実施することになった。

第1トレンチの調査では、まず厚さ約15cmの表土を除去し、2層上面で精査を行なった。トレンチ北側で50cm大の礎石らしき石を確認したほか、第1層表土内より土師器皿・鉄釘などが出土した。このため、中央平坦地で東西にトレンチを延長することにし、東のトレンチを第2トレンチ、西のトレンチを第3トレンチと呼ぶことにした。第1トレンチの北端で1辺約30cm大の自然石の礎石1個を検出した。第1トレンチで2個の礎石を検出し、建物跡の存在が確実なことから、さらに北側にトレンチを拡張することにした。北東側を第4トレンチ、北西側を第8トレンチとした。この結果、礎石状の石を計4個検出し、内3個の礎石は、柱心々間1.8mを測る。これを、建物1と呼ぶことにした。

第1トレンチの中央、南側斜面の中央付近で石列を確認した。石列は、人頭大以上の石を斜面下に並べたもので、斜面の土留め用に用いた石垣の可能性も考えられ、また、石列の周辺からは、土師器小皿が完形で数点出土した。

第1トレンチ中央で検出した石列の延長を確認するため、西側に第5トレンチ、東側に第6トレンチを設定した。第5・第6トレンチで調査の結果、いずれからも第1トレンチで検出した石列の延長上に石列を検出した。第5トレンチでは、30~40cm大の自然石を二段石垣状に組合せた状態で検出し、周辺から土師器小皿・中皿が出土している。

第6トレンチでは、3個の自然石を一列に並べていた。この結果、石列は、第1地点を囲む



第4図 第10トレンチ（建物2）実測図

2.5mトレンチを拡張したところ、1.8mで礎石1個を検出した。この結果、第3地点でも小規模な建物跡が確認され、建物2とした。第10トレンチでは、表土及び地山直上より細かく破砕された土師器が大量に出土した。使用済みの土師器皿を細かく破砕して、投棄していたことがわかる。

第4トレンチでは、検出した4個の礎石は原位置のまま残すことにし、礎石周辺の掘り下げを行なったところ、北西端の礎石下より多量の土師器皿が完形で出土した。土師器皿は、一括で遺棄された状態で、内黒の杯や墨書土器も認められた。また、第8トレンチでも礎石が検出されていない地区について掘り下げたところ、径40cm、深さ30cmの柱穴が確認された。以上の結果から礎石建物の下に、さらに古い時期の掘立柱の建物が存在することが明らかになった。

第1トレンチの南端で石敷を検出した。径5cm程度の小石を幅1mで密に敷詰めていた。この場所は、測量図と照合すると、幅1mにわたって平坦な面が第1地点の方へ延びていることがわかり、第1地点の建物に通ずる参道であることが確認できた。

以上のような成果をあげて、10月24日に埋め戻しを完了し、全調査を終了した。

2) 検出した遺構

建物1

第1地点中央で検出した。

4個の礎石を表土直下より検出した。北側3個の礎石は、1.8~2.0m間隔で並ぶところから2間×1間以上の建物が存在した可能性が考えられる。礎石の下層より平安時代末~中世期の

ように東側斜面裾に沿って並べられており、斜面の崩壊を防ぐ目的で作られたことがわかる。第1地点の調査に引き続いて、第2地点に第9トレンチを設定した。斜面中腹をカットし、小さな平坦面を造り出しており、カット面は加工せず、削り出しのままである。第9トレンチは、表土約20cmを除去すると、岩盤に達し地山となる。地山上面には、何らの加工も認められなかった。土師器片少量が出土した。

続いて、第3地点に第10トレンチを設定した。第3地点は、竹藪のため根の掘り起こしに時間がかかったが、中央平坦部で幅1m、長さ5mのトレンチを設定した。トレンチ南で、40cm大の礎石状の石を検出した。また、北へ2mの地点で径40cmの抜き取り穴を検出した。このため、東へ

遺物が出土しているため、この礎石に伴う建物1は、この時期以降の建築になることがわかる。江戸時代の慶安3年（1650）に現在の真の院（上の宮）に移されたと伝えられている建物の礎石にあたるかもしれない。

建物2

第3地点で検出した。

3個の礎石及び1個の抜き取り穴を検出した。礎石間の距離は、p1-p2間2.2m、p2-p3間1.8m、p3-p4間1.9mを測る。第3地点が、竹藪で覆われているため、これ以上の拡張は出来なかったが、地形上からはあまり大きな建物が立つ余裕がなく、南北二間、東西二間乃至三間の建物と推定できる。建物に伴う遺物はなく、時期は明確に出来なかったが、ほぼ建物1と同時期と考えられる。

建物3

第1地点の建物1の下部で検出した。建物1の礎石を原位置で保存したため、部分的なトレンチ調査で下層の遺構を確認した。下層からは礎石は検出されず、柱穴のみを検出した。掘立柱建物の存在が想像される。建物規模は不明、出土遺物から平安時代末まで遡る可能性が考えられる。

石垣

第1地点の南側斜面裾で石列を検出した。第1トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチで検出しているため、少なくとも総延長12mにわたって確認した。石列の性格としては、建物1を建築する際に、斜面崩壊を防ぐため、斜面裾に石垣を巡らしたものと思われる。現状では2段の高さに石を組んでおり、当時はもう少し高くまで積み上げていたものと考えられる。

石敷の参道

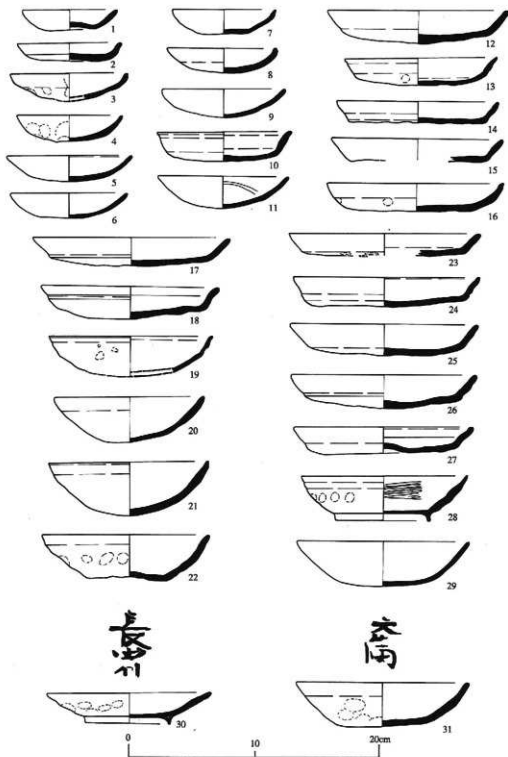
第1トレンチ南端で幅1mの石敷の一部を確認した。こぶし大の自然石を密に配している。北側の第7トレンチでは検出していないので、全面に敷かれていたのではない。調査前に実施した地形測量図に石敷の位置を重ね合わせると、等高線のラインがゆるやかになる箇所が南から北へ通じているのがわかる。このラインを図面上で点線で復元すると、斜面裾に沿って建物1に通じる参道であることが明らかになった。

3) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土師器杯・碗・皿・羽釜、瓦器椀、瓦、鉄釘などコンテナ箱約10箱分出土した。

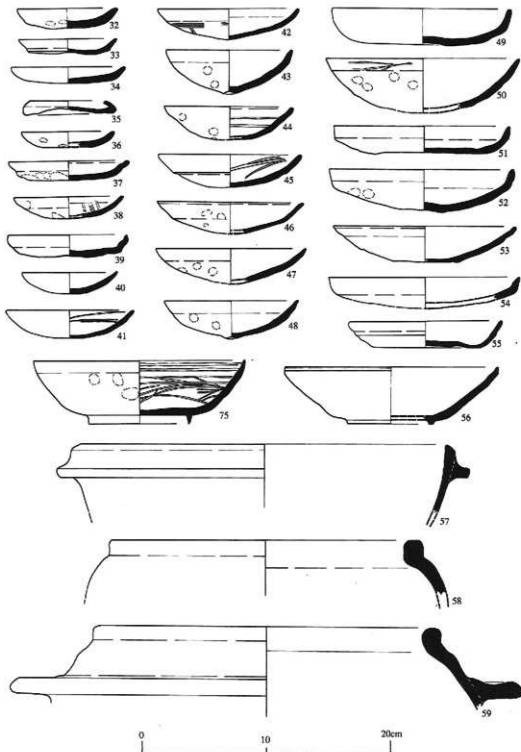
土師器

第4トレンチの礎石下層より、墨書土器が2点出土している。(30)の杯は、平底に外傾する後円部が付き、高台を有する。内外面ともヘラミガキしており、底部外面に「長口」の墨書が認められる。(31)の碗は、平底に内傾する後円部が付き、内外面ともナデにより調整している。底部外面に判読不明の墨書が認められる。



土師器皿 (1~9・12~18・23~27)、碗 (19~22・29・31)、杯 (10・30) 瓦器碗 (11・19・28)

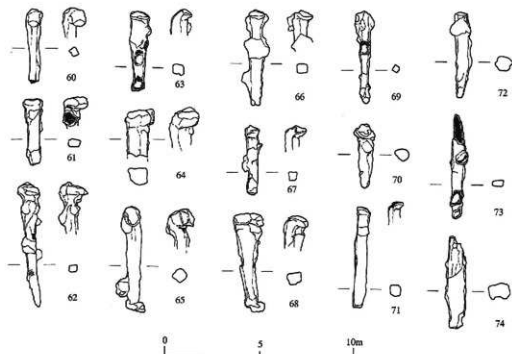
第5図 第4トレンチ出土遺物実測図



第1トレンチ (土師器Ⅲ32~34・49) 第4トレンチ (土師器Ⅲ56) 第2トレンチ (瓦器Ⅳ42) 第8トレンチ (瓦器Ⅳ47・48、土師器Ⅴ55・羽釜57~59)

第5トレンチ (土師器Ⅴ52、瓦器Ⅴ50) 第7トレンチ (土師器Ⅴ35・36・54・杯63、瓦器Ⅳ41・43~46・53・75・Ⅴ37・38) 第10トレンチ (瓦器Ⅳ40)

第6図 トレンチ内出土遺物実測図



第4トレンチ (64・66・72) 第5トレンチ (70・71) 第7トレンチ (61・67) 第8トレンチ (63・68・69・74)
第7図 トレンチ内出土鉄釘実測図

第4トレンチ北西端礎石下層(4層)より、土師器皿・碗が一括して出土している。第5図(32・11)の瓦器は上層からの出土であるが、それ以外はすべて4層内出土である。丸底で内湾する後円部をもつ碗(19~22)と平底で外傾する後円部をもつ中皿タイプ(23~27)に分かれる。(28)は、平底に外傾する後円部に、高台が付く。内黒の杯で内外面をヘラミガキを施す。

各トレンチより、瓦器碗、土師器皿が出土している他、瓦・鉄釘が少量出土している。

III. まとめ

今回の調査では、少なくとも二時期の遺構が確認されている。上層の遺構は、礎石建ちの建物1・2で、石垣及び参道などの施設が伴っていたと考えられる。江戸時代の初めに、現在の上の宮に移るまであったと伝えられている遺構と思われる。下層の遺構は、第4トレンチの礎石下から確認された遺物及び柱穴である。出土した遺物は、一括して出土したもので、平安時代終わり頃に遡るものを含んでいる。このことから、本遺跡では平安時代末乃至鎌倉時代頃に小規模な掘立柱建物が中央の第1地点に造られ、その後少し規模大きくして、礎石建ちの建物が第1・2・3地点に作られたものと思われる。

富山遺跡は、石切剣箭神社の奥の院として信仰を集めていたと思われるが、近くには興法寺もあり、山岳宗教の場にもなっていたかもしれない。現在は、神社のお堂が再建され、奥の院として祀られている。



1. 調査前の状況



2. 調査終了後、埋戻し状況



1. 第4トレンチ・第8トレンチ礎石検出状況



2. 第8トレンチ礎石検出状況



1. 第4トレンチ礎石と遺物出土状況



2. 第4トレンチ下層遺物出土状況



1. 第1トレンチ石垣及び遺物出土状況



2. 第6トレンチ石垣検出状況



1. 第5トレンチ石垣検出状況



2. 第5トレンチ石垣及び遺物検出状況



1. 第9トレンチ地山検出状況



2. 第1トレンチ参道石敷検出状況



1. 第10トレンチ礎石検出状況



2. 第10トレンチ礎石検出状況



1. 第1地点調査風景



2. 第1地点の現状



30'



31'



30



31



9'



13'



9



13



第1トレンチ (土師器皿33・34・49) 第5トレンチ (土師器皿52) 第8トレンチ (瓦器碗48)
第7トレンチ (土師器皿35・瓦器碗45・皿37) 第10トレンチ (瓦器碗40)



1



2



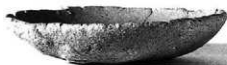
3



4



5



6



8



10



12



14



18



24



25



27



11



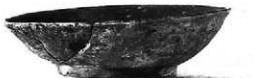
44



22



76



28



75



90



87



86



91

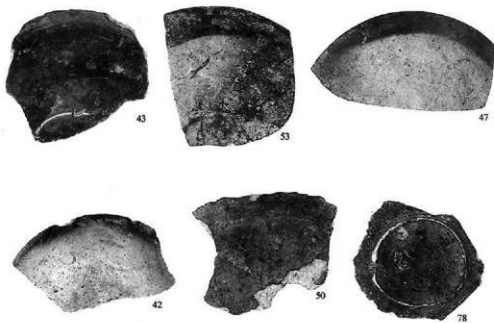


89

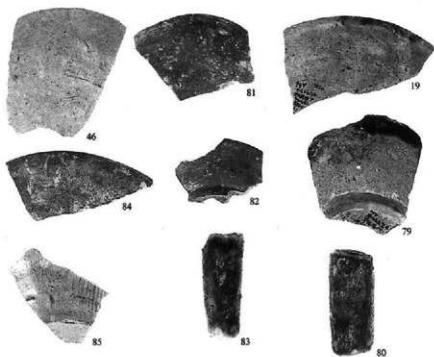


88

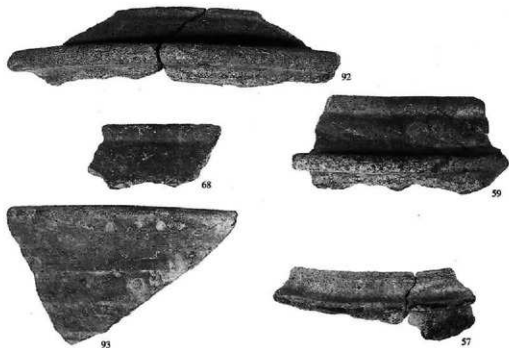
第4トレンチ (土師器碗22, 瓦器碗11・28) 第7トレンチ (土師器碗44, 平瓦86・87・丸瓦88)
第6トレンチ (平瓦90) 第8トレンチ (平瓦91)



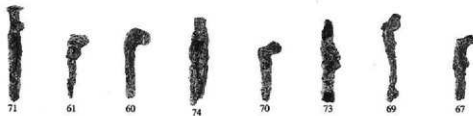
1. 瓦器碗 (第2トレンチ42, 第5トレンチ50, 第7トレンチ43・53, 第8トレンチ47)



2. 瓦器碗 (第4トレンチ19・82, 第7トレンチ46・79・81)
瓦質脚 (第7トレンチ80・83) 磁器 (第7トレンチ85)



1. 土師器羽釜 (第3トレンチ59・93, 第8トレンチ57・58・92)



2. 鉄釘 (第4トレンチ64・66・72, 第5トレンチ70・71, 第7トレンチ61・67,
第8トレンチ63・68・69・74)

Ⅵ 植附遺跡第2次発掘調査報告

は し が き

大阪都心部から周辺部への人口流出現象によって、大阪の中心部と奈良市を結ぶ近畿日本鉄道奈良線は、近年著しく混雑してきている。これを解消するために昭和60年に近畿日本鉄道東大阪線が開通した。東大阪線の開通に伴い東大阪市域では、駅周辺部での土木・建設工事が増加するとともに埋蔵文化財の緊急発掘調査も急増してきております。

今回報告します植附遺跡第2次発掘調査は、東大阪線の新石切駅前のビル建設工事に伴うものです。本調査では、弥生時代から近世の遺構・遺物を確認し、植附遺跡の従来からの資料にさらに新たな資料を加えることになりました。特に多量の呪符の発見は、中世の人々の精神生活を考えるうえでたいへん貴重なものといえましょう。今回の発掘調査は、植附遺跡の極く限定された部分の調査に過ぎません。今後の近隣の発掘調査によってさらにその全貌の解明に努力してゆきたいと考えております。

最後に発掘調査および本書作成にあたって御協力・御指導いただいた方々にお礼申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財の保護・研究に広く活用されることを願うものであります。

平成9年3月

財団法人 東大阪市文化財協会

例言

- 1.本書は、仮称新石切駅前ビル建設に伴う植附遺跡の第2次発掘調査報告書である。
- 2.本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が源興産の委託をうけて実施したものである。
- 3.調査は、現地調査を昭和62年2月5日から3月19日まで実施し、以後整理作業をおこなった。
- 4.調査体制は以下のとおりである。(調査時)
 - 事務局長 寺沢勝 (東大阪市社会教育部参事)
 - 庶務部長 下村晴文 (東大阪市教育委員会文化財課)
 - 調査部長 原田修 (東大阪市教育委員会文化財課主査)
 - 庶務部員 安藤紀子 (東大阪市教育委員会文化財課)
 - 調査部員 上野節子 (財団法人東大阪市文化財協会)
 - 調査担当 中西克宏 (財団法人東大阪市文化財協会)
 - 調査補助員 有山淳司、今井健、今井樹彦、藤村守
- 5.本書の執筆は、中西がおこなった。また、遺物実測図の作成は、石割珠貴・西村慶子・八田美代子があたり、為井通子が製図した。
- 6.現地での土色および土器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準じており、記号の表示もそれにしたがった。
- 7.呪符の鑑定・判読については、奈良大学講師木下密運氏に御教示いただいた。明記してお礼申し上げます。
- 8.木製品については、財団法人元興寺文化財研究所に委託して保存処理をおこなうとともに樹種の鑑定を依頼した。
- 9.遺構の写真は、調査担当者が撮影した。出土遺物については、スタジオG Fプロに委託して撮影した。
- 10.調査の実施にあたっては、鴻池組、安西工務店の方々たいへんお世話になった。厚くお礼申し上げます。

本文目次

はしがき

例言

I.調査にいたる経過	1
II.位置と周辺の遺跡	2
III.調査の概要	4
1.調査の方法	4
2.層序	4
3.検出した遺構と遺物	4
a) 近世の遺構	5
b) 中世の遺構と遺物	6
c) 弥生時代の遺構と遺物	32
d) その他の遺物	33
IV.まとめ	35

挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 周辺の遺跡分布図	3
第3図 調査地区南壁断面図	4
第4図 近世遺構実測図	5
第5図 中世から弥生時代の遺構実測図	6
第6図 井戸1出土遺物実測図	7
第7図 井戸1実測図	8
第8図 井戸2実測図	9
第9図 井戸2出土遺物実測図	9
第10図 井戸2出土木製品実測図	10
第11図 井戸3実測図	11
第12図 井戸3出土遺物実測図	12
第13図 井戸3出土木製品実測図	12
第14図 井戸4実測図	13
第15図 井戸4遺物実測図	13
第16図 井戸4出土木製品実測図	14

第17図	井戸6・7・8実測図	15
第18図	井戸6出土遺物実測図	16
第19図	土壌3実測図	17
第20図	土壌3出土遺物実測図	18
第21図	土壌3出土木製品実測図	19
第22図	土壌3出土木製品実測図	20
第23図	土壌3出土木製品実測図	21
第24図	土壌6実測図	23
第25図	土壌6出土遺物実測図	23
第26図	土壌7出土遺物実測図	24
第27図	土壌8実測図	25
第28図	土壌8出土遺物実測図	26
第29図	土壌9実測図	27
第30図	土壌11実測図	28
第31図	土壌11出土遺物実測図	28
第32図	土壌15出土遺物実測図	29
第33図	溝5出土遺物実測図	30
第34図	Pit内出土遺物	31
第35図	土壌1出土遺物実測図	32
第36図	土壌13出土遺物実測図	32
第37図	攪乱層出土遺物実測図	33

表 目 次

第1表	植附遺跡第2次調査 検出遺構の変遷	34
第2表	東大阪市域出土の呪符一覧表	34
第3表	植附遺跡第2次調査 検出遺構一覧表	36

図 版 目 次

図版一	遺構 1.調査風景（南西より） 2.調査区南西部分南北断面
図版二	遺構 1.調査区中央部分近世遺跡検出状況（東より） 2.調査区北側部分中世遺構検出状況（東より）
図版三	遺構 1.調査区中央から南側部分中世遺構検出状況（東より）

		2.調査区南側部分中世遺構掘削状況（東より）
図版四	遺構	1.調査区北側部分中世遺構掘削状況（東より） 2.調査区北側から中央部分中世遺構掘削状況（東より）
図版五	遺構	1.井戸1南北断面 2.井戸2東西断面
図版六	遺構	1.井戸3東西断面 2.井戸3木製品出土状況
図版七	遺構	1.井戸4南北断面 2.井戸7南北断面
図版八	遺構	1.土壌3掘削状況（北より） 2.土壌3南北断面
図版九	遺構	1.土壌3遺物出土状況 2.土壌3遺物出土状況
図版十	遺構	1.土壌6南北断面 2.土壌6掘削状況（東より）
図版十一	遺構	1.溝5掘削状況（東より） 2.土壌11弥生土器出土状況（東より）
図版十二	遺物	井戸1・2・4出土遺物
図版十三	遺物	井戸3出土遺物
図版十四	遺物	井戸2出土木製品
図版十五	遺物	井戸3出土木製品
図版十六	遺物	井戸3・4出土木製品
図版十七	遺物	土壌3出土遺物
図版十八	遺物	土壌3出土木製品
図版十九	遺物	土壌3出土木製品
図版二十	遺物	土壌3出土木製品
図版二十一	遺物	土壌3出土木製品
図版二十二	遺物	土壌3出土木製品
図版二十三	遺物	土壌8出土遺物
図版二十四	遺物	土壌6・溝5出土遺物
図版二十五	遺物	Pit、土壌1・13、攪乱層出土遺物

I. 調査に至る経過

植附遺跡は、東大阪市西石切町を中心にひろがる弥生時代から室町時代の複合遺跡である。本遺跡は、昭和37年に小規模な発掘調査がおこなわれ周知されるようになった。この時の発掘調査では、遺構を確認することはできなかったものの奈良時代以降の土師器・瓦器・土鏡、弥生時代中期の土器類・石器類が出土している。その後、しばらくの間、本遺跡の発掘調査を実施していなかったが、近畿日本鉄道東大阪線の開通後の昭和61年度に本格的な第1次調査を実施している。第1次調査では、鎌倉時代から室町時代の土塼・井戸・溝・柱穴のほか、輸入磁器類を副葬した木棺墓2基、弥生時代中期末頃の合口壙棺墓などが検出され、本遺跡の南側に位置する西ノ辻遺跡の発掘調査で確認している中世集落がさらに北側へ拡大することが判明した。さらに本報告の第2次発掘調査後、昭和63年に第3次発掘調査を実施している。第3次調査では、平安時代から古墳時代の柱穴、古墳時代中期末頃の造り付け竈を付設する竪穴住居1軒を検出している。

昭和61年度、源興産は近畿日本鉄道東大阪線新石切駅に北接する西石切町1丁目に駅前ビルの建設を計画した。当該地は、周知の植附遺跡の推定範囲内にあたっていることと建設予定地の南側の西ノ辻遺跡第10・16次発掘調査で多くの遺構・遺物が確認されている。このため、建設工事に先立って東大阪市教育委員会が昭和61年にビル建設予定地内で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、調査地点から中世の遺物を含む遺構が検出され、先の西ノ辻遺跡からひろがる中世の遺構群の存在することが十分予想された。試掘調査の結果をうけ協議を重ねた結果、ビル建設予定地の全面を発掘調査・記録保存することとなり、源興産の委託をうけた財団法人東大阪市文化財協会が昭和62年2月5日から62年3月19日まで現地調査をおこない、以後、整理作業を実施した。



第1図 調査地点位置図

II.位置と周辺の遺跡

植附遺跡は、大阪府と奈良県の境界をなす生駒山地の西麓にある。現在の行政区画上の地籍では、東大阪市西石切町にあたる。本遺跡は、これまでの発掘調査や西ノ辻遺跡・神並遺跡など周辺の諸遺跡の調査結果から東西500m・南北425mの範囲におよぶものと推定されている。

生駒山地の西側斜面には、西方の平野部にむかって流下する多くの河川がある。山麓部には、これらの河川によって形成された扇状地が形成されている。植附遺跡は、このような生駒山山麓の西側斜面上で音川の流れる辻子谷の南側、標高約10mに位置する。

生駒山西麓部には、本遺跡のほかにも旧石器時代から中・近世にかけての遺跡が多数分布している。以下、時代順に記述をすすめることにする。

本遺跡の東側、標高80m付近に立地する千手寺山遺跡・正興寺山遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器が出土している。また、本遺跡の西方の鬼虎川遺跡でも同種の石器が近年の発掘調査で出土している。

縄文時代の遺跡には、神並遺跡で早期の集石土壌や焼土壌などの遺構を検出している。前期には、海岸線の一部を確認している鬼虎川遺跡がある。中期から晩期の遺跡は、北から日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・西ノ辻遺跡・鬼塚遺跡・縄手遺跡・馬場川遺跡など山麓部各所に点在している。これらのうち日下遺跡では、後期から晩期の住居址とともに土壌墓を環状に巡らせた墓址が検出されている。西ノ辻遺跡では、後期の谷が近年の発掘調査で検出されている。また、縄手遺跡では、後期の竪穴住居が確認されている。

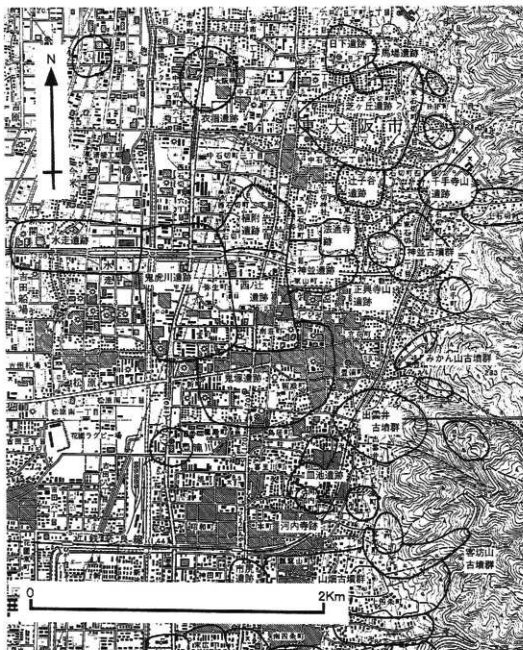
弥生時代の遺跡には、本遺跡と同様に山麓から平野部に傾斜の変換する標高10mから15m付近に立地し、前期から後期まで継続して営まれる鬼塚遺跡・縄手遺跡、中期から後期にかけての芝ヶ丘遺跡・神並遺跡・西ノ辻遺跡、後期からはじまる皿池遺跡がある。また、本遺跡の西方には、前期から後期の鬼虎川遺跡、後期末からはじまる北鳥池遺跡などがある。さらに、標高80m前後の高所に位置する中期の山畑遺跡や後期の岩滝山遺跡などもある。これらの遺跡のうち、神並遺跡・西ノ辻遺跡では、両遺跡を貫流する谷が検出されている。また、鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡遺跡では、多数の方形周溝墓が存在する。両遺跡の墓域は、縄文時代の海岸線付近で明確に分離している。

山麓部に立地する古墳時代の遺跡のうち前期のものは、鬼塚遺跡で小規模な掘立柱建物跡が検出されているのみである。中期には、本遺跡の北側に埴輪を伴う塚山古墳が所在している。また、中期末から後期初頭頃には、山麓部に立地する日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼塚遺跡・縄手遺跡・市尻遺跡、鬼虎川遺跡などで掘立柱建物をはじめとする多くの遺構を確認している。後期には、鬼虎川遺跡で掘立柱建物を検出しているものの中期末から後期初頭まで存在していた山麓部の他の遺跡からは、遺構を検出できていない。これにかわって標高50m以上の地点から横穴式石室を内部主体とする神並古墳群・みかん山古墳

群などの群集墳が多数分布している。

7世紀後半から平安時代には、本遺跡の東側に木積氏の氏寺とされる法通寺のほか河内寺がある。この法通寺周辺にある西ノ辻遺跡・神並遺跡などでは、多くの建物群が確認されている。

鎌倉時代から室町時代には、山麓部にある神並遺跡・西ノ辻遺跡などから溝・井戸・掘立



第2図 周辺の遺跡分布図

柱建物・墓址などの広範囲に拡がる集落跡が検出されている。このうち神並遺跡については、石清水文書に記載されている石清水八幡宮領の神並荘にあてるとの理解もある。さらに本遺跡の西方の水走遺跡でも多くの遺構が確認されている。

III. 調査の概要

1. 調査の方法

植附遺跡第2次発掘調査は、東大阪市西石切町1丁目の仮称新石切駅前ビル建設予定地の全面にわたる800m²を調査対象範囲とした。既述したように試掘調査からみて当調査地には、西ノ辻遺跡第10次・16次調査で確認している遺構群のひろがるのが調査前から十分に予想された。これらの遺構群と第2次調査で検出される遺構との整合性をはかるため調査区内には、国家座標を移設し、これを基準に5mメッシュの区画を設定した。東西方向の基準ラインは、北から順にA・B・Cと仮称し、南北方向の基準ラインは、西から1・2・3と呼ぶことにした。現地における遺構の実測図は、基準ラインにそって測量している。

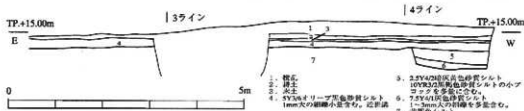
なお、攪乱部分・耕土・床土は、機械を使用して掘削し、以下を人力掘削によって調査をすすめた。

2. 層序

攪乱部分・耕土・床土を機械によって除去すると、調査地区南西コーナー部分以外では、遺物包含層をまったく検出することができず、黄褐色シルトの地山を検出した。これは、工場の建設などによって土地の平坦化・攪乱されているためである。調査地区南西コーナー部分には、地山を削り込んで造作した段がある。段の下部から斜面にかけては、2層の堆積層がある。下層(第6層)は、1~3mmの礫を含む灰色砂まじりシルト層で、層厚12cmを測る。遺物は、検出できなかった。上層(第5層)は、地山の小ブロックを多量に含む暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層で、整地層である。層厚28cmを測る。遺物は、出土していない。

3. 検出した遺構と遺物

調査地区内には、第2次調査前に伸線工場が存在していたため調査区の中央やや北寄り部分と中央やや南寄り部分で東西方向と南北方向に延びる巾4~5mの工場の基礎があり、大きく攪乱をうけている。遺構は、すべて攪乱部分以外の地山上面で検出している。攪乱部分から細片化した土器が出土していることから、すでに消滅している遺構も多数あるものと推定で



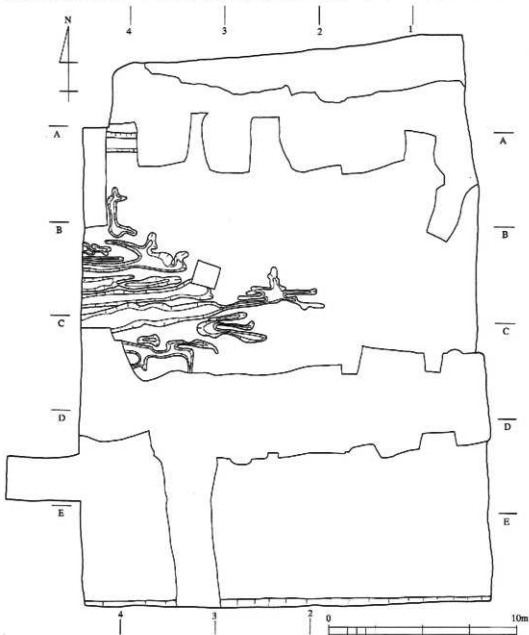
第3図 調査地区南壁断面図

きる。確認できた遺構の時期は、遺構の重複関係や出土資料から近世・鎌倉時代～室町時代・弥生時代の3時期に大きく分けることができる。以下各時期ごとに検出している遺構・遺物について記述してゆくことにする。

なお、鎌倉時代から室町時代と弥生時代の遺構の概略は、第3表を参照して頂きたい。

a) 近世の遺構

近世の遺構は、調査区の中央部分から西寄り部分で溝を7条確認している。7条の溝は、ほぼ東西方向に平行しているものの、南北の幅は、極めて不整形である。また、溝は互いに近



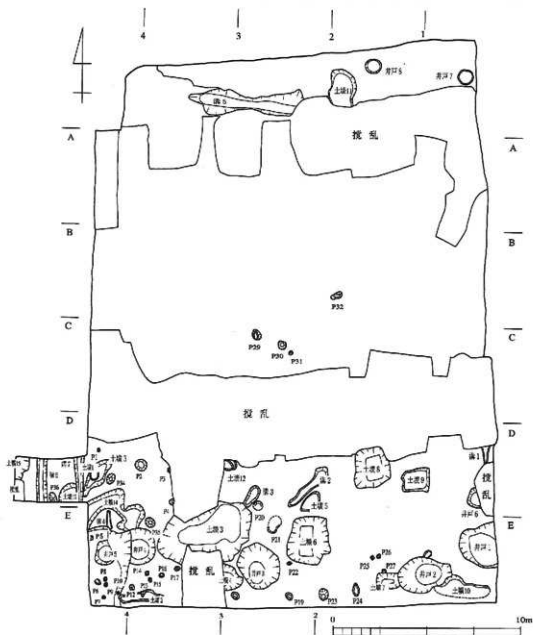
第4図 近世遺構実測図

接しており、東から西に向かって深さを増している。溝内の埋土は、すべて5Y3/6オリーブ
 黒色砂まじりシルトである。埋土内からは、細片化した微量の近世以降の染付けや中世の土
 器片が出土している。

このような溝の形状や埋土・出土遺物、調査地周辺でのこれまでの調査結果などからみてこ
 れらの溝は、近世の鋤跡と考えることができる。

b) 中世の遺構と遺物

今回の第2次調査では、鎌倉時代から室町時代の遺構と遺物を最も多く確認している。検出



第5図 中世から弥生時代の遺構実測図

している遺構には、井戸8基・土壇13基・溝7条・ピット36基がある。調査地区内は、前述したとおり著しい削平をうけている。このため検出している遺構には、井戸や土壇などの深い遺構が多く、浅い遺構はすでに消滅しているものも多数あるものと考えることができる。

検出できた中世の遺構の分布は、調査地区の南半部に大多数が存在し、中央から北側部分では、井戸2基・土壇1基・ピット4基を確認したにとどまる。

井戸や土壇内からは、多量の遺物が出土しているものの、小規模の土壇やピットからは、ほとんど遺物が出土していない。これらの遺構については、遺構間にみられる重複関係や掘土の特徴などから当期のものと判断した。以下では、遺物の出土量の多い井戸・土壇・溝から個別に記述をすすめてゆく。

各遺構からは、土師器皿、瓦器碗・皿などが多数出土している。これらについては、記述の重複を避けるために以下のように分類して呼称する。他の器種については、個々に記述してゆく。

瓦器碗A 口縁端部内面に沈線をもつもので、所謂大和型の碗。高台をもつものやまたないものがある。

瓦器碗B 口縁端部を丸くおさめるもので所謂泉型の碗。高台はない。

瓦器皿A 口縁端部に内傾する面をもつもの。

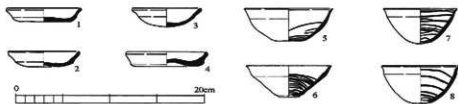
瓦器皿B 口縁端部を丸くおさめるもの。

土師器皿 口径10cm未満のものを小皿、10cm以上のものを中皿とする。小皿・中皿ともに底部および口縁端部の形態によって以下のように細分する。

- A 丸底を呈するもので、口縁端部がつまみ上がり、やや尖り気味のものをA1と口縁端部を丸くおさめるものA2がある。
- B 平底のもので口縁端部をつまみ上げ、尖り気味におさめるものB1と口縁端部を丸く仕上げるものB2がある。
- C 上げ底を呈するもので、口縁端部がつまみ上がり、やや尖り気味に仕上げるものC1と口縁端部を丸く仕上げるものC2がある。

井戸1

井戸1は、調査区東南部分に位置する。平面形態は、井戸の東側1/3が調査区外へ延びるものの楕円形を呈する。検出面での規模は、東西1.9m・南北2.4m・深さ1.8mを測る。井戸の断面形は、南壁がほぼ垂直であるのに対して、西側および北側は、内側にやや傾斜する。井戸内は、深さ1.8mまで掘り下げたが、壁面の一部が崩壊したため以下の調査を断念した。井



第6図 井戸1出土遺物実測図

戸内の堆積層は、3層に分層できる。3層の堆積土は、いずれも北側から流入している。このうち、第1層は、地山の黄褐色シルトのブロックを多量に含むことから人為的な埋め土と考えることができる。第2・第3層は、多量の炭・焼土を含むことから井戸の廃絶後に堆積したものと考えることができる。井戸内には、施設はなく、素掘りと思われる。遺物は、おもに第1層から細片化した土器類が少量出土している。

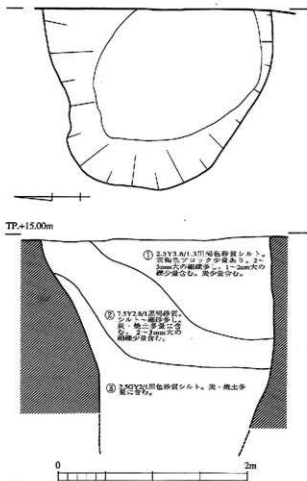
井戸1からは、土師器小皿A2・B1・C2、釜、瓦器碗A、陶器、白磁碗、青磁碗などが出土している。このうち最も量の多いのは、土師器小皿類である。これらの出土遺物のうち図示できるものには、瓦器碗と土師器小皿がある。

瓦器碗A(5~8)は、口径9.5cm前後・器高約3.5cmの小型のもののみである。底部には、形骸化した高台を貼り付けるもの(6)と丸く仕上げるもの(5・7・8)がある。内面には、見込から体部にかけて粗い渦巻き状のヘラミガキ調整を施す。いずれも器壁は、極めて薄手である。

土師器小皿には、A2(3)・B1(1)ほか底部のくぼむC2(2・4)を含む。土師器小皿は、いずれも口縁部内外面をヨコナデ調整で仕上げる。

このような出土遺物の特徴から井戸1の埋没時期は、14世紀中から後半とすることができる。井戸2

井戸2は、調査区東南部分1F地区、井戸1の西約1mに位置する。井戸2は、後述する土坑7・10、ピット28と重複している。これらの遺構のなかで井戸2は、切り合い関係からみてもっとも新しい時期に掘削されている。井戸2の平面形態は、東西方向に長い楕円形を呈する。また、断面形は西・南・北壁が内側に直線的に傾斜し、東壁は深さ約30cmの位置で段をなし、以下でほぼ垂直に掘られる。検出面での規模は、東西2.8m・南北1.9m・深さ0.95m以上を測る。井戸内は、深さ約95cmまで掘り下げたものの壁面の崩壊が著しく、以下の調査を断念



第7図 井戸1実測図

した。井戸内の堆積層は、6層に分層できる。これらの堆積層のうち第1層から第4層は、炭・焼土を多量に含み、井戸廃絶後に堆積したものである。また、第5・6層は、炭・焼土をまったく含まない砂まじりシルト層である。このように井戸2の堆積層は、大きく上層と下層に分けることができる。このような堆積状況であることから出土遺物は、上層と下層に区別して取り上げている。

出土遺物には、上層から細片化した土器類・瓦類・砥石、下層から土器類をはじめ瓦類・鉄製品・木製品などがある。

上層出土遺物

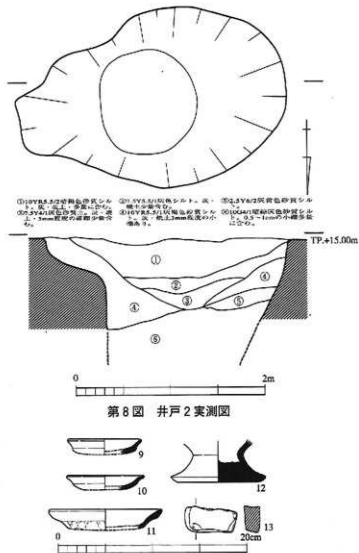
井戸2上層からは、瓦器碗・釜・三足釜・小皿、土師器皿・釜、須恵器鉢、陶器、青磁、砥石、平瓦などが出土している。いずれも細片化しており図化できるものは、少ない。土師器皿には、小皿A2(9・10)と中皿A2(11)がある。両者とも口縁部内外面をヨコナデ調整する。(12)は、陶器底部片である。

砥石(13)は、砂岩製である。研面は4面あり、研磨により中央部分で緩く湾曲する。現存長5.4cm・幅2.6cm・厚み1.6cmを測る。

下層出土遺物

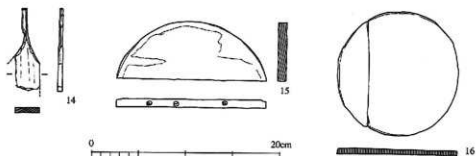
井戸2下層からは、瓦器碗・釜・甕・火舎・播り鉢、土師器皿・釜、須恵器、陶器、平瓦、鉄製品のほか容器底板や用途不明の木製品などが出土している。これらのうち、図示できるものは木製品のみである。

容器底板(15・16)は、円形を呈するもので2点検出している。(15)は、復原直径16.4cm・厚0.8cm。破面には、木釘を打ち込んだ補修孔が3ヶ所認められる。(16)は、直径12.6cm・厚0.6cmを測る。結合孔・釘穴はない。



第8図 井戸2実測図

第9図 井戸2出土遺物実測図



第10図 井戸2出土木製品実測図

用途不明木製品(14)は、残存長8.6cm・幅2.6cm・厚0.4cmを測る。

以上のような出土遺物の特徴から井戸2の埋没時期は、13世紀末から14世紀初め頃と考えることができる。

井戸3

井戸3は、調査区中央の南端部分3F地区に位置する。検出面での規模は、東西2.2m・南北約2.5m・深さ1.8m以上ある。平面の形態は、ほぼ円形を呈する。また、断面形は、上部約1mが内側に傾斜し、以下の部分が垂直になる。井戸内は、深さ1.8mまで人力によって掘り下げたものの断面および壁面の崩壊のため以下の調査を中止した。井戸内の堆積層は、3層に分層できる。これらの堆積層は、土質の特徴から上・下層に大別できる。第1層が上層にあたり、地山の黄褐色シルトのブロックを多量に含む粘質シルト層である。井戸内には、施設はなく、素掘りである。遺物は、上層から土師器・磁器類・瓦類・土錘が、下層からは土器類のほか瓦類・木製品・紙石などが出土している。

上層出土遺物

井戸3上層出土遺物には、瓦器類B・釜・三足釜、土師器小皿A2・C2・中皿A2・釜、須恵器鉢、青磁碗、白磁碗のほか灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、平瓦、土錘などがある。

瓦器類(23・24)はすべてB類で、底部の高台も省略されたもののみである。体部内面に粗い渦巻状のヘラミガキ調整を施すものとヘラミガキ調整をまったく加えないものもある。

土師器の小皿には、A2(17・19~21)C2(18)がある。また、中皿には、A2(22)が認められる。いずれも口縁部内外面をヨコナデ調整で仕上げる。

須恵器鉢(25)は、口縁部上端が上方につまみ上がる形態のものである。体部内面は、使用による摩滅によって平滑である。

灰釉陶器碗(26)は、底部に回転ヘラケズリ調整後高台を貼り付ける。高台の断面形は方形を呈し、外方に張り出す。

土錘は1個体出土している。(27)は土師質で、紡錘形を呈する。全長3.4cm・最大径0.8cmを測る。

下層出土遺物

井戸3下層からは、瓦器碗B・釜・三足釜、土師器小皿A2・C2、釜、須恵器鉢・甕、陶器、白磁、砥石、丸瓦、平瓦などのほか、下駄1点・呪符1点・容器底板1点の木製品が出土している。

瓦器碗(31~33)は、上層出土の瓦器碗と同様にすべてB類である。体部内面にはヘラミガキ調整を加えて仕上げしており、ヘラミガキ調整を省略するものはない。

土師器小皿には、A2(28・30)、C2(29)が認められる。釜(34)は、口縁部が短く外反し、端部を内側に巻き込む。肩部には、断面台形を呈する薄手の鈔を巡らす。鈔の最大径は、口径をわずかに上回る程度で形骸化が著しい。体部の器壁は、極めて薄く仕上げられている。

容器底板(35)は、円形を呈するもので直径4.8cm・厚み0.6cmを測る小型のものである。

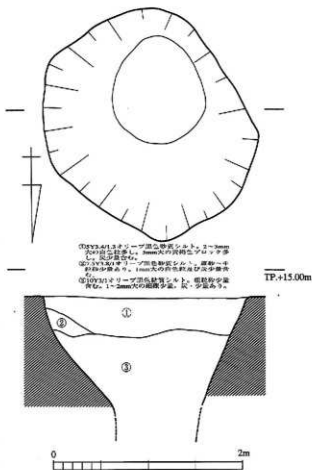
下駄(36)は、一木から作製する連歯下駄である。平面形は、台の中央から両端にかけて幅を狭め、前後の端を直線状にする。鼻緒の位置は、前臺を台の中央部に、後臺を歯の内側にあけている。台の上面には、使用に際しての摩擦による足形の痕跡が明瞭に残る。歯のうち前歯は、欠損している。後歯の断面形は、長方形を呈する。残存長21.4cm・幅9.2cm・残存高4.3cm。樹種は、ヒノキである。

呪符(37)は、細長い板の上端を尖らせ、下端を直線状に切り落としたものである。表面には、上端から中央部分に「百門□般若経□」と判読できる墨書が残る。さらに下方にも、墨跡が認められるものの判読することはできない。表面には、記載はない。全長16.2cm・幅3.0cm・厚み0.2cmを測る。樹種は、ヒノキである。

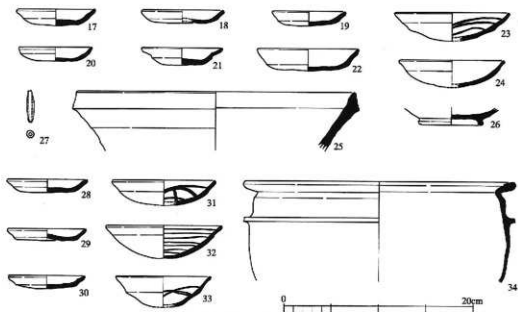
上記のような出土遺物から井戸3の埋没時期は、上層が14世紀中から後半、下層が、14世紀前から中頃とすることができる。

井戸4

井戸4は、調査区南西部4F地区、前述した井戸3の西側約4.5mの位置にある。井戸の西側



第11図 井戸3実測図



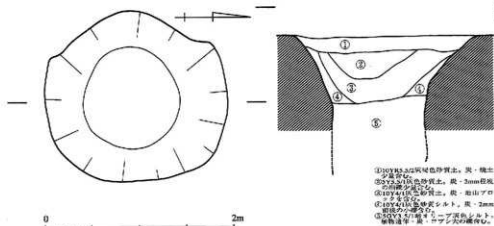
第12図 井戸3出土遺物実測図

部分を段によって削られているものの検出面での規模は、東西1.8m・南北1.8m・深さ1m以上ある。平面形は、円形を呈する。断面の形態は、上部の約0.6mが内側に傾斜し、以下の部分がほぼ直線的に掘り下がる。井戸内は、施設をもたず素掘りである。井戸内は、約1mまで掘り下げたが、壁面の崩壊する恐れが生じたため以下の調査を断念した。井戸内における堆積層は、上・下層に大別することができる。上層の第1～4層は、炭・焼土や地山のブロック土を含む、井戸廃絶後の堆積層

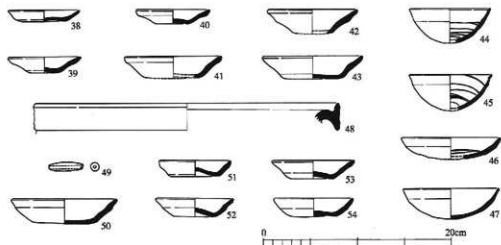


第13図 井戸3出土木製品実測図

で井戸の周西から中央に向かって斜めに堆積する。下層の第5層は、植物遺体を含む暗オリーブ灰色シルト層ではほぼ水平堆積している。遺物は、上層から細片化した土器類のほか瓦類などが、下層からは土器類をはじめ陶磁器類・木製品・漆器が出土している。



第14図 井戸4実測図



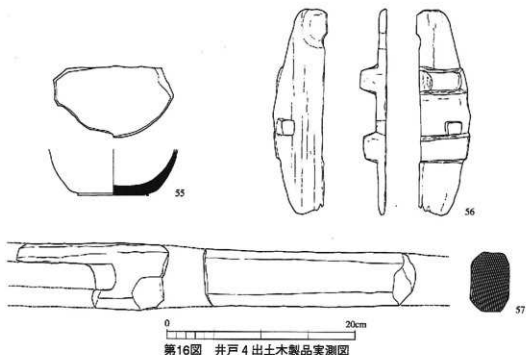
第15図 井戸4出土遺物実測図

上層出土遺物

井戸4の上層からは、瓦器碗A・B・釜・三足釜・火舎、土師器小皿A2・C2・中皿C2、須恵器鉢・甕、陶器甕、丸瓦、平瓦のほか弥生土器やサヌカイト片がある。これらのうち、図示できるものは極く少量である。

瓦器碗には、A類(44・45)とB類(46・47)がある。A類は、口径8.5cm前後の小型のもので底部の高台を省略している。体部内面には、渦巻き状のヘラミガキ調整を加える。B類は、口径10cm前後でA類に比べるとやや大型である。体部内面には、渦巻き状のヘラミガキ調整を加えるものとヘラミガキ調整を施さないものが認められる。

土師器小皿は、A2(38)とC2(39～43)が出土している。このうち出土量の多いのは、C2である。C2の器壁は、A2よりやや厚手に仕上げられる。口縁部内外面の調整法は、ヨコナデ調整である。



第16図 井戸4出土木製品実測図

陶器の甕(48)は、口縁端部を上下に拡張し広い面を構成する。

下層出土遺物

井戸4下層からは、瓦器碗・皿・火舎・釜、土師器小皿C2・中皿B2、釜、須恵器、陶器甕、青磁碗、土錘、下駄および用途不明の木製品、漆器碗などが検出されている。これらの出土土器のうち図化可能な資料は、極く少量にすぎない。

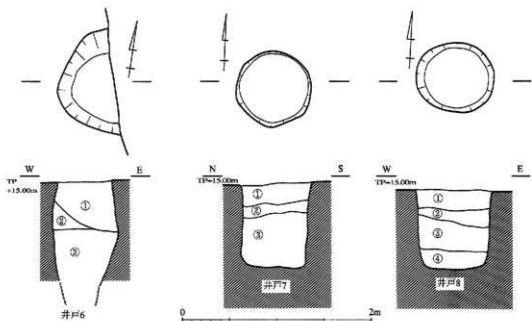
土師器小皿(51~54)は、すべてC2である。また、中皿(50)は、B2である。口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。

土錘(49)は、土師質で紡錘形を呈する。全長3.6cm・最大径0.9cmを測る。1個体のみ出土。

漆器碗(55)は、やや深めの体部から断面方形の低い高台をもつ底部につづく。口縁端部は欠損する。器体の内外面は、木地に直接黒漆をかける。

下駄(56)は、中央から右半分の残存するもので一木から削りだした通歯下駄である。平面形は、台の中央から両端にかけて幅を狭め、前後両端を直線状にする。鼻緒の位置は、前臺を台の中央部に、後臺を歯の内側にあけている。前臺の平面形態は、円形を呈するのに対し、後臺は方形をなす。台の上には、使用時の摩擦による足形の痕跡が明瞭に残る。歯は、台とほぼ同じ幅で断面台形を呈する。残存長21.6cm・残存幅5.0cm・高3.2cm。樹種は、ヒノキ?である。

(57)は、用途不明の木製品である。製品は棒状で面取りを施し、断面形が、六角形を呈す



①PY318 灰褐色の粘り土、厚さ約1.0cmの層状多層。②PY243 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。③PY244 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。④PY245 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑤PY246 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑥PY247 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑦PY248 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑧PY249 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑨PY250 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑩PY251 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑪PY252 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑫PY253 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑬PY254 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑭PY255 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑮PY256 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑯PY257 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑰PY258 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑱PY259 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑲PY260 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑳PY261 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉑PY262 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉒PY263 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉓PY264 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉔PY265 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉕PY266 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉖PY267 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉗PY268 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉘PY269 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉙PY270 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉚PY271 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉛PY272 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉜PY273 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉝PY274 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉞PY275 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉟PY276 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊱PY277 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊲PY278 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊳PY279 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊴PY280 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊵PY281 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊶PY282 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊷PY283 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊸PY284 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊹PY285 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊺PY286 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊻PY287 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊼PY288 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊽PY289 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊾PY290 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊿PY291 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。①PY318 灰褐色の粘り土、厚さ約1.0cmの層状多層。②PY243 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。③PY244 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。④PY245 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑤PY246 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑥PY247 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑦PY248 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑧PY249 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑨PY250 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑩PY251 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑪PY252 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑫PY253 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑬PY254 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑭PY255 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑮PY256 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑯PY257 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑰PY258 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑱PY259 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑲PY260 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。⑳PY261 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉑PY262 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉒PY263 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉓PY264 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉔PY265 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉕PY266 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉖PY267 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉗PY268 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉘PY269 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉙PY270 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉚PY271 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉛PY272 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉜PY273 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉝PY274 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉞PY275 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㉟PY276 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊱PY277 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊲PY278 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊳PY279 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊴PY280 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊵PY281 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊶PY282 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊷PY283 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊸PY284 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊹PY285 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊺PY286 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊻PY287 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊼PY288 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊽PY289 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊾PY290 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。㊿PY291 灰褐色の粘り土、厚さ約0.5cmの層状多層。

第17図 井戸6・7・8実測図

る。また、棒の一部分には、ほぞ穴状に削った部分が残存する。幅6.0cm・厚み4.0cmを測る。

既述してきたような出土遺物の特徴から井戸4の埋没時期は、上層が14世紀後半、下層が14世紀前半代と考えることができる。

井戸5

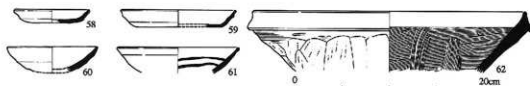
井戸5は調査区南西部分5F地区、井戸4の西約1mに位置する。井戸の東側は、段によってその一部分を削られている。検出面での規模は、東西約1.2m・南北約1.3m・深さ2.68m以上を測る。平面形態は、ほぼ円形を呈する。井戸内には、施設をもたず素掘りである。調査の途中で断面が崩壊したため断面図を作成することができなかった。

井戸5出土遺物には、瓦器椀、土師器皿・釜、須恵器、陶器、青磁椀などがある。出土遺物は、いずれも細片化しており図示できるものはない。

井戸5の埋没年代は、出土遺物から鎌倉時代から室町時代頃と推定できる。

井戸6

井戸6は調査区東南部分1E地区、既述した井戸1の北側約1mに位置する。東側半分を掘削によって削平されているものの、検出面での規模は、東西0.6m以上・南北1.1m以上を測る。井戸1〜5にくらべ極めて小型である。平面形は、ほぼ円形を呈するものと思われる。断面は、ほぼ垂直に掘られる。井戸内に施設はなく、素掘りである。調査途上に断面が崩壊したため、深さ1m以下の部分の人力による掘削を断念した。掘削部分の堆積層は、3層に分層できる。



第18図 井戸6出土遺物実測図

井戸6出土遺物には、瓦器碗B・播り鉢、土師器小皿A2・中皿B2・釜、須恵器、陶器播り鉢、平瓦がある。これらの出土遺物のうち図化できるものは、5点にすぎない。

瓦器碗(60・61)は、B類が認められる。体部内面に粗雑な渦巻き状のヘラミガキ調整を施すものとヘラミガキ調整のまったくみられないものがある。播り鉢(62)は、直線的にひらく体部からつまみ上げ気味にたつ口縁端部につづく。体部外面は、ヘラケズリ調整によって仕上げる。体部内面は、横方向のハケメ調整後スリ目を加える。

土師器小皿(58)の形態はA2に、中皿(59)は、B2に分類できる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。

以上のような出土遺物から井戸6の埋没時期は、14世紀前半頃から中頃とすることができる。井戸7

井戸7は、調査区北東部分1A地区に位置している。検出面での規模は、東西0.8m・南北0.8m・深さ0.96mを測り、前述した井戸6と同様に小型で浅いものである。底面の深さは、T.P.+14.15mである。平面形態は、円形を呈する。断面は、ほぼ垂直である。底面は、ほぼ平坦な面を呈する。井戸内には施設はなく、素掘りである。井戸内の堆積層は、3層に分層でき、いずれも水平堆積する。堆積層のうち第1・2層は、地山のブロック土を多量に含むことから人為的な埋め土と考えることができる。井戸内からの出土遺物はない。このため、井戸7の埋没時期および築造時期については、明確にできない。

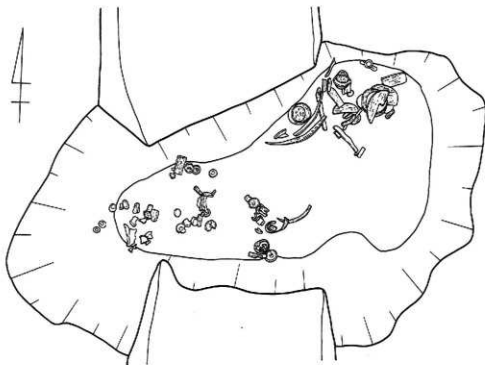
井戸8

井戸8は、調査区の北東部分2A地区に位置し、前述した井戸7の北約5mにある。検出面における規模は、東西0.8m・南北0.7m・深さ0.84mを測り、井戸6・7とともに小規模で浅い。底面の深さは、T.P.+14mである。平面形態は、円形を呈する。断面は、ほぼ垂直に掘られる。底面は平坦な面をなす。井戸内に施設は認められず、素掘りである。井戸内の堆積層は、4層に分層でき、いずれもほぼ水平に堆積する。このうち、第1～3層には、地山の小ブロックを多量に含むことから人為的な埋め土と考えることができる。井戸8からは、細片化した土師器・須恵器を微量検出しているのみで図示しえる資料はない。

出土遺物から、井戸8の埋没年代は、鎌倉時代から室町時代頃と推定できる。

土壌2

土壌2は、調査区南西隅部分4F地区に位置する。土壌2は、pit12・pit13および段と重複している。これらの遺構のなかで土壌2は、それぞれの切り合い関係から最も古く位置づけるこ



TP.+15.00m



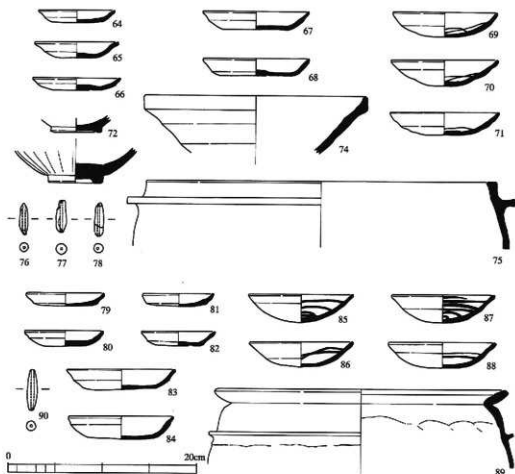
第19図 土壌3実測図

とができる。検出面での規模は、東西2.5m・南北0.5m・深さ0.24mを測る。平面形態は、長円形を呈する。断面形は、U字形をなす。土壌2から出土している遺物には、瓦器柄、土師器、平瓦がある。いずれも細片化しており、図化できるものはない。

出土遺物から土壌2は、13世紀末頃のものだと推定できる。

土壌3

土壌3は、調査区の南西部分にあたる4F地区に位置している。土壌の中央部分は、南北方向の攪乱によって底面まで削平を受けている。検出面での規模は、東西4.5m・南北3.1m・深さ0.9mを測る。平面形態は、攪乱によって変形しているものの本来は、東西方向を長軸とする長方形を呈する。断面形は、逆台形を呈する。底面は、ほぼ平面をなす。土壌内の埋土



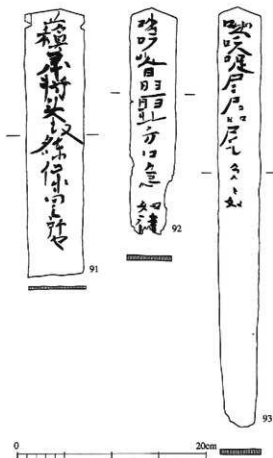
第20図 土壌3出土遺物実測図

はほぼ水平に堆積する4層に分層できる。これらの埋土は、土質の特徴によって上層と下層に大別できる。上層にあたる第1層は、焼土を含む暗灰黄色砂質土である。下層の2~4層は、植物遺体と炭を含む暗緑灰色シルト層である。出土遺物は、この上層と下層に区別して取り上げている。上層からは、小破片化した土器類・陶磁器類・瓦・土鍾が出土している。下層からは、完形品を含む土器類・陶磁器類・瓦などのほか木製品・漆器が多量に出土している。これらの下層出土遺物の出土状態を記すと、土器類は、土壌底面の西寄りから中央部分でまどまって出土している。一方、木製品や漆器は、土壌底面から北東部分に集中している。後述する呪符(91)は、土壌の底面からやや離れ、先端を南西に向け、文字の記された面が上を向いた状況で出土している。

上層出土遺物

土壌3の上層からは、瓦器類B・釜・三足釜、土器小皿A2・C2・中皿B2・釜、須恵器鉢、白磁碗、陶器、灰釉陶器、丸瓦、平瓦、土鍾が出土している。

瓦器類(69~71)は、いずれもB類で、底部が丸底の形態を呈する。体内内面には、粗雑



第21図 土壌3出土木製品実測図

によって仕上げられる。体部内面は、使用によって摩滅し平滑である。

土鍾（76～78）は、3個体出土しているもののすべて欠損しており、全形態の判明するものはない。焼成は、土師質である。

下層出土遺物

土壌3の下層出土遺物には、瓦器碗B・三足釜・釜・甕、土師器小皿A2・中皿A2・釜、須恵器鉢・甕、陶器、白磁碗、青磁碗、丸瓦、平瓦のほか曲物・櫛・呪符・播り粉木・底板、漆器碗・皿などの木製品がある。

瓦器碗（85・88）は、上層出土の瓦器碗と同様にすべてB類で底部の高台を省略している。体部内面には、渦巻き状のヘラミガキ調整を施している。口縁部内外面は、ヨコナデ調整を加えて仕上げる。体部下半には、ユビオサエの残るものがある。

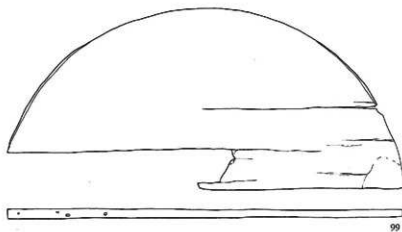
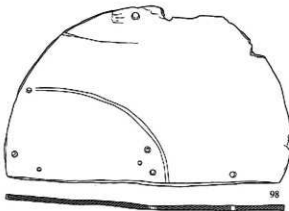
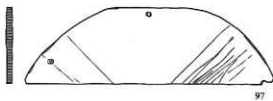
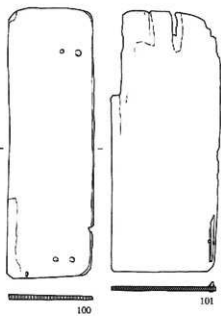
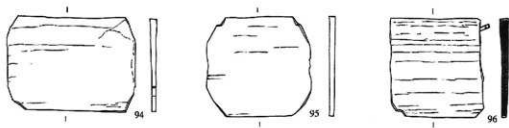
土師器小皿は、すべてA2（79～82）である。また、中皿（83・84）の形態もすべてA2である。中皿の出土量は、小皿と比較すると極く少量である。両者の口縁部内外面は、ヨコナデ調整で仕上げられる。釜（89）は、内灣する体部から外灣気味にのびる口縁部につづく。

なヘラミガキ調整を渦巻き状に施す。口縁部の内外面は、ヨコナデ調整で仕上げている。体部の下半部には、ユビオサエ痕が残る。釜（75）は、やや内傾する口縁部の破片で端部に平端な面を構成する。鍋は、短くほぼ水平方向に短く突出し、断面の形態が方形を呈する。口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。

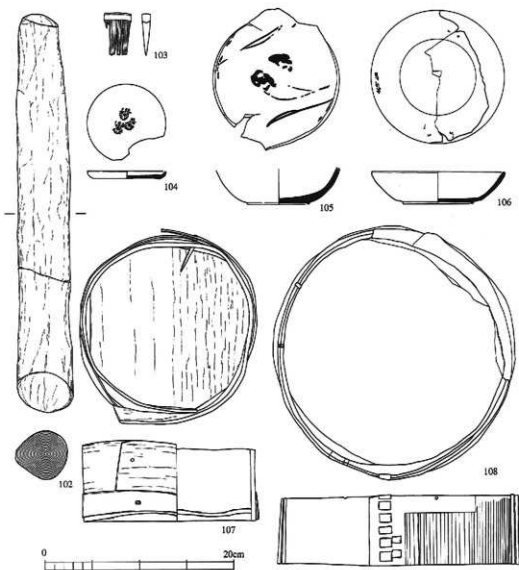
土師器小皿には、A2（64・65）、C2（66）がある。中皿は、B2（67・68）が出土している。中皿の出土量は、小皿に比べ極めて少量にすぎない。小皿・中皿とも口縁部内外面は、ヨコナデ調整を加えている。

白磁碗（72・73）は、底部の破片であり全形態の判明するものではない。高台は、体部からの削り出しによって製作している。

須恵器鉢（74）は、口縁部から体部の破片で、底部を欠損する。口縁端部は、上方につまみ上げられ垂直にちかい面をなす。口縁部の内外面は、ヨコナデ調整



第22図 土壙3出土木製品実測図



第23図 土坑3出土木製品実測図

口縁端部は、内側に巻き込み肥厚する。鋳は、やや上向きに短く突出し、断面方形を呈する薄手のつくりである。口縁部の内外面は、ヨコナデによって調整する。

土錘(90)は、1面体分出土している。焼成は、土師質である。全長4.1cm・最大幅1.0cm・内径0.3cmを測る。

(91~93)は、呪符である。(91)は、細長い板材の上端を尖らせ、下端部を直線状に切っている。上端から約1.0cm下方の両側面には、左右対称に三角形の切り込みを施す。板の幅は、上端から下端までほぼ同一である。表面には、「蘇民将来之孫住宅所也」と判読できる墨書が残存する。裏面への記載は、認められない。全長14.1cm・幅3.0cm・厚み0.2cmを測る。

樹種はスギである。(92)は、板材を用いたもので上部の形態が(91)と同様に尖っている。下部は、欠損するため形態不明。板の幅は、上端から下部部にむかって徐々に細くなる。表面には、「㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿」と判読できる墨書がのこる。裏面への記載は、認められない。残存長12.0cm・残存幅2.4cm・厚み0.3cmである。樹種はスギ?である。(93)は、薄板の上端を尖らせているのに対し、下端を丸く仕上げている。板の幅は、上端から下端にむかってわずかに狭くなる。表面の上半部には、「㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿」と判読できる墨書が残存する。裏面には、墨書の復跡が認められない。全長22.2cm・中央部分の幅2.2cm・厚み0.3cmを測る。樹種はヒノキである。

(94~99)は、容器底板である。これらの平面形態は、小型で方形を呈し、隅部分を斜めに切り落としたもの(94~96)・大型の方形を呈するもの(100・101)・円形のもの(97~99)がある。(94~96)の隅部分の仕上げには、四隅とも斜めに切り取るもの(94)、二方を斜めに、二方を斜めに落とした後さらに小さく三角形の挟りを加えるもの(95)、二方を四角のまま、二方を斜めに切り落とした後さらに一方のみに挟りを加えるもの(96)がある。結合孔は、3点ともない。(96)の側面の端部分には、断面方形を呈する木釘が斜めに打ち込まれている。(94)は、全長13.2cm・幅9.7cm・厚み0.6cmである。(95)は、全長10.6cm・幅10.4cm・厚み0.6cmを測る。(96)は、全長9.9cm・幅10.4cm・厚み0.8cmを測る。(97~99)は、平面円形を呈するものである。(97)は、外周に沿って結合孔が3ヶ所残存している。底面には、平行する刃物傷が認められる。復原直径32cm・残存幅8.0cm・厚み0.6cm。(98)は、外周に沿って結合孔が4ヶ所残存している。また、底板の破面に沿って5ヶ所の補修孔が残存する。底板の一部には、焦げ跡がのこる。復原直径29.6cm・残存幅19.1cm・厚み0.4cmを測る。(99)には、結合孔の痕跡は認められない。破面には、小さな補修孔が4ヶ所残存している。復原直径34.2cm・残存幅18.3cm・厚み0.9cmを測る。(100)は、方形を呈するもので、底板の端部分に2孔1対の結合孔が2ヶ所と皮紐の残存する結合孔1ヶ所がある。残存長28.4cm・残存幅8.9cm・厚み0.4cmを測る。(101)は、(100)と同様に方形を呈するもので、底板の端には、断面方形を呈する細い棒材が皮紐によって結合された状態を残している部分がある。残存長17.5cm・残存幅11.4cm・厚み0.5cmを測る。

(102)は、播り粉木である。棒材は、断面円形を呈し先端から徐々に太くなり、一木口面が片減りしている。棒材のやや上よりの握り部分は、使用によって擦り減っている。全長42.0cm、中央部分での直径5.4cmを測る。材には、広葉樹を使用している。

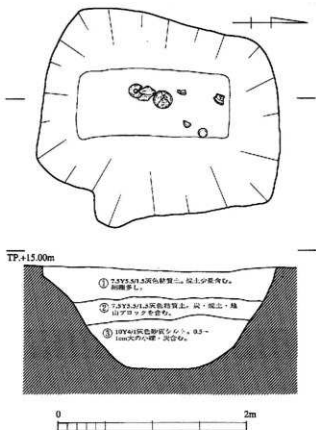
(103)は、櫛の破片である。小破片のため全形態は、不明であるが、残存部分の形態から長方形を呈する横櫛と想定できる。歯の切り通し線は、直線である。現存幅3.8cm・高4.4cm・厚0.9cmである。

漆器には、皿1点と椀2点が出土している。皿(104)は、広い平底の底部から短くたつ口縁部につづく。口縁端部は、丸くおさめる。器体の内外面は、木地に直接黒漆をかける。椀(105・106)は、やや深めの体部から低い断面方形の高台をもつ底部につづく。底部は、平

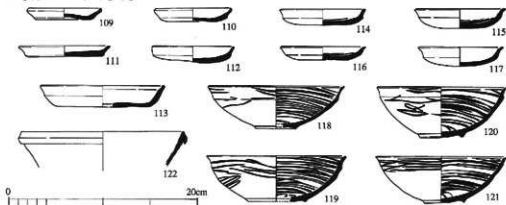
底を呈する。口縁端部は丸くおさめる。器体の内外面は、木地に直接黒漆をかける。

曲物は、図化できるものが2点出土している。両者とも平面円形を呈する。(107)は、円形の底板を側板の内側にはめ込み、さらに、側板の外側に幅の狭い帯状の薄板を巡らせ、このうえから木釘を打ち込んで結合している。直径18.2cm・高9.4cm・厚0.6cmを測る。側板の樹種は、ヒノキである。(108)は、側板のみで底板は、残存しない。側板は、皮紐によって綴じられている。綴じ方は、2列前外6段後内2段綴じである。側板の内面には、縦方向に平行するケビキを加える。直径25.0cm・高9.4cm・厚0.5cmを測る。樹種は、ヒノキである。

このような出土遺物の特徴から土壌3の堆積時期は、上層が14世紀中頃、下層が14世紀前半頃と考えることができる。



第24図 土壌6実測図



第25図 土壌6出土遺物実測図

土壌4

土壌4は、調査区南西部分の3F地区、土壌3の南側に位置する。土壌3と同様に南北方向の擾乱によって西側部分を削平されている。検出面での規模は、東西1.1m・南北1.4m・深さ0.35mを測る。平面形は、ほぼ円形を呈する。断面形は、緩く内傾する。埋土は、2.5Y3/1黒褐色砂まじりシルトである。遺物は、微量の土師器片が出土しているのみで図示できるものはない。

土壌4の堆積時期は、出土遺物が少ないため不明である。

土壌5

土壌5は、調査区の南側のほぼ中央にある。検出面での規模は、東西0.9m・南北1.2m・深さ24cmを測る。平面形は、三角形を呈する。土壌内には、暗灰青色砂まじりシルトが堆積しており、土師器釜の細片が出土している。

出土遺物から土壌5の埋没時期は、鎌倉時代から室町時代と推定できる。

土壌6

土壌6は、調査区の南側のほぼ中央部分にあたる3E地区に位置する。既述した土壌5からは、南に1mの地点になる。検出面での規模は、東西2.5m・南北2.4m・深さ1.0mを測る。平面形態は、長方形を呈する。断面形は、逆台形をなす。底面は、東西0.7m・南北1.6mの長方形で平端な面である。土壌内の堆積層は、3層に分けることができる。このうち上層の第1・2層は、灰色砂質土層で炭・焼土・地山のブロックを含む。下層の第3層は、灰色砂質シルト層である。上層からは、小破片化した瓦器・土師器・須恵器などの土器類をはじめ陶磁器類・瓦などが出土している。また、下層からも上層と同様の種類の遺物が出土している。これら下層出土遺物のうち土壌底面直上からは、ほぼ完形の瓦器碗3点がまとも出土している。

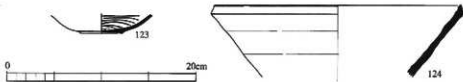
上層出土遺物

土壌6上層出土遺物には、瓦器碗・皿、土師器皿・釜、須恵器甕・鉢、陶器、白磁碗、丸瓦、平瓦、弥生土器などがある。しかし、いずれも著しく細片化しており、図示できるものはない。

下層出土遺物

土壌6下層出土遺物には、瓦器碗A・皿A、土師器小皿A2・B2・C1・中皿B2・釜、須恵器甕、白磁碗・平瓦・弥生土器などを検出している。

瓦器碗(118~121)は、すべてA類が出土している。底部には、断面方形から三角形を呈する高台を貼り付けている。口縁部から体部外面には、ヘラミガキ調整を施す。また、体部内面には、密なヘラミガキ調整を加えている。見込部分には、連結輪状の暗文を施す。皿



第26図 土壌7出土遺物実測図

(114~117)には、A類が認められる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。見込部分には、平行線状の暗文を加える。

土師器小皿は、A2 (112)・B2 (111)・C1 (109・110)を検出している。いずれも口縁部内外面をヨコナデ調整する。中皿には、B2 (113)がある。中皿の出土量は、小皿と比較すると極く少量である。小皿と同様に口縁部の内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。

白磁碗 (122)は、口縁部の小破片である。口縁端部は、玉縁状を呈する。体部外面は、丁寧なヘラケズリ調整によって仕上げる。

以上のような出土遺物の特徴や下層の遺物出土状況から土壌6の築造時期は、13世紀初頭頃とすることができる。

土壌7

土壌7は、調査区の東南部分の2F地区に位置する。土壌の東側部分は、井戸2と重複する。検出状況から土壌7は、井戸2によって切られる。また、土壌の北側部分では、後述するpit27を切っている。検出面での規模は、東西1.2m・

南北0.9m・深さ約0.7mを測る。平面形態は、長方形を呈する。土壌内の堆積層は、10Y3/2黒褐色シルトである。出土遺物には、瓦器碗・三足釜、土師器皿・釜、須恵器鉢・甕、白磁をはじめ弥生土器がある。これらのうち固化できるものは2点にすぎない。

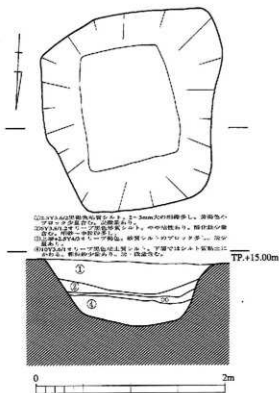
瓦器碗 (123)は、底部に断面三角形の高台を巡らせている小破片である。体部内面には、雑なヘラミガキ調整を渦巻き状に加える。

須恵器鉢 (124)は、直線的にひらく体部から上方につまみ上がる口縁端部につづく。口縁部の内外面は、ヨコナデ調整を施す。

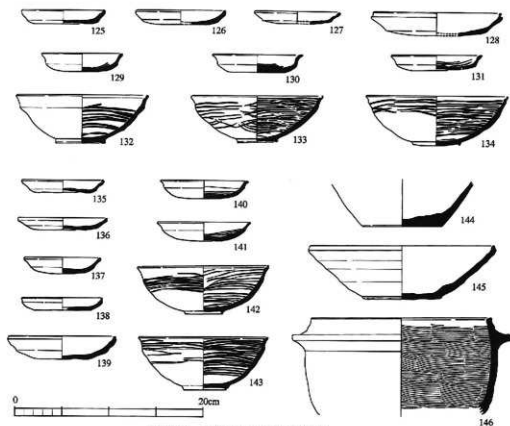
少量の出土遺物から土壌7の堆積時期は、13世紀後半頃と推定できる。

土壌8

土壌8は、調査区の東南部分にあたる2E地区に位置する。検出面での規模は、東西1.8m・南北2.2m・深さ0.68mを測る。平面形態は、長方形を呈する。また、断面形態は、逆台形を呈する。底面はやや丸みをもち、中央部分が最も深い。土壌内の堆積層は、4層に分層できる。これらの堆積層は、土層の特徴から大きく上・下層に分けることができる。上層の1~3層は、地山のブロック土を含む。下層の4層は、オリーブ黒色粘質シルト層である。上層からは、細



第27図 土壌8 実測図



第28図 土壌8出土遺物実測図

片化した瓦器・土師器・須恵器などの土器類のほか瓦が出土している。下層では、同種の土器類とともに陶器も出土している。

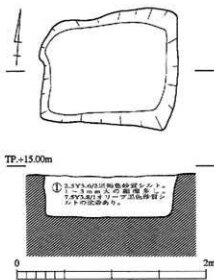
上層出土遺物

土壌8の上層からは、瓦器碗A・B・釜、土師器小皿A2・B1・中皿A1・釜、須恵器、平瓦のほか弥生土器が出土している。

瓦器碗は、A類（132～134）が多数出土しており、B類は極く少量である。A類の底部には、断面三角形から台形を呈する高台を貼り付ける。口縁部から体部外面には、横方向のヘラミガキ調整を加えて仕上げる。体部内面は、横方向の密なヘラミガキで調整する。器壁は、やや厚手である。皿には、A類（130・131）とB類（129）がある。口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。見込部分には、平行線状の暗文を施す。

土師器小皿には、A2（126・127）とB1（125）が出土している。いずれも口縁部内外面をヨコナデ調整している。中皿は、A1（128）を1点検出しているのみである。小皿と同様に口縁部の内外面には、ヨコナデ調整を加えている。

下層出土遺物



第29図 土壌9実測図

土師器小皿には、A2(137)・B1(138)・C1(136)・C2(135)など多種の形態のものが出土している。中皿には、B2(139)がある。出土量は、小皿に比べると極めて少ない。両者とも口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げられる。

須恵器には、鉢(145)と壺(144)がある。鉢は、平底の底部から、やや内灣気味にひろく体部につづく。口縁部は、断面矩形を呈する。口縁部から底部の内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。壺は、平底の底部片である。

上述したような出土遺物の特徴から土壌3の堆積時期は、上層が13世紀前半、下層が12世紀後半頃と考えることができる。

土壌9

土壌9は、調査区の東南部1E地区に位置する。既述した土壌8からは東に約1mの距離にある。検出面での規模は、東西1.4m・南北1.1m・深さ0.4mを測る。平面形は、長方形を呈する。土壌の底面は、平坦な面をなす。土壌内の堆積層は、単一層である。堆積層のなかからは、瓦器碗・皿・三足釜、土師器皿・釜、須恵器甕などの土器類や陶器が出土している。しかし、実測可能な資料はない。

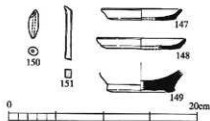
土壌9の堆積時期は、出土遺物から13世紀末頃と推定できる。

土壌10

土壌10は、調査区の東南隅部分1F地区に位置する。土壌の北側部分は、前述した井戸2と重複し、井戸2によって切られている。また、南側の部分は、東西方向の溝によって削平されている。検出面での規模は、東西2.8m以上・南北1.2m以上を測る。平面の形態は、長円形を呈するものと思われる。土壌内の堆積層は、灰色砂質シルトである。土壌内からの出土遺物

釜、須恵器鉢・壺、陶器などが出土している。

瓦器碗は、A類(142・143)とB類が出土している。B類の出土量は、極く少量である。A類の底部には、断面三角形の高台を貼り付けている。口縁部から体部外面には、横方向のヘラミガキ調整を施し、仕上げている。また、口縁部内から体部内面には、横方向のヘラミガキ調整を加えている。さらに、見込部分にも同心円状の暗文を施す。皿は、A(140)とB(141)が出土している。双方とも口縁部内外面は、ヨコナデによって調整している。また、見込部分には、平行線状の暗文を施している。釜(146)は、内傾気味にたつ口縁部の直下にやや上向きにのびる鋸をめぐせている。口縁部は、やや内傾する面をなす。体部外面はナデ調整によって、体部内面は横方向のハケメ調整で仕上げる。



第31図 土壌11出土遺物実測図

は、まったくない。したがって出土遺物から土壌10の堆積時期を推定することはできないものの井戸2との重複関係から13世紀末以前のものであるとすることができる。

土壌11

土壌11は、調査区の北東部分にあたる2A地区に位置する。土壌の南側部分は、攪乱坑によってすでに破壊されている。検出面での規模は、東西1.1m・南北1m・深さ0.5mを測る。平面形は、南北方向を長軸とする楕円形を呈する。底面は、U字型を呈し、中央部分で最も深くなる。土壌内の堆積層は、二層に分けることができる。土壌11からは、細片化した瓦器鉢・釜、土師器小皿B・釜、須恵器などの土器類をはじめ陶器、白磁碗、瓦、土錘、鉄釘が出土している。これらの出土遺物のうち図示できるものは、5点にすぎない。

土師器小皿(147・148)は、ともにB2である。口縁部内外面は、ヨコナテ調整を施す。白磁碗(149)は、底部の小破片である。高台は、底部より削り出して成形している。釉の範囲は、残存部分の内外面全面におよぶ。

土錘(150)は、土師質で1点のみ出土している。残存長3.0cm・最大幅1.0cm・内径2mmを測る。

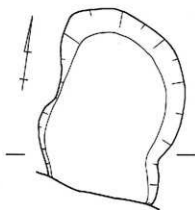
鉄釘(151)は、1点出土している。断面形は方形を呈し、残存長5.4cm・幅0.9cmを測る。

これらの出土遺物の特徴から土壌11の埋没時期は、13世紀前半頃と考えることができる。

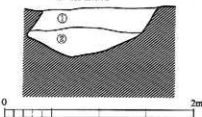
土壌12

土壌12は、調査区の南西部分の5E地区に位置する。土壌の東側部分は、後述する溝7と重複し、溝7によって切られている。また、土壌の南側部分は、調査地区外へつづいている。検出面での規模は、東西0.5m・南北0.6mを測る。平面形は、楕円形を呈するものと考えられる。底面は平坦な面をなす。土壌内からは、土師器釜・須恵器甕・弥生土器などが微量出土している。しかしながら図化できるものはない。

土壌12の埋没時期は、出土遺物から鎌倉時代から室町時代頃と推定できる。



第30図 土壌11実測図



①: FY11よりアクリル樹脂で封入した
標に高さ 2-3mm 穴の縁部多
く、破片を多く含む。
②: FY4/11の土壌中に、磁石
粉・炭粉等あり。



第32図 土壌15出土遺物実測図

土壌14

土壌14は、調査区南西隅部分にあたる5F地区に位置する。土壌の西側は、調査区外にさらに延びる。また、南側は、段および井戸4によって切られる。土壌の平面形態は、極めて不整形である。検出面での規模は、東西3.2m・南北0.8m・深さ23cmを測る。遺物は、まったく出土していない。

土壌15

土壌15は、調査区のうち西側に張り出した部分の西端部分の6E地区に位置する。土壌の北および西側は、調査区外へさらにのびる。また、南側部分は攪乱によってすでに破壊されている。検出面での規模は、東西0.7m・南北1.2m・深さ13cmを測る。平面形態は不明である。土壌内からは、小範囲の調査にもかかわらず瓦器碗・土師器・須恵器などの土器類のほか陶器が多量に出土している。しかしながら図化できるものは、2点にすぎない。

瓦器碗(154)は、体部下半から底部にかけての小破片で口縁部を欠損する。底部には、「ハ」字形にひらく断面方形の高い高台を貼り付ける。体部外面は、横方向のヘラミガキ調整を加える。

陶器甕(155)の口縁部は、玉縁状の形態を呈する。口縁部の内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。

出土遺物から土壌15の埋没時期は、12世紀代と考えることができる。

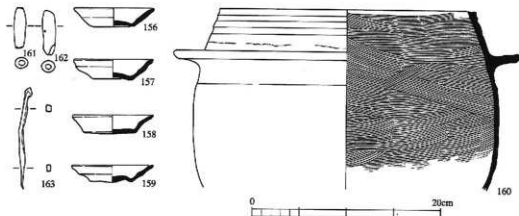
溝1

溝1は、調査区東南隅部分にあたる1E地区に位置する南北方向にのびる溝である。溝の南北両端は、攪乱によって削り取られる。検出面での規模は、全長約0.9m・幅約0.2m・深さ約6cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。検出した範囲内での溝底面の比高差は、ほとんどない。溝内からの出土遺物はない。したがって、溝の埋没時期は、不明である。

溝2

溝2は、調査地区の南寄りの中央部分に位置する。溝は、北東方向から南西方向にのびる。検出面での規模は、全長2.8m・幅0.4m・深さ25cmを測る。溝の断面形は、U字形を呈する。溝底面の比高差は、ほとんどない。溝内の堆積層は、7.5GY4/1暗緑灰色砂質土の単一層である。出土遺物は、小量の細片化した瓦器、土師器のほか弥生土器がある。これらの出土遺物のなかには、図化できるものはない。したがって、出土遺物からは、溝の埋没時期を確定しがたい。

溝3



第33図 溝5 出土遺物実測図

溝3は、調査区南部の中央部分にあたる3E地区に位置する北東から南西にのびるものである。溝の南西部分は、土壌3によって切られる。検出面での規模は、長さ1.2m・幅0.5m・深さ16cmを測る。溝の断面形は、逆台形を呈する。溝底面の比高差は検出した範囲内ではほとんどない。溝内の堆積層は、10GY4.5/1暗緑灰色砂質土で少量の焼土を含む。出土遺物には、細片化した微量の土師器皿・釜がある。

以上のような出土遺物の特徴から溝3の埋没時期は、鎌倉時代から室町時代頃と推定できる。

溝4

溝4は、調査区のうち南西部分にあたる5F地区に位置し、南北方向にのびる。溝の南端部分は、段によって削平されている。検出面での規模は、全長0.8m・幅0.2m・深さ12cmを測る。溝の断面形は、U字形をなす。溝底面の比高差は、ほとんどない。出土遺物は、まったくなく。したがって、溝4の埋没時期は、不明である。

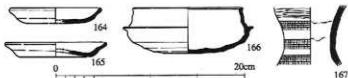
溝5

溝5は、調査区北寄り中央部分から西寄り部分3A・4A地区にある東西方向にのびる溝である。溝5は、東西方向の攪乱によって著しく削平されている。検出面での規模は、東西長5.8m・幅0.8m・深さ44cmを測る。溝の断面形は、J字形を呈する。溝の東西両端での底面の比高差は、ほとんど認められない。溝の底面付近からは、完形の土師器の小皿が多量に出土している。また、瓦器・土師器・須恵器などの土器類をはじめ磁器、瓦、土鍾、鉄釘が小破片化した状態で出土している。

溝5からは、瓦器碗・摺り鉢・三足釜・釜、土師器小皿B2・c2・釜、須恵器鉢、陶器、青磁、白磁、丸瓦、平瓦、土鍾、鉄釘が出土している。これらのうち図示できるものには、瓦器釜と土師器小皿B2・C2・土鍾、鉄釘がある。

瓦器釜(160)は、内傾気味にたつ口縁部に2段の凹線を巡らせ、端部に平端面を構成する。鈎は、やや上向きにのび、端部を丸くおさめる。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整で仕上げる。口縁部から体部内面は、横方向のハケメ調整で仕上げる。

土師器小皿には、B2 (158・159) と C2 (156・157) が出土している。このうち、出土量の多いのは、C2である。



第34図 Pit内出土遺物実測図

口縁部の内外面は、ヨコナア調整で仕上げる。

土錘 (161・162) は、2点検出している。両者とも焼成は、土師質である。(161) は、全長4.3cm・最大径1.2cm・内径0.6cm・重量gを測る。(162) は、全長4.6cm・最大径1.3cm・内径0.6cmを測る。

鉄釘 (163) は、断面方形を呈するもので、全長11cm・幅0.6cmを測る。

以上のような出土遺物の特徴から溝5の埋没時期は、14世紀後半頃と考えることができる。

溝6

溝6は、調査区西端部分の5E地区に位置する南北方向の溝である。溝の南北両端は、調査区外へさらにのびる。検出面における規模は、全長4.4m・幅1.0m・深さ3cmを測る。溝の断面形は、逆台形を呈する。溝の南北両端での比高差は、ほとんどない。遺物は、出土していない。したがって、溝6の埋没時期は、不明である。

溝7

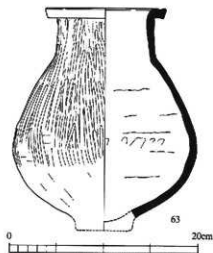
溝7は、前述した溝6と同様に調査区西端部分の5E地区に位置する。溝7は、溝6とはほぼ平行に南北方向にのびる。溝6との距離は、約2mある。溝7の南北両端は、さらに調査区外にも伸びている。溝7は、土壌12・13と重複し、西土壌を切っている。検出面での規模は、全長4.5m・幅0.8m・深さ5cmを測る。溝の断面形は、逆台形を呈する。溝の南北両端での比高差はほとんどない。出土遺物は、まったく出土していない。このため、溝7の埋没時期は、確定できない。

ビット

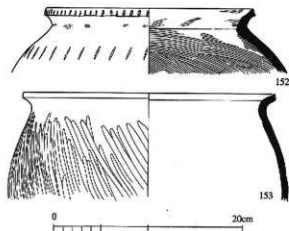
ビットは、調査区中央から南寄り部分で35基検出している。ビットの多くは、調査区の南寄りに集中する。しかし、前述したように遺構の検出面が著しく削平されているためにすでに消失しているものも多数存在するものと想定できる。

ビットの平面形は、円形から楕円形を呈する。埋土は、いずれも黒褐色からオリーブ黒色の砂質シルト層である。各ビットの埋土内からは、瓦器・土師器・須恵器・陶器・弥生土器などの細片を微量に含むものの時期の判明するものはない。各ビットの出土遺物については、一覧表を参照して頂きたい。以下では、ビット出土遺物のうち図化できたものについて記述していく。

(164・165) は、土師器小皿C1である。口縁部内外面をヨコナア調整する。ビット16出土。(166) は、須恵器坏である。口縁部は、直立気味に立ち上がり、端部を内傾する面で仕上げる。体部外面は、回転ヘラケズリ調整を施す。ビット23から出土。(167) は、弥生土器



第35図 土壌1出土遺物実測図



第36図 土壌13出土遺物実測図

壺の頸部片である。頸部外面は、横方向のヘラミガキ調整後通簾文を施す。ピット7出土。

C) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、調査区の南西端部分で2基の土壌を検出しているのみである。しかし、周辺の調査では、多くの弥生時代の遺構が確認されていることや本調査地点が著しく削平・攪乱されていることから本来は、より多くの弥生時代の遺構の存在していたことも十分に想定できる。

土壌1

土壌1は、調査区南西部分にあたる5E地区に位置する。土壌1は、後述する土壌13と重複し、土壌13の埋没後に削平されている。検出面における規模は、東西0.5m・南北0.5m・深さ約0.2mである。平面形態は、ほぼ円形を呈する。埋土は、黒褐色砂質シルト層の単一層である。

出土遺物には、少量の弥生時代中期の土器がある。このなかで図化できるものは、壺1点のみである。壺の形態は、体部最大径が器体の中央部分よりやや下位にある体部に内傾気味に立ち上がる頸部につづく。口縁部は、ほぼ直角に外方へ屈折し、端部に面を構成する。器体外面は、ヘラケズリ調整後頸部から最大径部分までを縦方向にヘラミガキ調整する。内面は、ナテで調整する。口径12.4cmを測る。胎土は、肉眼で生駒西窯以外のものである。

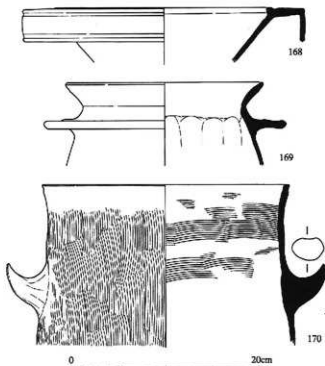
出土土器の形態や製作手法の特徴からみて土壌1は、弥生時代中期のものと考えることができる。

土壌13

土壌13は、調査区の南西部分5E地区に位置する。土壌の中央部分は、土壌1によって破壊されている。検出面での規模は、東西0.9m・南北2.3m・深さ13cmを測る。平面形態は、北東から南西に長軸をおく楕円形を呈する。断面形は、U字形を呈する。土壌内の堆積層は黒

褐色シルト層の単一層で、弥生時代中期の甕をはじめとする弥生土器を微量含む。

出土遺物のうち図示できる甕は、2点ある。(152)は、口径21.6cmを測る。口縁部は短く外反し、端面に刻み目を施す。体部上半には、列点文を巡らす。体部外面は、ハケメ調整後ナデ調整を加える。口縁部内面および体部内面は、横方向のハケメ調整する。(153)は、口径26.8cmを測る。体部部から口縁部へは、緩やかに移行し、口縁端部に面を構成する。体部外面は、縦方向のヘラミガキ調整で仕上げる。口縁部内外面および体部内面は、ナデで調整する。



第37図 攪乱層出土遺物実測図

このような出土土器の形態・製作手法から土壌13は、弥生時代中期頃のものと考えることができる。

d) その他の出土遺物

今回の発掘調査では、既述してきたような各遺構から出土している遺物のほかに調査区内の攪乱部分からも室町時代から弥生時代にかけての土器類が出土している。これらの土器類の多くは、小破片化しているものの図示できる資料を以下に記載しておく。

(168)は、弥生土器高坏の坏部片である。外上方にひらく坏部からほぼ水平方向にひらく口縁部につづく。口縁部の内端には突帯をもち、口縁端部を垂下させ、上下に凹縁を加える。内外面の調整法は、摩滅が著しいため不明。

(169)は、土師器羽釜である。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。口縁部直下に貼り付ける銚は、ほぼ水平方向に長くのびる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。体部外面は、ハケメ調整後ナデで調整する。また、体部内面は、ナデ調整を施す。胎土は、生駒西麓のものである。

(170)は、土師器甕である。倒錐形の体部には、上向きにのびる角状の把手を貼り付ける。口縁端部は、やや内傾する面をもつ。口縁部の内外面はヨコナデ調整で仕上げる。体部外面は、縦方向のハケメ調整を施す。内面は、横方向のハケメ調整後ナデ調整を加える。胎土は、生駒西麓のものである。

	12世紀	13世紀	14世紀
井戸1			
井戸2			
井戸3			
井戸4			
井戸6			
土壙2			
土壙3			
土壙6			
土壙7			
土壙8			
土壙11			
土壙15			
溝5			

第1表 榎附遺跡第2次調査 検出遺構の変遷

遺跡名	調査回数	出土遺構	時期	形態	記載内容
榎附遺跡	2次調査	井戸3	14世紀前半	A	百門□般若□
		土壙3	14世紀前半	B	蘇民将来之孫住宅所也 子
		土壙3	14世紀前半	A	唯知急□如律X
		土壙3	14世紀前半	A	唯知急々如X
西ノ辻遺跡	10次調査	井戸29		A	蘇民将来子孫也
		58-7区 井戸7	14世紀中	C	奉齋持仏頂尊勝陀羅尼一千遍禱也 元徳二年正月二十七日
	59-1区	井戸1	南北朝～室町時代	B	蘇民将来之子孫也 真面 九九八十一 八九七十二
		井戸4	平安時代末	B	蘇民将来子孫也
	59-2区	井戸1	南北朝～室町時代	B	蘇民将来之住宅也
	33次調査	井戸4	14世紀	B	蘇民将来之子□

- 形態 A：長方形の板の一端を尖らせたもの
 B：長方形の板の一端を尖らせ、左右に切り込みを加えたもの
 C：長方形を呈するもの

第2表 東大阪市域出土の呪符一覧表

IV.まとめ

植附遺跡第2次発掘調査では、弥生時代・鎌倉時代から室町時代・近世の遺構・遺物を確認できた。以下では、本調査の成果とともに周辺での調査結果を踏まえ、調査地点周辺の時期毎の変遷をたどり、まとめとする。

確認した遺構のうち、弥生時代の土器類のみを検出した2基の土壌を当期のものとして推定した。これらの遺構は、出土土器の特徴から弥生時代中期後半のものとして推定できる。本調査地点の南側の西ノ辻遺跡では、同期の東から西に流れ下る埋積谷を検出している。また、埋積谷の北側にあたる植附遺跡第1次調査地点でも同期の遺構を検出していることから、弥生時代中期の活動域は、谷の北側部分に広がっているものとして推定できる。

本調査で確認した鎌倉時代から室町時代の遺構を重複関係や出土遺物から、その変遷を第2表にまとめておく。検出できた遺構から調査地点は、鎌倉時代から室町時代の集落跡と考えられることができる。集落は、12世紀代に出現し、14世紀代まで継続している。このうち、13世紀末から14世紀前半に埋没した遺構が最も多い。確認できた遺構には、井戸の数が多いうちにおもわれる。このような傾向は、本調査地点の南側および東側にあたる西ノ辻遺跡や本遺跡第1次調査地点で検出している鎌倉時代から室町時代の遺構と共通しており、同一の集落を形成しているものと考えられる。

井戸3・土壌3からは、呪符が出土している。本遺跡周辺での呪符の出土例をまとめておく。呪符の出土例は、本調査地点から約30mの範囲内に限られ、これまでのところ他の集落からの出土例もない。本調査の土壌3からは、3点の呪符がまとめて出土しているが、他の遺構での出土点数は、1点に限られる。呪符は、他の土器類や木製品・石製品とともに出土している。これらの共伴遺物から呪符の時期は、1例を除くと14世紀前半に限定できる。検出している呪符には、3形態が認められる。このうち、「蘇民将来……」は、すべてB形態である。

12世紀代に出現し、14世紀代まで継続する植附遺跡や西ノ辻遺跡の集落では、呪符がまとめて出土しているのをはじめ、集落内における中世墓の存在、土師や硯の出土など他の集落でみられない特徴がある。

調査地およびその周辺では、鎌倉時代から室町時代の集落の廃絶後、耕作に伴う遺跡を確認している。このことから調査地点一帯は、耕作地として利用されたものとして推定できる。

遺構名	位置	規模	平面	出土遺物	時期	
井戸1	1 F	2.4(以上)×1.9(以上)×1.8(以上)	楕円	瓦器	碗	14世紀 中頃
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器		
				白磁	碗	
				青磁	碗	
井戸2 (上層)	1 F	2.80×1.92×0.94(以上)	楕円形	瓦器	碗・釜・三足釜・小皿	13世紀後 半の上層 を含む
				土師器	皿・釜	
				須恵器	鉢	
				陶器		
				石製品	砥石	
				瓦	平瓦	
井戸2 (下層)				瓦器	碗・釜・甕・火舎・スリ鉢	13世紀の 遺物を含 む
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器		
				瓦	平瓦	
				白磁		
				鉄製品		
				弥生土器		
				木製品		
井戸3 (上層)	3 F	2.2×2.4×1.14(以上)	円形	瓦器	皿・碗・釜・三足釜	14世紀 前半
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器	碗	
				青磁	碗	
				白磁	碗	
				灰釉陶器	碗	
				緑釉陶器		
				瓦	平瓦	
				土製品	土鏝	
				井戸3 (下層)		
土師器	皿・釜					
須恵器	甕・鉢					
瓦器						
白磁						
石製品	砥石					

第3表 楕円遺跡第2次調査検出遺構一覧表1/6

遺構名	位置	規模	平面	出土遺物	時期	
井戸3 (下層)				弥生土器		
				瓦		平瓦・丸瓦
				木製品		下駄・呪符
井戸4 (上層)	4 F	1.9×1.8×0.96(以上)	円形	瓦器	碗・火舎・釜・三足釜	14世紀 中頃
				土器器	皿・釜	
				須恵器	甕・鉢	
				陶器	壺	
				瓦	丸瓦・平瓦	
				弥生土器		
				石	ヤスカイト	
井戸4 (下層)				瓦器	碗・皿・釜・火舎	14世紀 中頃
				土器器	釜・皿	
				須恵器		
				陶器	甕	
				青磁	碗	
				木製品	下駄	
				漆器	碗	
井戸5	5 F	1.3×1.2×2.68	円形	瓦器	碗	不明
				土器器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器		
				青磁	碗	
井戸6	1 E	0.6(以上)×1.1(以上)×1.04(以上)	円形	瓦器	碗	13世紀後 半以降
				土器器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器	スリ鉢	
				瓦	平瓦	
井戸7	1 A	0.8×0.8×0.96	円形	なし		
井戸8	2 A	0.8×0.7×0.84	円形	土器器	皿	不明
				須恵器		

第3表 袖附遺跡第2次調査検出遺構一覧表2/6

遺構名	位置	規模	平面	出土遺物	時期	
土壇1	5 E	0.5×0.5×0.2	円形	養生土器	鎌生中期	
土壇2	4 F	0.5(以上)×2.5(以上)×0.24	長方形	瓦器 土甕器 瓦	椀 皿 平瓦	13世紀末
土壇3 (上層)	4 F	4.5×3.1×0.9	楕円形	瓦器 土甕器 須恵器 白磁 陶器 灰釉陶器 瓦 土製品	椀・釜・三足釜 皿・茶 鉢 椀 瓦 九瓦・平瓦 土甕	14世紀 前半
(下層)				瓦器 土甕器 須恵器 陶器 青磁 白磁 瓦 木製品 漆器	椀・三足釜・釜・甕 皿・釜 甕・鉢 椀 椀 九瓦・平瓦 曲付物・漆板・櫛・棒状木 椀・碗・椀 椀・皿	14世紀
土壇4	3 F	1.4×1.4(以上)×0.35	楕円形	土甕器		
土壇5	3 E	1.2×0.9×0.24	三角形	土甕器	釜	
土壇6 (上層)	3 F	2.5×2.4×1.0	長方形	瓦器 土甕器 須恵器 陶器 白磁 瓦 養生土器	皿・椀・釜 皿・釜 甕・鉢 椀 椀 九瓦・平瓦	
(下層)				瓦器 土甕器 須恵器 白磁 瓦 養生土器	椀・皿 皿・釜 甕 椀 平瓦	
土壇7	2 F	0.9×1.2(以上)×0.69	長方形	瓦器	椀・三足釜	

第3表 植附遺跡第2次調査検出遺構一覽表3/6

遺構名	位置	規模	平面	出土遺物		時期
土壇7	2 F	0.9×1.2(以上)×0.69	長方形	土師器	皿・釜	13世紀 後半
				須恵器	鉢・甕	
				白磁		
				弥生土器		
土壇8(上層)	2 E	1.8×2.2×0.68	長方形	瓦器	碗・皿・釜	13世紀 後半
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
				弥生土器		
瓦	平瓦					
土壇8(下層)				瓦器	碗・皿・釜	13世紀 後半
				土師器	皿・釜	
				須恵器	鉢・甕	
				陶器		
土壇9	1 E	1.4×1.1×0.4	長方形	瓦器	碗・皿・三足釜	13世紀末
				土師器	皿・釜	
				須恵器	甕	
				陶器		
土壇10	1 F	2.8(以上)×1.2(以上)	長円形?	なし		
土壇11	2 A	1.1×2.0×0.5	楕円形	瓦器	碗・釜	不明
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器		
				瓦	丸瓦	
				白磁	鉢	
				土製品	鉢	
				鉄製品	鉄釘	
土壇12	3 E	0.5(以上)×0.6(以上)	長方形	須恵器	甕	不明
				土師器	釜	
				弥生土器		
土壇13	5 E	2.3×0.9×0.13	長円形	弥生土器	甕	弥生中期
土壇14	5 F	3.2×0.8×0.23				
土壇15	5 E	1.2(以上)×0.7(以上)×0.13	方形	瓦器	碗・釜・スリ鉢	12世紀 (?)
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
				陶器	甕	

第3表 楕附遺跡第2次調査検出遺構一覧表4/6

遺構名	位置	規模	平面	出土遺物		時期
溝1	1 E	0.2×0.9×0.06		なし		
溝2	3 E	0.4×2.8×0.25		瓦器		不明
				土師器		
				弥生土器		
溝3	3 E	0.5×1.2(以上)×0.16		土師器	皿・釜	不明
溝4	5 F	0.2×0.8(以上)×0.12		なし		
溝5	3 A	0.8×5.8(以上)×0.44		瓦器	筒・スリ鉢・三足釜・釜	14世紀 前半
				土師器	皿・釜	
				須恵器	鉢	
				陶器		
				青磁		
				白磁	碗	
				瓦	丸瓦・平瓦	
				土製品	土鉢	
鉄製品	鉄釘					
溝6	5 E	4.4(以上)×1.0×0.03				
溝7	5 E	4.5(以上)×0.8×0.05				
Pit 1	5 E	0.2×0.2×0.09	円形	なし		
Pit 2	4 E	0.6×0.6×0.19	円形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿・釜	
				須恵器		
Pit 3	4 E	0.3×0.2(以上)×0.4	円形	なし		
Pit 4	4 E	0.4×0.2(以上)	楕円形	なし		
Pit 5	5 F	0.2×0.2(以上)×0.04	円形	なし		
Pit 6	5 F	0.2×0.3×0.09	楕円形	なし		
Pit 7	5 F	0.2×0.2×0.05	円形	弥生土器	豆	弥生中期
Pit 8	5 F	0.2×0.2×0.07	楕円形	なし		
Pit 9	5 F	0.1×0.1×0.05	楕円形	なし		
Pit 10	5 F	0.2×0.1×0.34	長方形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿	
Pit 11	4 F	0.3×0.2×0.18	楕円形	なし		
Pit 12	4 F	0.4×0.5×0.21	三角形	なし		
Pit 13	4 F	0.3×0.4×0.25	三角形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿	
				須恵器	釜	
Pit 14	4 F	0.2×0.2×0.27	長方形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿	
Pit 15	4 F	0.2×0.1×0.12	円形	なし		

第3表 堀附遺跡第2次調査検出遺構一覧表5/6

遺構名	位置	規模	平面	出土遺物		時期
Pit16	4 F	0.2×0.3×0.54	楕円形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿	
Pit17	4 F	0.2×0.3×0.18	楕円形	なし		
Pit18	3 F	0.3×0.4×0.2	楕円形	なし		
Pit19	3 F	0.3×0.4×0.2	楕円形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿・釜	
				陶器		
Pit20	3 E	0.5(以上)×0.6×0.1	円形	なし		
Pit21	3 F	0.6(以上)×0.4(以上)×0.1	長方形?	なし		
Pit22	3 F	0.1×0.2×0.26	楕円形	なし		
Pit23	2 F	0.6×0.6×0.3	円形	瓦器	碗	不明
				土師器		
				須恵器		
				弥生土器		
Pit24	2 F	0.4×0.7×0.2	楕円形	瓦器	碗	不明
				土師器	皿	
				須恵器		
Pit25	2 F	0.1×0.1×0.11	長方形	瓦器	碗	不明
				土師器		
Pit26	2 F	0.2×0.2×0.08	円形	土師器		不明
Pit27	2 F	0.1(以上)×0.1×0.08	楕円形	なし		
Pit28	1 F	0.4(以上)×0.3×0.08	長円形	なし		
Pit29	3 D	0.6×0.5×0.31	楕円形	なし		
Pit30	3 D	0.6×0.5×0.08	長方形	なし		
Pit31	3 D	0.2×0.3×0.26	円形	なし		
Pit32		0.2×0.6×0.03		なし		
Pit33				なし		
Pit34	4 E	0.6×0.4×0.13	楕円形	なし		
Pit35	3 F	0.6×0.5×0.37	楕円形	土師器		不明
Pit36	4 E	0.5(以上)×0.3×0.16	楕円形	なし		

第3表 植附遺跡第2次調査検出遺構一覧表6/6



1. 調査風景 (南西より)



2. 調査区 (南西部分 南北断面)



1. 調査区中央部分近世跡検出状況（東より）



2. 調査区北側部分中世遺構検出状況（東より）



1. 調査区中央から南側部分中世遺構検出状況（東より）



2. 調査区南側部分中世遺構掘削状況（東より）



1. 調査区北側部分中世遺構掘削状況（東より）



2. 調査区北側から中央部分中世遺構掘削状況（東より）



1. 井戸1 南北断面



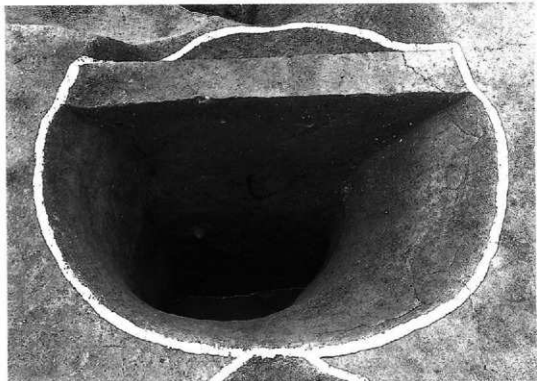
2. 井戸2 東西断面



1. 井戸3 東西断面



2. 井戸3 木製品出土状況



1. 井戸4 南北断面



2. 井戸7 南北断面



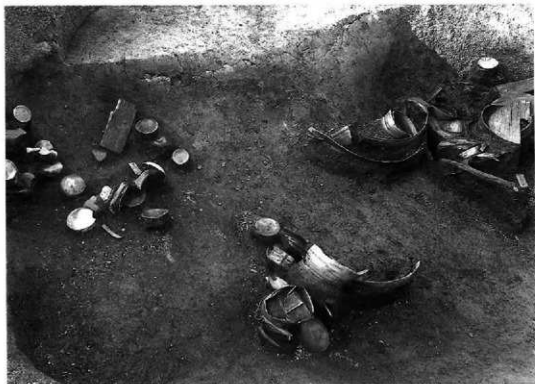
1. 土壟3 掘削状況(北より)



2. 土壟3 南北断面



1. 土壙3 遺物出土状況



1. 土壙3 遺物出土状況



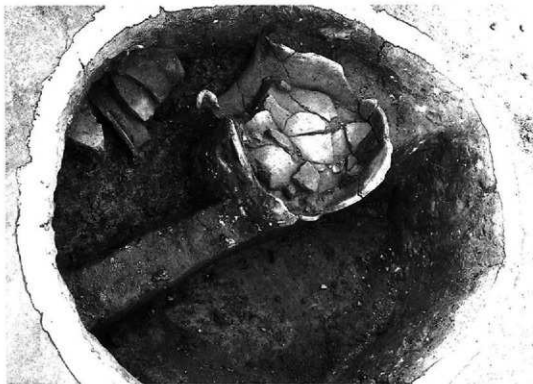
1. 土壌6 南北断面



2. 土壌6 掘削状況(東より)



1. 溝5 掘削状況(東より)



1. 土坑II 弥生土器出土状況(東より)



1



4



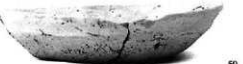
12



38



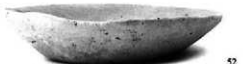
43



50



51



52



53



5



8



45

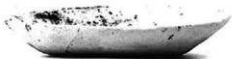


46



47

井戸1 (1・4・5・8), 井戸4 (38~54), 井戸2 (12)



17



19



20



23



22



26



28



32



29



30



34



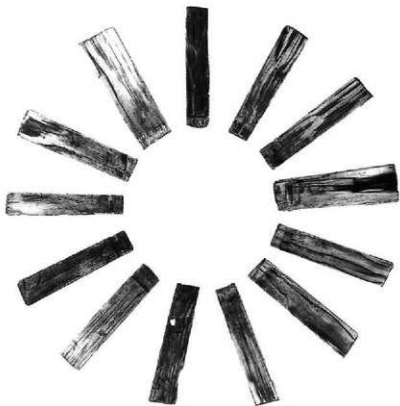
14



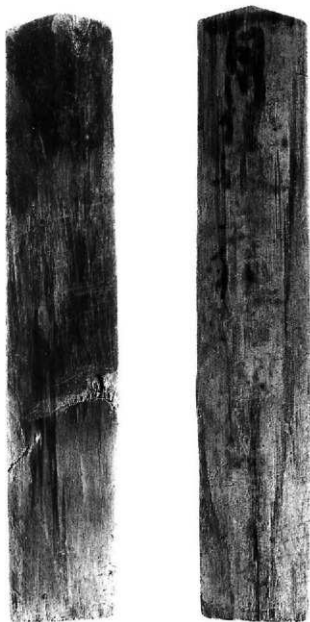
15



16

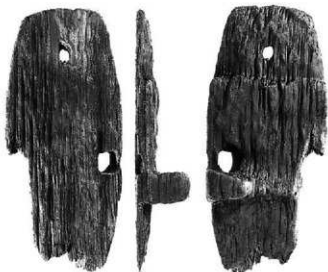


圖版十五 植附遺跡第2次調査 遺物 井戸3出土木製品





35



36



35



36



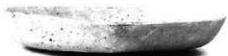
37



65



67



68



79



80



81



82



83



84



70



73



85



86



87

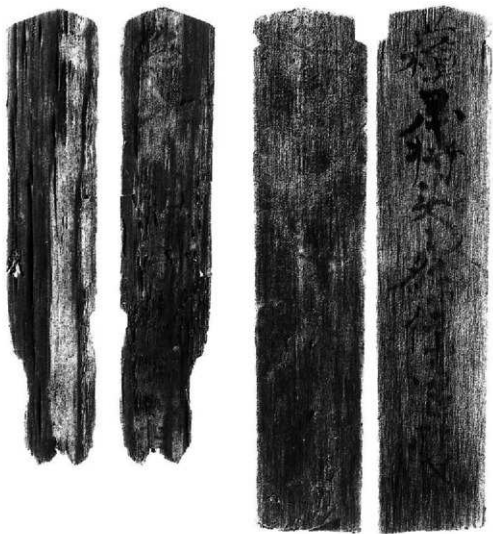


88



89

圖版十八 植附遺跡第2次調査 遺物 土壙3出土木製品



図版十九 植附遺跡第2次調査 遺物 土城3出土木製品





104



105



105



106



95



103



94



96



97



100



101

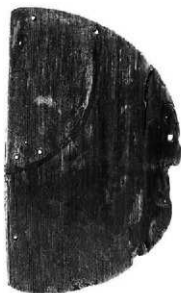


107

108



99



98



130



125



131



132



135



140



136



142



137



144



145



146



143



109



110



112



156



157



158



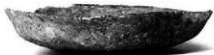
159



114



115



117



119



120



121



160

土壙6 (109~121), 溝5 (156~160)



166



153



167



63



168



169



170

Ⅶ 水走遺跡第10次発掘調査報告

例 言

1. 本書は東大阪市川中279番地の1で実施した事務所ビル建設工事に伴う水走遺跡第10次発掘調査報告書である。
2. 本調査は財団法人東大阪市文化財協会が、株式会社近畿相互銀行（現近畿銀行）、近畿地所株式会社の委託を受けて勝田邦夫を担当として実施した。
3. 現地調査は346m²を対象として昭和62年2月12日から3月31日まで実施した。
4. 現地調査並びに整理作業にあたり、辻本智英、竹内弘明、池谷孝郎、井上伸一、三野章生、栗須直樹、長谷川喜子、川本理恵、宮本美好子、鮎野幸子、鍵谷紀子の尽力があった。

本文目次

I. はじめに	1
II. 調査に至る経過	3
III. 調査の概要	4
1. 層位	6
2. 遺構	6
吉田川Ⅰ期	6
吉田川Ⅱ期	7
吉田川Ⅲ期	7
吉田川Ⅳ期	9
第1遺構面	9
井戸1	9
井戸2	10
土坑1	10
土坑2	10
土坑3	10
堤防	10
地震の痕跡	10
変形ゾーンⅠ（縄文時代晩期末）	13
変形ゾーンⅡ（弥生時代中期）	13
変形ゾーンⅢ（古墳時代後期）	14
変形ゾーンⅣ（奈良時代後半）	14
変形ゾーンⅤ（平安時代末～鎌倉時代初頭）	14
大阪周辺の被害地震	16

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺図	2
第2図	調査地点位置図	3
第3図	層位図	5
第4図	吉田川Ⅱ期実測図	6
第5図	遺構実測図	8
第6図	井戸1実測図	9
第7図	堤防実測図	11
第8図	東大阪市周辺の活断層図	21
第9図	遺物実測図	22

表 目 次

遺物観察表	23
-------	----

図 版 目 次

図版1	1. 吉田川Ⅰ期	2. 吉田川Ⅰ期の堆積
図版2	1・吉田川Ⅱ期	2. 吉田川Ⅱ期断面
図版3	1. 井戸1、土坑1.2	2. 井戸1井側
図版4	1. 井戸1井側上段	2. 井戸1井側中段
図版5	1. 井戸1井側	2. 井戸1井側
図版6	1. 井戸2	2. 井戸2
図版7	1. 土坑1.2、井戸1	2. 土坑3、井戸1.2
図版8	1. 堤防	2. 堤防
図版9	1. 液状化跡	2. 液状化跡
図版10	1. 液状化跡	2. 液状化跡
図版11	1. 液状化跡	2. 吉田川Ⅳ期の堆積層
図版12	1. 土師器皿、磁器碗	2. 備前焼すり鉢

水走遺跡第10次発掘調査報告

I. はじめに

水走遺跡は、昭和54年12月から始まった国道308号線中央分離帯部における試掘調査において遺跡として確認された。近畿日本鉄道奈良線生駒駅と大阪市営地下鉄中央線長田駅を結ぶ現在の近鉄東大阪線の鉄道建設が計画され、その路線地域全域にわたって遺跡の確認調査が実施された。計画路線内には西から新家遺跡、鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡が存在しており、事業に先立って実施されたものである。長田・恩智川間約4kmにわたって約200mの間隔で実施されたなかで、東大阪市水走、川中、今米、吉田池ノ端、吉田船場、中新開にかけての東西約1.1kmの地域が水走遺跡として周知されるに至った。

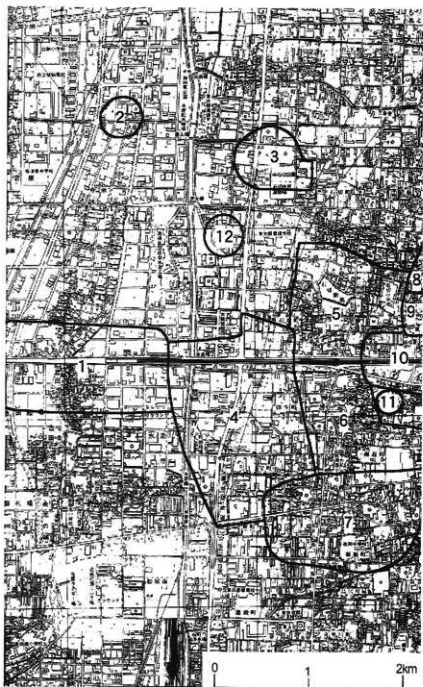
水走遺跡第2次調査では、第1次の試掘調査の結果遺物包含層が存在すると考えられる範囲をさらに細かく確認すべく実施されたもので、1.1kmの間に9箇所の特レンチを設定し実施された。西端の吉田島之内では弥生時代～中世に至る各時期の土器（弥生土器、庄内式土器・布留式土器、須恵器・土師器・製塩土器、黒色土器）、土製品、木製品、金属製品、石製品、骨製品などの遺物と足跡、溝が検出された。東端の水走では近世と考えられる河道が検出され、この両端の範囲内では室町時代の溝、土坑、柱穴、鎌倉時代の土坑、土壇墓、足跡、平安時代の堤防、足跡、縄文晩期～弥生時代前期の貝塚、落ち込み、杭列、足跡が検出された。

58年1月～59年4月まで実施した東大阪市高速鉄道建設に伴う第3～7次調査では全域にわたって中世末～近世初頭にかけてのハス田が見つかった他、中世の堤防状遺構、堰状遺構、環濠、柱穴群、土坑群、貝塚、大小の溝、旧河道、足跡などの遺構、土師器・瓦器・陶器・磁器・漆器・木簡・人形・斎串・矢羽根・剣・下駄・曲物等の木製品、鉄鏃・鉄応丁・鉄刀・鉄釘・鉄刀子・貨幣などの金属製品、土製品、石製品、弥生時代後期の溝、弥生時代中期の溝、土坑、弥生時代中期末からの自然流路、貝塚、弥生土器・石鏃・骨製刺突具が見つかった。

59年5月～61年3月にかけての阪神高速道路東大阪線水走ランプ建設に伴う第8・9次調査では鎌倉時代の足跡、落ち込み、奈良～平安時代の土坑・ピット、弥生時代後期の溝跡、溝、杭列、弥生時代前期の溝、ピット、土坑、縄文時代晩期末～弥生時代前期の貝塚、鎌倉時代の土師器・瓦器・木製品、奈良～平安時代の土師器・須恵器・貨幣（和銅開珎）、弥生土器・木製刺突具・木製品・石鏃・石応丁・石錘・骨製刺突具・土錘などを検出した。

これらのことから縄文時代晩期～弥生時代前期に至る貝塚の様子、集落の変遷、立地、中世の開発、集落の成立、発展、終焉、規模、構造、生産の様子などおぼろげではあるが明らかになってきました。

今回の調査においても、近世の旧河道、井戸、鎌倉時代末の堤防が見つかり、水走遺跡の変遷を窺う上でも貴重な資料が得られました。これらの成果が歴史研究の一助になりますとともに広く活用されることを心から願うものであります。



- | | | | |
|--------|---------|---------|---------|
| 1.水走遺跡 | 4.鬼虎川遺跡 | 7.鬼塚遺跡 | 10.神並遺跡 |
| 2.加納遺跡 | 5.種附遺跡 | 8.辻子谷遺跡 | 11.船古墳 |
| 3.和泉遺跡 | 6.西ノ辻遺跡 | 9.法通寺跡 | 12.北島遺跡 |

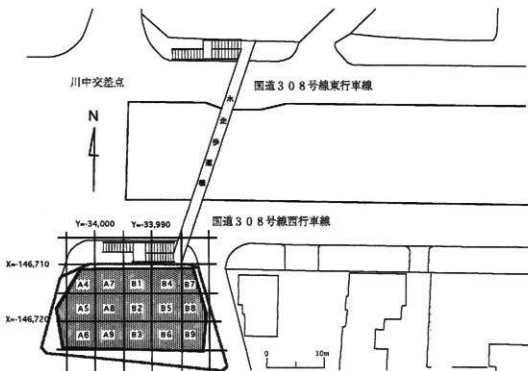
第1図 遺跡周辺図

Ⅱ. 調査に至る経過

水走遺跡は、東大阪市水走、今米、川中、吉田池の端、吉田船場、中新開にかけて所在する。縄文時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。河内平野東端部の沖積地に位置し標高は2～4mである。

昭和46年、都市交通審議会において奈良一大阪間で現在営業中の近鉄奈良線以外に鉄道路線の新設が必要との答申が打ち出された。その結果、大阪市が計画していた地下鉄中央線深江橋から東長田までの延伸とそれに接続する形で生駒から国道308号線の中央分離帯を利用して鉄道建設が推し進められることになった。これには阪神高速道路東大阪線の路線延長、国道308号線荒本以东の路線整備も計画されていたことも相俟って計画が具体化していった。

この計画路線内には西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡、新家遺跡、高井田遺跡が周知されていたが、長田から恩智川の間については遺跡の有無が確認されていなかったため、遺跡確認調査が実施された。調査は200mの間隔を基本として18ヶ所の試掘トレンチを設定して昭和54年12月から実施された。この結果、鬼虎川遺跡の西に隣接して水走遺跡の存在が確認された。



第2図 調査地点位置図

昭和55年以降、当遺跡の本格的な調査が実施され、縄文時代から歴史時代（江戸時代）に至る多数の遺構・遺物を検出した。縄文時代では、晩期後半の滋賀里4～5に属する深鉢が数点遺跡の西端部に出土している。縄文晩期末から弥生前期では、遺跡の東端の凹地に貝塚が形成されており、ここから長原式土器と弥生時代前期中段階の土器が相伴して検出しているほか、木器・石器・土製品・石製品・貝・種子など多種多様な遺物が出土している。また西端部においても弥生時代前期新段階の溝・落ち込みなどの遺構が検出されている。弥生時代中期から後期にかけては遺跡全体に溝・土坑・櫛列などの遺構や各種遺物が検出されている。古墳時代では櫛列や溝、奈良時代では土坑が検出されているがわずかなものである。7世紀後半から8世紀にかけて確立された律令制度は、平安時代を通じてしだいに崩れていき、11世紀には数多くの荘園がつくられた。平安時代の終りごろ、東大阪市域に大きな勢力をもつようになった豪族に水走氏がある。水走氏は、大舍人允として宮中の分番・宿直・供奉などをつとめていた藤原季忠が、河内国大江御所の山本・河俣両執当職に補任され、河内国河内郡に土着し、天養年中（1144～1145）に郡内の水走の地を開発して水走氏を称したのに始まる。季忠は庁宣を申請して開発地の公事雑役を免ぜられ、その地を領有して在地領主となった。発掘調査においても平安時代後期以降室町時代までの建物跡、土坑、土壇墓、溝、護岸施設などの遺構、瓦器・土師器・須恵器・陶磁器などの土器、漆器椀、箸、人形、甕串、呪符、木筒、椀、曲物などの木製品、オオタニシ、ハス、ヒシなどの自然遺物、鍋、包丁、刀子などの金属製品が出土している。江戸時代には、宝永元年（1704）の大和川付替以降、旧河床、地床で新田開発がなされ、吉田川周辺においても川中新田が作られ、水田や畑となり、畦畔、暗渠、足跡、鋤跡、溝、土坑、落ち込み、井戸が検出されている。

Ⅲ. 調査の概要

水走遺跡は、東大阪市水走、今米、川中、吉田池の端、吉田船場、中新開にかけて所在する縄文時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。河内平野東端部の沖積地に位置し、標高約2～4mである。昭和54年、東大阪都市高速鉄道及び阪神高速道路建設に伴う試掘調査によって発見された遺跡である。昭和55年以來当遺跡の本格的な調査が実施され、縄文時代晩期～弥生時代の貝塚、溝、落ち込み、自然流路、土坑、櫛列、古墳時代の櫛列、溝、奈良時代の土坑、平安時代後半～室町時代の溝、土坑、土壇墓、建物、堤防、堰、中世末～近世初頭のハス田、近世～近代の溝、土坑、井戸などが検出され、縄文晩期の深鉢、弥生時代の壺・甕・鉢といった土器、石鏃、石斧といった石製品、骨鏃、刺突具といった骨角製品のみなどの鉄製品・櫛歯状・ナスビ形・鞘状の木製品、古墳時代の甕、奈良時代のミニチュア甕・甌・甕・鉄製の鏃・鎌・刀子、平安時代～室町時代の土師器皿・羽釜・瓦器椀・陶磁器などの土器・曲物・下駄・人形・甕串・呪符木筒・漆器椀・箸・矢・椀などの木製品、鍋、包丁、刀子などの鉄製品、オオタニシなどの貝類、近世初頭のハス・ヒシの実などが出土した。

今回の調査地は、国道308号線川中交差点南東角にあたる。調査は地表下1.3mまで機械によ

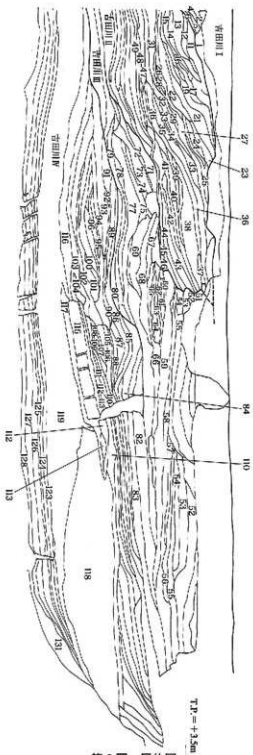


圖 3 圖 1

り掘削し以下を人力により掘削調査した。

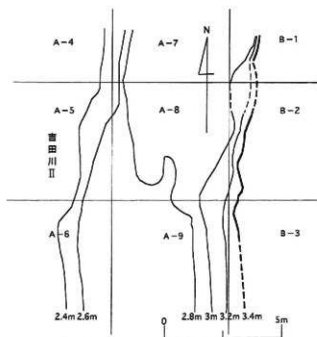
1. 層位

今回の調査地点では東壁、西壁、南壁、北壁を残して層位の確認、検討を行なった。しかし、西壁はほとんどすべてが砂層よりなり断面の崩壊などにより記録することができず、北壁の一部についても同様であった。調査は地表下5mまで行ったが、土層はおおむね中粒砂、細粒砂、極細粒砂、シルト、粘土が互いに上下に組合わさって構成され、南壁、北壁による層位数は133層を数えた。この堆積土は、中世～近世に至る旧大和川の一つ玉舞川の支流吉田川により運ばれ堆積したもので、西半では大部分が砂層、東半では砂、シルト、粘土層より構成される。吉田川の堆積は大きく4期に分けられ、1、2期は細粒砂、細粒砂混じりシルト、中粒砂により構成される。3、4期は洪水などにより西から東へ砂が運ばれ、その後水が淀んだ状態が長く続き、粘土、シルトが厚く堆積したものである。1期の時期は旧大和川が付け替えられた宝永元年（1704）を下限とする。4期は調査地東端の地表下2～2.5mで検出された杭により護岸された堤防が14世紀前半頃に作られたものでこれを上限とする。

2. 遺構

吉田川I期

調査地西端より東へ4mの区間で南北方向に流れる流路を検出した。川幅4m以上、深さ1.4mである。堆積土は上から1. におい黄褐色（10YR5/4）中粒砂、2. オリーブ褐色（2.5Y4/6）細粒砂、3. におい黄橙色（10YR6/3）中粒砂、4. 黄橙色（2.5Y5/6）粘土、5. オリーブ褐色（2.5Y4/4）細粒砂、6. オリーブ褐色（2.5Y4/6）細粒砂、7. 黄褐色（2.5Y5/6）8. 細粒砂混じりシルト、9. 明黄褐色（2.5Y6/6）



第4図 吉田川II期実測図

中粒砂、10. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト混じり細粒砂、オリーブ黄色 (5Y6/3) 細粒砂～中粒砂である。瓦、陶器が出土した。

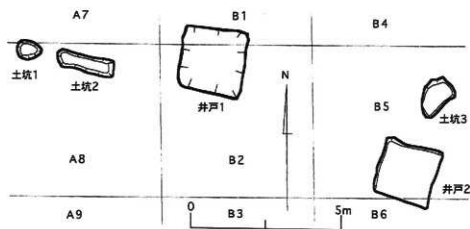
吉田川Ⅱ期

西端より東へ9.5mの区間で検出した。方向は1期とほぼ同じ南北方向で、川幅9.5m以上、深さ2.5mである。堆積土はさらに5小期に区分できる。第1小期の堆積土は上から11. 黄色 (2.5Y5/6) 細粒砂、12. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂混じりシルト、13. 黄褐色 (2.5Y5/5) 細粒砂混じりシルト、14. 灰白色 (7.5Y7/2) 細粒砂～中粒砂、15. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂、16. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土、17. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂混じり粘土、18. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂、19. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂、第2小期の堆積土は上から20. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト～細粒砂、21. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂、22. ぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土、第3小期の堆積土は上から23. ぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細粒砂混じり細粒砂、24. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂、25. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 細粒砂、26. ぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト混じり細粒砂、27. 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト混じり細粒砂、28. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂、29. ぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細粒砂混じり細粒砂、30. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細粒砂混じり細粒砂、31. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト混じり細粒砂、32. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細粒砂、33. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 極細粒砂、第4小期の堆積土は上から34. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂～シルト、35. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂、36. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂、37. ぶい黄褐色 (2.5Y6/4) 細粒砂と中粒砂のラミナ状の互層、38. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細粒砂と細粒砂の互層、39. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細粒砂と細粒砂の互層、40. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト混じり中粒砂、41. 黄褐色 (2.5Y5/3) 中粒砂と細粒砂の互層、42. オリーブ黄色 (5Y6/3) 細粒砂、43. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂、44. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細粒砂、45. 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト混じり極細粒砂、第5小期の堆積土は上から46. 灰白色 (5Y7/2) 中粒砂、47. オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘土、48. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂、49. オリーブ色 (5Y5/4) 粘土、50. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土である。

吉田川Ⅲ期

西端より東へ19.5mの区間で検出した。川幅19.5m以上、深さ3.2mである。堆積土は上から51. 黄褐色 (10YR5/8) シルト混じり細粒砂、52. 褐色 (10YR4/6) 中粒砂、53. 黄色 (2.5Y5/6) シルト混じり細粒砂、54. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト混じり細粒砂、55. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂、56. ぶい黄褐色 (10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト、57. 明黄褐色 (2.5Y6/6) シルト混じり細粒砂、58. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂～シルト、59. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂混じりシルト、60. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土、61. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂、62. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘土、63. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト混じり細粒砂、64. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂、65. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細粒砂、66. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト混じり細粒砂、67. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂、68. ぶい

い黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じりシルト、69. ぶい貴褐色 (10YR5/4) シルト混じり細粒砂、70. 褐色 (10YR4/4) シルト混じり細粒砂、71. ぶい貴褐色 (10YR5/4) 細粒砂混じりシルト、72. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂、73. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂、74. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト混じり細粒砂、75. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂、76. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト混じり細粒砂、77. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂、78. ぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂、79. ぶい貴褐色 (10YR5/4) 粘土、80. ぶい貴褐色 (10YR5/3) 細粒砂とシルトの互層、81. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂とシルトの互層、82. ぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト、83. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトと細粒砂の互層、84. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトと細粒砂の互層、85. ぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂とシルトの互層、86. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂とシルトの互層、87. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒砂、88. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトと細粒砂の互層、89. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂、90. 灰色 (10Y6/1) シルトと細粒砂の互層、91. 緑灰色 (10GY5/1) 細粒砂、92. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂、93. 緑灰色 (10GY6/1) 細粒砂とシルトの互層、94. 緑灰色 (7.5GY6/1) 極細粒砂混じり粘土、95. 青灰色 (5BG5/1) 細粒砂とシルトの互層、96. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 細粒砂～中粒砂、97. 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂とシルトの互層、98. 青灰色 (10BG5/1) 細粒砂とシルトの互層、99. 青灰色 (10BG6/1) 中粒砂とシルトの互層、100. 緑灰色 (10G5/1) 細粒砂混じりシルト、101. 青灰色 (5BG5/1) 粘土、102. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 極細粒砂、103. 緑灰色 (7.5GY6/1) 細粒砂混じりシルト、104. ぶい黄色 (2.5Y6/3) 細粒砂とシルトの互層、105. 明緑灰色 (10GY5/1) 極細粒砂とシルトの互層、106. 明赤灰色 (5YR5/8) 中粒砂、107. 灰黄褐色 (10YR5/2) シル



第5図 遺構実測図

ト、108. 褐色 (7.5YR4/4) 細粒砂とシルトの互層、109. 明緑灰色 (10G7/1) 細粒砂とシルトの互層、110. 灰黄褐色 (10YR6/3) 中粒砂、111. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂とシルトの互層、112. 緑灰色 (7.5GY6/1) 粘土と細粒砂の互層、113. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂、114. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘土、115. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘土、116. 緑灰色 (10G6/1) 粘土、117. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土、118. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘土、119. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土、120. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト、121. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト、122. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土である。土師器、瓦器碗、同羽釜、同皿、瓦、瀬戸焼壺、砥石が出土した。

吉田川Ⅳ期

I～Ⅲ期の堆積物と違い、比較的穏やかで水が流んだ状態が長く続いたものと思われ粘土、シルトが厚く堆積したものであ

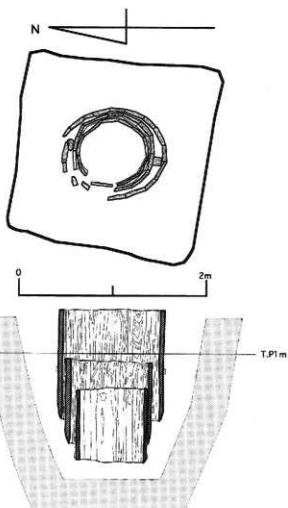
る。123. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土、124. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質シルト、125. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト、126. 暗オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト、127. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト、128. 暗オリーブ灰色 (2.5Y4/1) シルト、129. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土、130. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土、131. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 粘土である。

第1遺構面

河川以外の遺構面としては2面確認できた。第1遺構面は吉田川が完全に埋った後のもので、地表下0.4m～0.5mの地点、標高にしてT.P.3.4m前後である。ここでは井戸2基、土坑3基を検出した。

井戸1

B2地区で検出した。掘形は東西、南北とも2.1mで、ほぼ正方形を呈する。検出面はT.P.3.4m前後で、T.P.2.4mまではオリーブ褐色



第6図 井戸1実測図

極細粒砂～細粒砂による埋め土で、凝灰岩、拳大の石、陶磁器、瓦が含まれていた。T.P.1.33mから0.18mまでは、桶側が3段にわたって設置されていた。1段目（上段）は長径0.83m、短径0.7m、深さ0.82m、2段目（中段）は長径0.62m、短径0.59m、深さ0.61m、3段目（下段）は長径0.54m、短径0.51m、深さ0.51mで、幅7～17cm、厚さ2～3cmの板材で桶が作られていた。桶は重なりあう部分があるため、1段目上端から3段目下端までは1.15mであった。井戸の底近くには2～3cm大の細礫を厚さ10cmにわたり敷き詰めていた。上面の掘形が正方形であること、瓦や凝灰岩が出土していることからこの井戸は最上段が凝灰岩や瓦により円形にめぐらせた井桁、次に桶側、さらに下が四隅に柱をもち、横棧、縦板を施した井圍、その下が今回検出された桶側で、深さは3.2m以上と考えられる。陶器、鉄器、貨銭、磁器が出土し、染付けの磁器などから近世～近代にかけて使用されたものと思われる。

井戸 2

B 5 地区で検出した。掘形は東西、南北とも1.8mで、ほぼ正方形を呈する。検出面はT.P.3.3m前後であったが、下層へゆくと円形となっているため、井戸 1 と同じような構造の井戸と思われる。土師器羽釜、磁器、陶器、瓦、塼土、瓦器甕が出土した。時期は近世～近代である。

土坑 1

A 8 地区で検出した。長径75cm、短径58cmの卵型を呈する。深さ9cm、埋土は10YR3/2黒褐色細粒砂で、瓦・土師器・陶器、磁器が出土した。時期は近世～近代である。

土坑 2

A 8 地区で検出した。縦55cm、横182cmの長方形を呈する。深さ21～36cm、埋土は土坑 1 と同じで、瓦・土師器・陶器すり鉢、磁器碗が出土した。時期は近世～近代である。

土坑 3

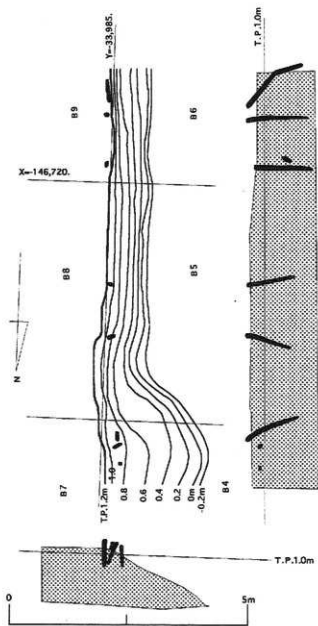
B 5 地区で検出した。長径150cm、短径80cmの楕円形を呈する。深さ26cm、埋土は10YR4/3にぶい黄褐色粘土まじり細粒砂である。磁器、陶器片が出土した。時期は近世～近代と思われる。

堤防

B 4～9 地区で検出した。堤防上面の高さはT.P.2m前後と思われるが、さらに東側に伸びるため明確ではない。堤防は、暗緑灰色、暗青灰色の細粒砂まじりシルト、細粒砂、粘土を厚さ10～20cmに積み上げつき固めたものである。さらにのり面に長さ1～1.5mの杭を1.1～2mの間隔に打ち込んでいる。これは編織工と思われ、杭の間をヤナギなどで50cmの高さに“そだ”をあみ、上方に盛土して、ヤナギなどの木を植え、高水時に土が洗い流されるのを防いだものと思われる。実際に、堤防の土手ののり面には、植物の根が多く入り込んでいた。堤防内から瓦器碗、羽釜、土師皿が出土した。遺物から14世紀代に築かれたものと思われる。

地震の痕跡

遺構ではないが、今回の調査地で地震の痕跡を検出した。地震により生じた噴砂跡、断層、



第7図 堤防実測図

の若江遺跡、北鴻池町の北鴻池遺跡で見つっている。

断層については西石切町7丁目の鬼虎川遺跡で見つっている。

液状化による堆積地層の変形がみられるのは中石切町7丁目の北島遺跡、西石切町7丁目の鬼虎川遺跡、瓜生堂3丁目の瓜生堂遺跡、長堂1丁目の宮ノ下遺跡で見つっている。

液状化による堆積地層の変形構造である。堆積土層はおおむね中粒砂、細粒砂、極細粒砂、シルト、粘土が互層となつて構成されていた。この堆積土は、中世～近世に至る旧大和川の一つ玉櫛川の支流吉田川により運ばれ堆積したもので、調査地の西半は大部分が砂層、東半では砂、シルト、粘土層より構成される。噴砂跡は吉田川IV期の堆積層に多く見られた。地表下1.5～4mの間で、南側断面では断層、噴砂孔が13箇所、北側断面では11箇所見られた。幅は大きなもので0.6～0.7m、深さ2mに達している。断層は厚さ0.6～0.9mの砂層を挟んで上下2枚に見られるが、南側断面ではさらに下の砂層から粘土、シルト層を2枚突き抜けさらに上まで上がっているのが4箇所見られる。このことから1つの地震により2枚の粘土、シルト層を断ち割つたものと思われる。

噴砂跡については水走遺跡(注1)以外にも吉田島の内の吉田遺跡、西岩田3丁目の西岩田遺跡、若江南町2丁目

吉田遺跡は、東大阪市吉田島ノ内に所在する歴史時代（鎌倉時代）の水田遺跡である。河内平野東半部の沖積地に位置し、標高約2～4mである。噴砂がみられたのは、1988年4月～6月にかけて調査を実施した吉田遺跡第1次調査(注2)で、吉田島ノ内9番地の5の地点である。調査対象地は約30000m²の府営住宅建設予定地でその試掘調査で見つかった。調査地南西端にあたる第13トレンチからである。地表下3.7mまで行なったが、堆積土層はおおむね粘土層が主体で中粒砂～細粒砂、粗粒砂が間層となって構成されていた。この堆積土は、旧大和川の一つ玉佛川の支流古田川により運ばれ堆積したもので、後背湿地にあたる。噴砂はT.P0～0.5mにある青灰色細粒砂が上層の暗青灰色シルト質粘土、茶褐色粘土を断ち割って噴き上がったものである。暗青灰色シルト質粘土には13世紀前半に属す瓦器碗が含まれていた。噴砂の上層には黄褐色砂質粘土があり、近世から近代の瓦・陶磁器が出土している。

西岩田遺跡は、東大阪市西岩田2～4丁目にかけて所在する古墳時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。河内平野中央部の沖積地に位置し、標高約5～6mである。噴砂がみられたのは、1971年2月～6月にかけて調査を実施した西岩田遺跡第1・2次調査、1993年10月～1994年2月にかけて実施した第15次調査である。1・2次調査(注3)は府道大阪中央環状線中央分離帯にあたる地点である。噴砂が見られた地点は古墳時代前期ごろ南西から北東に向かったの流路があり黄褐色の中粒砂から粗粒砂が堆積している。地震によりこの砂が約0.9m噴き上がったものである。断ち割った層は暗茶褐色土、淡青灰色土、茶褐色土、青灰色粘土、淡青灰色砂質粘土である。幅は約14cmであった。約15m間に3つの噴砂が確認できる。噴砂の上には近世の耕作土があり、近世以前で古墳時代以降の地震によるものと考えられる。第15次調査(注4)は西岩田町3丁目4番地、東大阪市の新総合病院建設予定地で実施し、噴砂は南東から北西方向に見られた。検出した層は灰オリーブ色シルト混じり粘土上面で中世の鋤跡・土坑・柱穴などが見つかっている。噴砂自体は古墳時代前期頃の河道の堆積物である黄褐色極細粒砂である。中世の遺構面の上には近世から近代にかけての耕土が堆積している。このことから地震は中世に起きたものであると考えられる。

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町、若江南町にかけて所在する弥生時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。河内平野中央部の沖積地に位置し、標高約4～5mである。噴砂がみられたのは、1988年10月～1989年2月にかけて調査を実施した第38次調査(注5)で若江南町2丁目の若江小学校体育館改築工事に伴う調査で見つかった。噴き上げた砂は弥生時代後期の洪水に起因して堆積したと考えられる黄灰色細粒砂から中粒砂で、暗緑灰色砂質からシルト質粘土、黄褐色粘土、黄褐色シルト質粘土を幅2.5cm断ち割って約0.5m噴き上がっていた。この噴砂は途中で12世紀代の曲物を用いた井戸の掘形を切り、上部を16世紀後半の若江城内堀によって切られていた。したがって噴砂を起こした地震は12世紀から16世紀後半までに起きた地震である。

北鴻池遺跡（大阪府教育委員会の調査では西鴻池遺跡と呼んでいる）は、東大阪市北鴻池町に所在する歴史時代（室町時代～江戸時代）の遺跡である。河内平野中央部の旧新開池北西端

に位置し、標高約2～3mである。1987年に寝屋川北部流域下水道汚池処理場内を大阪府教育委員会が調査し噴砂を検出した(注6)。最大幅12cm、長さ6mにわたって南東から北西方向に幾筋も延びていた。この砂は14世紀前半頃に厚さ2.7mにも堆積した灰色中粒砂～粗粒砂で、青灰色シルト、灰色微砂、灰色細粒砂の互層約1.4mを断ち割って噴出していた。このことから14世紀前半以降近世中葉(大和川が代替られる1704年まで)までに起きた地震と考えられる。

断層については西石切町7丁目の鬼虎川遺跡で見つかっている。鬼虎川遺跡は、東大阪市西石切町5～7丁目、弥生町、宝町にかけて所在する旧石器時代から歴史時代(江戸時代)に至る複合遺跡である。河内平野の沖積地の東端に位置し、標高約5～7mである。発掘調査によって縄文時代にこの場所まで海水が侵入したことを示す海岸地形が検出され、イルカ、クジラ、サメ、フグ、エイ、サワラ、ズズキなどの海棲動物の骨や歯、刺などが見つかっている。調査地付近は潮汐流や波の影響の少ない干潟の堆積環境から、湖沼の静水域の堆積環境になり、次第に陸化していった。このため堆積物は砂質シルト、シルト、粘土が中心である。断層がみられたのは、1993年4月～1994年3月にかけて調査を実施した鬼虎川遺跡第35次調査(注7)で、国道308号線と国道170号線との交差点のすぐ西側にあたる地点である。阪神高速道路の橋脚部分の調査で地下約4m、T.P.+0.5m付近で東西方向に10mの区間比高差10cmのずれを確認した。また、地震による粘土層の巻き上がりも見られた。断層の上には弥生時代中期～古墳時代後期の包含層が堆積していることから、弥生時代中期頃の地震によるものと考えられる。

液状化による堆積地層の変形がみられるのは北島遺跡(注8)、鬼虎川遺跡(注9)、水走遺跡(注10)瓜生堂遺跡(注11)、宮ノ下遺跡(注12)である。この堆積地層に見られる地震による変形構造は財団法人東大阪市文化財協会の松田順一郎氏を中心に研究が進められている(注13)。次に紹介するものはこれらの成果によるところが大きい。

発掘調査で観察された堆積地層の変形構造はフレーム(火炎状)構造、ロード(上方からの荷重による沈み込み)構造、フィッシャー(下方に伸びる亀裂)構造がある。これらは通常いくつかの組み合わせをなす。河内平野の堆積物は最下部に干潟の堆積物である砂泥層が認められ、上方細粒化して、湖沼の堆積である粘土・シルト・泥炭に変化している。その上には河川や後背湿地の堆積である砂泥互層がのる。堆積の変形が認められたのは、おもに湖沼の堆積物である。

変形ゾーンI(縄文時代晩期末)

縄文時代後期から晩期に堆積した明緑灰色粘土とその上にある黒色粘土層との境界付近には、上位層の流動による下位層の水平方向の引きずりや、垂直方向の巻き上げが繰り返されて生じた渦巻き模様が各遺跡で見られた。北島遺跡では下位層上面より下方に向かって生じた亀裂がわずかであったが、鬼虎川遺跡では多数の亀裂とともに、堆積物が上下方向にいくちがう微小断層群が認められた。

変形ゾーンにみられる渦巻き模様は、流動した泥層とその上位の水との境界面直下で生じた

表面波による乱流によると考えられる。この表面波は地震動によって生じた可能性が考えられる。

変形ゾーンⅡ（弥生時代中期）

黒色ないし暗灰色粘土層の上面とその上位の植物遺体を多く含む暗褐色砂質シルト質粘土層との境界付近には、液状化によるフレーム（火炎状）構造のほかにも層層の境界が激しく波打った凹凸面ができるとともに互いに巻き込みあう部分が見られる。層準Cより上は下位層がブロック状に取り込まれ円環状の粘土礫となって散乱している。これは液状化によって砂質シルトと粘土に密度の違いが生じ、高い上位層が下位層に入ることによる乱流と考えられる。

変形ゾーンⅢ（古墳時代後期）

弥生時代後期になると厚さ5～10cmの泥炭層が堆積する（層準D）。泥炭層は数cmの長さで折れ曲がり縮れたようになっていて、この上位の灰色粘土層中には、泥炭が短くちぎれて入っていたり、浮遊したりしているような状態が認められた。これは液状化によって浮き上がってきたものと考えられる。緑灰色シルト質極細粒砂層・緑灰色シルト質粘土層（層準E）との境界には上方からの荷重による沈み込みが多数見られ、下位の泥炭層が断裂され楔状に割り込んで小断層となっている。小断層に伴って引き込まれた上位層が円環状になって浮いている。また逆に下位層が上位層と入れ替わり炎のように巻上がった状態（フレーム構造）になっている。

変形ゾーンⅣ（奈良時代後半）

奈良時代の畑作土層（砂礫質シルト、層準F）やその直下の砂礫層（部分的に分布する）が下位のシルト質粘土層に着しく沈み込んだ状態が確認されると同時に、沈み込みの底辺から砂礫あるいは作土層上部の砂礫あるいは作土で充填された亀裂が発達している。また、作土層上部の砂礫質シルトには、皿状構造に似た変形が、さらにその上位の粘土層と砂・シルトの数mm以下の薄い互層（層準G）では球や枕構造、ソーセージ状および巻き込み構造が見られる。

変形ゾーンⅤ（平安時代末～鎌倉時代初頭）

平安時代の畑作土層（層準I）の上下でも変形ゾーンⅣと同じような堆積土の変形が見られた。この下面からは、泥質の作土で充填された亀裂が発達し、変形ゾーンⅣを切っていた。北島遺跡と宮の下遺跡の泥炭層直上の灰色粘土層上面を水平に削って観察すると上位の緑灰色シルト質極細粒砂およびシルト質粘土がまだら模様をなして広がっている。詳しく見ると上位層の直径数cm～20cmのかたまりが下位層に引きずられ回転したように渦模様となっている。

現在までに変形構造は縄文時代後期後半、縄文時代晩期ないしは弥生時代前期、弥生時代中期前半、弥生時代中期中頃、古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代後半、平安時代末～鎌倉時代初頭、室町時代前半、江戸時代前半、江戸時代中頃、江戸時代末と12時期のものが確認されてきている。

地震の古記録（注14）からみると684年、887年、1099年、1361年、1408年、1520年、1605年、1707年、1854年、1946年と南海地震が起きている。南海地震は47年～262年の間隔、平均すると140年に1回づつフィリピン海プレートとアムールプレートの境界にあたる西南海トラフを震

源として発生し、その主な場所は紀伊半島沖～四国沖で、地震の規模はマグニチュード7.4～8.5、平均8.0という巨大地震である。一方大阪周辺の活断層による地震は、まず生駒断層によると考えられるものは1099年、1494年、1510年、1596年、1936年、上町断層によると考えられるものが1579年で、地震の規模はマグニチュード6～7.5で平均6.7を示す。これ以外にも大阪に影響を及ぼすものは、兵庫県南部から大阪北部を東西に走る有馬-高槻構造線、京都府南部を南北に走る黄葉断層、大阪と和歌山の府県境の紀伊山地付近を通る中央構造線、比良山地の西側の花折・東側の琵琶湖西岸活断層系、京都と奈良の府県境を通る木津川断層などが考えられる。

出土する考古資料から地震の年代もわかりつつある。考古資料と古記録から過去の地震を振り返り、将来の地震災害を予測する手掛かりとして活用し、また、考古学でも変形構造を見つけることにより遺構等の年代の手がかりとすることができるのではなかろうか。

- 1) 勝田邦夫「水走遺跡にみられる地震の痕跡」『東大阪市文化財協会ニュースVol 3 No 3』(財) 東大阪市文化財協会 1988
- 2) 福永信雄「吉田遺跡第1次発掘調査報告」(財)東大阪市文化財協会 1989
- 3) 荻田昭次・北野保「西岩田遺跡」中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971
荻田昭次「西岩田遺跡のおもいで」『わかす1995年春号』わかす文芸研究会 1995
- 4) 木建正宏「西岩田遺跡第15次発掘調査業務報告」(財)東大阪市文化財協会 1994
- 5) 福永信雄「若江遺跡第38次発掘調査報告」(財)東大阪市文化財協会 1993
- 6) 藤永正明「大阪府下における噴砂の資料」『第6回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』P 31～33 大阪文化財センター 1988
寒川 旭「地震考古学」中公新書P 148 1992
- 7) 福永信雄「鬼虎川遺跡第35次調査業務報告」(財)東大阪市文化財協会 1994
- 8) 松田順一郎「北島遺跡第1次調査業務報告」(財)東大阪市文化財協会 1994
- 9) 松田順一郎 三輪若菜「鬼虎川遺跡第37次発掘調査報告」(財)東大阪市文化財協会1994
- 10) 三輪若菜「水走遺跡第13次発掘調査報告」『平成5年度下水道関係発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1994
井上伸一「水走遺跡第14次発掘調査報告」『平成5年度下水道関係発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1994
- 11) 瓜生堂第42次はマンション建設に伴う発掘調査で1995年5月11日から調査を開始し、弥生時代中期の遺構面の上層に変形構造がみられた。
- 12) 別所秀高他「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書—第2分冊—」東大阪市教育委員会(財)東大阪市文化財協会 1996
- 13) 松田順一郎「河内平野沖積低地の泥質堆積物にみられる地震による変形構造」『第1回近畿ブロック埋文研修会資料集』全国埋蔵文化財法人連絡協議会 近畿ブロック会議 1995
松田順一郎・別所秀高「東大阪市宮ノ下遺跡の貝塚にみられる地震による変形構造」

『日本文化財科学会第12回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 1995

松田順一郎・池崎智訓・別所秀高「東大阪市北島遺跡でみられた泥質堆積物の地震による変形構造」『日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 1994

14) 宇佐美龍夫「新編 日本被害地震総覧」東京大学出版会 1987

大阪周辺の被害地震

416年8月23日 遠飛鳥宮付近(大和) 「日本書紀」に「地震」とあるのみで被害の記述はありませんが、わが国の歴史に現われた最初の地震です。

599年5月28日 (大和) マグニチュード7 倒壊家屋を生じた。「日本書紀」に書かれており、地震による被害の記述としてわが国最古のものです。

684年11月29日 南海・東海・西海地方 マグニチュード8.3 震源は室戸岬沖 山崩れ、河湧き、諸国の郡官舎・百姓舎・寺塔・神社の倒壊多く、人畜の死傷多し、津波来襲して土佐の船多数沈没。南海トラフ沿いの巨大地震

868年8月3日 播磨・山城 マグニチュード7.0 震源は兵庫県加西市付近 播磨諸郡の官舎、諸定額寺の堂塔ごとごとく崩れ倒れる。京都では垣屋が崩れたものがあった。兵庫県の山崎断層の活動によるものと考えられている。

887年8月26日 五畿七道 マグニチュード8.0~8.5 震源は紀伊水道沖 京都で民家・官舎の倒壊多く、圧死者多数。津波が沿岸を襲い溺死者多数、特に摂津で津波の被害が大きかった。南海トラフ沿いの巨大地震と思われる。

938年5月22日 京都・紀伊 マグニチュード7.0 震源は滋賀県大津市付近 宮中の内膳司崩れ死者4人、その他京中の倉屋・築地倒れるもの多く、堂塔仏像も多く倒れる。高野山の諸伽藍破壊。余震が多かった。

976年7月22日 山城・近江 マグニチュード6.7 震源は滋賀県大津市南部 宮城諸司・舎屋倒壊多く、東寺・西寺・極楽寺・清水寺・円覚寺など倒壊。死者50人以上。近江国分寺の大門倒れ仁王像破損。余震は7月に68回、8月に32回起きた。地震のため天延4年を貞元元年と改める。

1070年12月1日 山城・大和 マグニチュード6.0~6.5 震源は京都府城陽市付近 東大寺の鐘の紐が切れ落下。京都では家々の築地が壊れる。

1091年9月28日 山城・大和 マグニチュード6.2~6.5 震源は奈良市北部 法成寺の仏像倒れ、その他建物・仏像にも被害。大和吉野の金峯山金剛蔵王宝殿破損。

1096年12月17日 畿内・東海道 マグニチュード8.0~8.5 震源は遠州灘沖 大極殿小破、東大寺の鐘落下。薬師寺回廊倒壊。京都の東寺・法成寺・法勝寺にも被害。近江の瀬田橋落下。河内小松寺の毘沙門堂倒壊。余震が多かった。津波が伊勢・駿河を襲う。駿河では社寺・民家の流失400余。東海沖の巨大地震とみられる。

1099年2月22日 南海道・畿内 マグニチュード8~8.3 震源は紀伊半島沖 興福寺・四天

王寺で被害。土佐で田地が海に沈む。

1099年9月20日 河内 小松寺の講堂倒壊。

1185年8月13日 近江・山城・大和 マグニチュード7.4 震源は滋賀県大津市西部 特に京都白河辺の被害が大きかった。社寺・家屋の倒壊破損、橋の落下、死者多数。美濃・伯耆まで揺れを感じる。9月末まで余震が多かった。

1325年12月5日 近江北部 マグニチュード6.5 震源は滋賀県北端部 竹生島の一部が湖中に没する。琵琶湖と敦賀の中間にある山が崩れる。

1331年8月15日 紀伊 マグニチュード7.0 震源は田辺湾沖の紀伊水道 紀伊四千里浜(田辺市の北)の速干満20町余り隆起して陸地となる。

1350年7月6日 京都 マグニチュード6.0 震源は京都市南部 祇園社の石塔の九輪落ち砕けた。余震は8月末まで続いた。7日朝の地震で四天王寺の金堂倒壊、その他にも被害あり。圧死5人。

1360年11月22日 紀伊・摂津 マグニチュード7.5～8.0 震源は三重県熊野市東部 22日に大地震 23日に再震、24日に熊野尾鷲から摂津兵庫まで津波が来襲し人馬牛の死が多かった。

1361年8月8日 畿内・土佐・阿波 マグニチュード8.5 震源は紀伊水道沖 摂津四天王寺の金堂倒壊し5人圧死。山城・大和の諸寺諸堂に被害が多かった。熊野山の山道ならびに山河の損壊多く、湯の峯温泉の湧出とまる。津波が沿岸を襲い摂津・阿波・土佐で被害。特に阿波の雪(由岐)澳では流失1700戸、溺死60余。津波に先立ち難波浦で数百町干上がった。余震が多かった。南海トラフ沿いの巨大地震と思われる。

1408年1月21日 紀伊・伊勢 マグニチュード7～8 震源は紀伊半島沖 熊野本宮の温泉の湧出80日間止る。紀伊・伊勢・鎌倉に津波があったという。

1449年5月13日 山城・大和 マグニチュード5.8～6.5 震源は京都市 11日から地震あり。洛中の堂塔築地の被害多く、東山・西山で所々地裂ける。若狭街道で山崩れ、人馬多く死す。淀大橋3間・桂橋2間落下。余震は6月まで続く。

1494年6月19日 大和 マグニチュード6.0 震源は奈良県生駒市付近 東大寺・興福寺・薬師寺・西大寺などの堂宇破損。矢田庄(大和郡山の西)の民家多く破損。6月中は連日余震。7月に入っても多し。余震は翌年まで及ぶ。

1498年9月20日 東海道全較 マグニチュード8.2～8.4 震源は遠州灘沖 紀伊から房総にかけての海岸と甲斐で振動が大きかった。熊野本宮の社殿倒れ、那智の坊舎崩れ、湯の峯温泉の湧出が止った。遠江では山崩れ・地割れが起こった。津波は紀伊から房総の海岸を襲った。伊勢大澳では家屋流失1000戸、溺死5000人、塩屋村180軒のうち100軒余波にとられ、助かったもの4～5人。伊勢志摩で溺死1万人、静岡県志太郡で溺死2万6000人という。南海トラフ沿いの巨大地震とみられる。

1510年1月28日 摂津・河内 マグニチュード6.5～7.0 震源は大府八尾市八尾空港付近 河内の常光寺・剛琳寺(葛井寺)が本堂・塔をはじめとする伽藍が悉く潰れ、西琳寺塔婆倒壊、

摂津の四天王寺の石の鳥居・金堂の本尊も大破。大阪の浦々高瀬により人家損失・溺死者あり。余震70余日続く。藤井寺市誉田山古墳（応神天皇陵）をよぎる断層はこの地震によるものと考えられている。

1520年4月4日 紀伊・京都 マグニチュード7～7.7 震源は紀伊半島沖 熊野・那智の寺院倒壊。津波があり民家流失。京都の禁中築地破損。

1579年2月25日 摂津 マグニチュード6.0 震源は大阪市北区大阪駅付近 四天王寺の鳥居崩れる。余震3日にわたる。

1596年9月5日 畿内 マグニチュード7.5 震源は東大阪市若江南町付近 京都三条より伏見に至る間の被害が多く、特に修理中の伏見城が倒壊して500余人が死す。諸社寺・民家の倒壊も多く、死傷者も多かった。堺では死んだものが600人以上におよび、通りは人家・壁・屋根・寺院その他の建物が倒壊したため塞がれて通行できない有様であったという。京都では東寺・天龍寺・二尊院が倒壊。奈良でも諸寺が倒壊。大阪・神戸でも民家の倒壊が多く、近江の栗田郡葉山村（現在の栗東町）でも民家の倒壊が多く死者が多かった。高松で山崩れ・地割れが起こる。余震は翌年5月まで続いた。有馬一高観構造線活断層という説もある。

1605年2月3日 東海・南海・西海諸道 マグニチュード7.9 駿河湾沖・紀伊水道沖 津波は犬吠埼から九州に至る太平洋岸に押し寄せ、八丈島では57人が流死、浜名湖近くの橋本では100のうち80戸が流失し死者多数。紀伊半島西岸の広村では1700のうち700戸が流失、阿波の鞆浦では死者100余人、宍喰では死者1500余人、土佐甲浦では死者350余人、室戸岬付近では400余人、土佐清水の三崎では153人が死亡した。鹿児島島の薩摩半島にも大波が打ち寄せた。地震そのものより津波の被害が多かった。二つの地震が同時に起こったとする考え方と、東海沖の一つの地震とする考え方がある。

1662年6月16日 山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃 マグニチュード7.3～7.6 震源は滋賀県滋賀郡志賀町付近 比良山付近の被害が大きかった。滋賀の唐崎で田畑85町（約85ha）琵琶湖中に没し家屋倒壊1570戸、大溝で1020戸余、死者37人、彦根で家屋倒壊1000戸、死者30余、朽木村付近では比良山の山崩れにより谷を埋め丘となる。滋賀郡榎村は総戸数50で死者300余、所川村では戸数50、人口300余で死者260余、生存37、他は不明で、家は皆地下に埋没したという。京都では民家倒壊1000、死者200余という。長崎・江戸にも感じたという。余震は非常に多く年を越えた。比良断層または花折断層の活動とする説がある。

1707年10月28日 五畿七道 マグニチュード8.4 震源は紀伊半島沖 我が国最大級の地震の一つ。家屋倒壊地域は、駿河中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・加賀・越中、および中国・四国・九州に及ぶ。地震の被害は東海道・伊勢湾・紀伊半島で最もひどく、静岡県袋井で全滅、浜松・四日市では半分が倒壊、名古屋城ではところどころ破損・地割れあり、海岸では地割れから泥を噴出した。紀伊田辺では被災家屋411戸中、全壊138、大破119、残りの154は流失し、死者20人。徳島で630戸倒壊。大阪では家屋倒壊1000余、

橋の崩落50余、死者500余、他に溺死1万余という。筑後でも家屋倒壊・死者があった。

津波は伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸および大阪湾・播磨・伊予・防長・八丈島を襲った。土佐での被害が多く流失家屋1万1167、家屋倒壊5608、破損家屋1000余、死者1844、不明926さらに流破損船678であった。紀伊でも津波の被害が大きく、広村では総戸数約1000のうち700戸流失、150戸破損、死者292人、尾鷲では641戸流失、530余人死亡、伊豆の下田では流失・全壊857、半壊55、死者11、流破船215であった。道後温泉・紀伊の湯の峯・龍神温泉の湯が止った。遠州灘沖および紀伊半島沖で二つの巨大地震が同時に起こったと考えられている。全体としての被害はつかみにくい但至少とも死者2万余、流失家屋約2万、倒壊家屋約6万、半壊1万、破損4万、蔵被害2000、船の流破3000余、田畑潰れ30万石以上と思われる。

1802年11月18日 畿内・名古屋 マグニチュード6.5~7.0 震源は三重県北端部の員弁郡藤原町付近 奈良春日の石燈籠かなり倒れ、京都で土蔵壁落ち、石塔・石燈籠倒れもあり、大阪・西宮・池田で強く感じ、鯖江・鳥取でも有感。

1830年8月19日 京都および隣国 マグニチュード6.5 震源は京都府亀岡市北部 洛中・洛外の土蔵はほとんど被害を受けた。御所・二条城などで被害。京都での被害280人、上下動が強く、余震が非常に多く翌年1月までに635回以上。

1854年7月9日 伊賀・伊勢・大和および隣国。マグニチュード7.3 震源は京都府相楽郡笠置町付近 6日頃から前震があった。伊賀上野付近で家屋倒壊2000余、死者約600、奈良で倒壊400以上、死者300余など、全体で死者は1500を越える。広島まで有感。木津川新層の活動と考えられている。

1854年12月23日 東海・東山・南海諸道 マグニチュード8.4 震源は遠州灘沖 「安政東海地震」被害は関東から近畿におよび、特に沼津から伊勢湾にかけての海岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、被害をさらに大きくした。この地震による家屋の倒壊・焼失は約3万戸、死者は2000~3000人と思われる。

1854年12月24日 畿内・東山・東海・北陸・南海・山陰・山陽道 マグニチュード8.4震源は紀伊水道沖 「安政南海地震」東海地震の32時間あとに発生。被害地域は中部から九州に及ぶ。津波が大きく串本で15m。地震と津波の被害の区別が難しいが、死者数千人。

1891年10月28日 愛知・岐阜 マグニチュード8.0 震源は岐阜県北西部の本巣郡根尾村付近 「濃尾地震」 仙台以南の全国で地震を感じた。わが国の内陸地震としては最大のもの。建物全壊14万余、半壊8万余、死者7273人、山崩れ1万余。1892年1月3日 9月7日 1994年1月10日の余震でも家屋破損などの被害があった。

1899年3月7日 紀伊半島南東部 マグニチュード7.0 震源は三重県尾鷲市西北部 奈良県吉野郡・三重県南牟婁郡での被害が大きく、木ノ本・尾鷲で死者7、家屋全壊35、山崩れ無数、大阪・奈良で煉瓦煙突の破損が多かった。

1916年11月26日 神戸 マグニチュード6.1 震源は兵庫県淡路島北端部 死者1 付近に軽い被害があった。

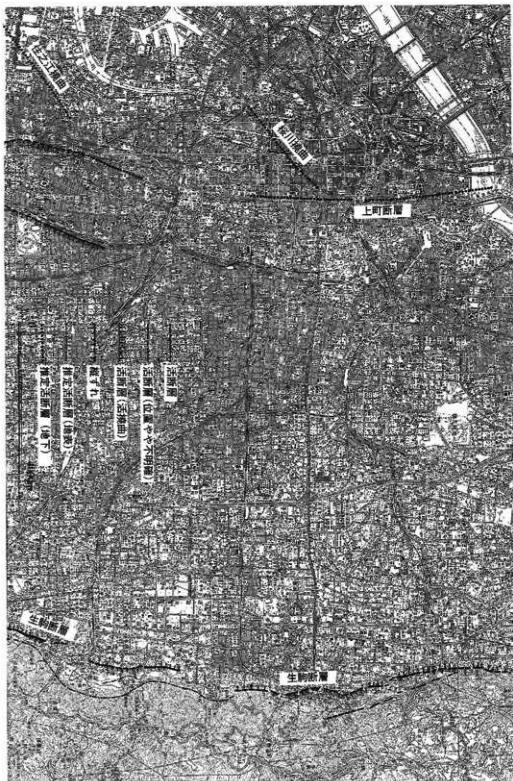
1927年3月7日 京都府北西部 マグニチュード7.3 震源は京都府宮津市南西部 「北丹後地震」被害は丹後半島の頸部が最も激しく、淡路・福井・岡山・米子・徳島・三重・香川・大阪に及ぶ。全体で死者2925人、家屋全壊12584戸、

1936年2月21日 大阪・奈良 マグニチュード6.4 震源は大阪府八尾市八尾空港付近 「河内大和地震」死者9 家屋全半壊148 地面の亀裂や噴砂・湧水現象も見られた。

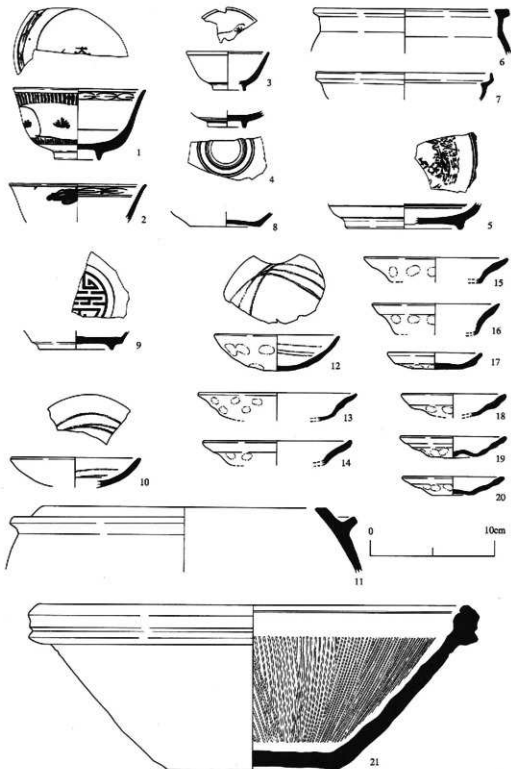
1944年12月7日 東海道沖 マグニチュード7.9 震源は熊野灘沖 「東南海地震」静岡・愛知・三重などで合わせて死者・不明1223人、負傷者2864人、家屋全壊17599、半壊36520、流失3129、このほか長野県諏訪盆地でも家屋全壊12などの被害があった。津波が各地に襲来し、波高は熊野灘沿岸で6～8m、遠州灘沿岸で1～2mであった。

1946年12月21日 東海道沖 マグニチュード8.0 震源は紀伊半島沖 「南海地震」被害は中部以西の日本各地にわたり、死者1330、負傷者2632人、家屋全壊11591、半壊23487、流失1451、焼失2598。津波が静岡県より九州に至る海岸に襲来し、高知・三重・徳島沿岸で4～6mに達した。室戸で1.27m、潮岬で0.7m土地が隆起、高知県須崎・甲浦で約1m沈下、高知付近で田圃15Km²が海面下に没した。

1952年7月18日 奈良県中部 マグニチュード6.8 震源は奈良県橿原市付近 「吉野地震」震源の深さ60Km。和歌山・愛知・岐阜・石川各県にも小被害があった。死者9、家屋全壊20、春日大社の石燈籠1600のうち650倒壊。



第8図 東大阪周辺の活断層図



第9図 遺物実測図 (1~8 井戸1 9 井戸2 10.11 堤防上面 12~20 吉田川IV 21 表採)

調査番号 発掘調査番号	調査・層	地 区	形 状	法 量 (cm) : 埋没部寸	調査・状況		色 相	含有品数種(種)	程度	備 考
					内 容	外 容				
第1	第1	伊万里	竪	口径(10.4) 深高(3.0)	黄色赤褐色が混ざっている。	黄色赤褐色が混ざっている。	内層 黒褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第2	第1	伊万里	竪	口径(10.8) 深高(3.0)	黄色赤褐色が混ざっている。	黄色赤褐色が混ざっている。	内層 黒褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第3	第1	伊万里	竪	口径(10.2) 深高(3.0)	白褐色陶片。	口縁部、左右側に陶片。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第4	第1	伊万里	竪	口径(11.5)	赤褐色陶片。	左右側に陶片。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第5	第1	伊万里	竪	口径(11.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第6	第1	伊万里	竪	口径(11.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第7	第1	伊万里	竪	口径(10.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第8	第1	伊万里	竪	口径(11.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第9	第2	伊万里	竪	口径(11.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第10	第1	伊万里	竪	口径(10.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		
第11	第1	伊万里	竪	口径(10.0) 深高(3.0)	赤褐色陶片。	口縁部。	内層 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	数種。		

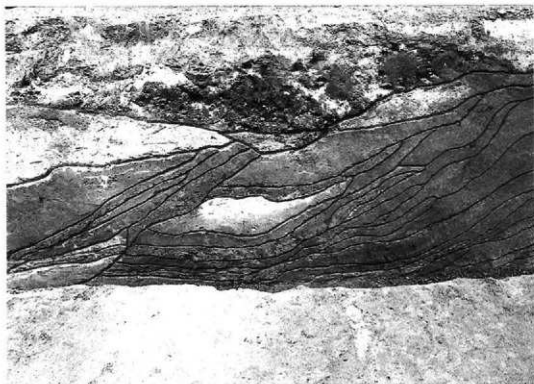
表1 水走遺跡第10次調査出土遺物観察表

調査番号 発掘調査番号	遺構・層	種類	形状	位置 (平面図)	調査・分析		数量	分析機関(単位)	検定	備考
					内 容	外 容				
第12	第11層V 遺	瓦葺	瓦	口径 19.8 高さ 3.9	口縁部コナテ、 底部テラコッタ。	口縁部コナテ、 底部テラコッタ。	内径 279630円筒 瓦 片数 102794枚 重量 12205kg 材質 279630円筒 279630円筒 279630円筒			
第13	*	土師器	口	口径 11.4 高さ 2.2	口縁部コナテ、 底部コナテ。	口縁部コナテ、 底部コナテ。 外底テラコッタ。	内径 189630円筒 瓦 片数 189630枚 重量 189630kg 材質 189630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。	口縁 部 14	
第14	*	土師器	瓦	口径 11.8 高さ 1.0	口縁部コナテ、 内底コナテ。	口縁部コナテ、 底部コナテ。	内径 279630円筒 瓦 片数 279630枚 重量 279630kg 材質 279630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。	口縁 部 14	
第15	*	土師器	瓦	口径 11.4 高さ 1.0	口縁部コナテ、 底部コナテ。	口縁部コナテ、 底部コナテ。	内径 279630円筒 瓦 片数 279630枚 重量 279630kg 材質 279630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。	口縁 部 14	
第16	*	土師器	口	口径 9.0 高さ 2.2	口縁部コナテ、 底部コナテ。	口縁部コナテ、 外底テラコッタ。	内径 189630円筒 瓦 片数 189630枚 重量 189630kg 材質 189630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。	14	
第17	*	土師器	瓦	口径 11.4 高さ 1.1	口縁部コナテ、 内底コナテ。	口縁部コナテ、 底部コナテ。	内径 189630円筒 瓦 片数 189630枚 重量 189630kg 材質 189630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。		
第18	*	土師器	瓦	口径 12.0 高さ 1.0	口縁部コナテ、 底部コナテ。	口縁部コナテ、 底部コナテ。	内径 279630円筒 瓦 片数 279630枚 重量 279630kg 材質 279630円筒 式瓦			
第19	*	土師器	口	口径 9.1 高さ 1.7	口縁部コナテ、 底部コナテ。	口縁部コナテ、 外底テラコッタ。	内径 189630円筒 瓦 片数 189630枚 重量 189630kg 材質 189630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。		
第20	*	土師器	瓦	口径 9.0 高さ 1.1	口縁部コナテ、 内底コナテ。	口縁部コナテ、 底部コナテ。	内径 189630円筒 瓦 片数 189630枚 重量 189630kg 材質 189630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。		
第21	*	土師器	瓦	口径 14.4 高さ 11.2 重量 17.0	口縁部コナテ、 底部コナテ、 底部テラコッタ。	口縁部コナテ、 底部コナテ、 底部テラコッタ。	内径 279630円筒 瓦 片数 279630枚 重量 279630kg 材質 279630円筒 式瓦	上記下の分析 結果参照。	口縁 部 14、 重量 15	

水定遺跡第10次調査出土遺物観察表



1. 吉田川I期



2 1. 吉田川I期の堆積



1. 吉田川Ⅱ期



1. 吉田川Ⅱ期断面



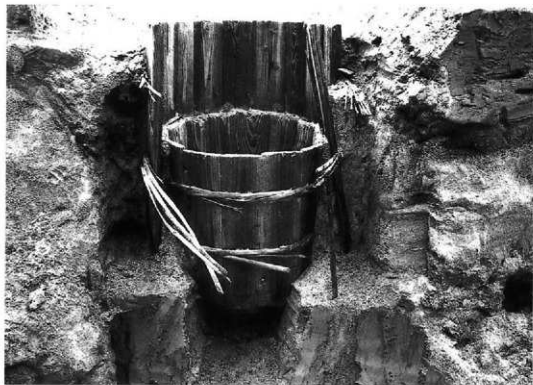
1. 井戸1 土坑1.2



2. 井戸1 井割



1. 井戸1井側上段



2. 井戸1井側中段



1. 井戸1井側



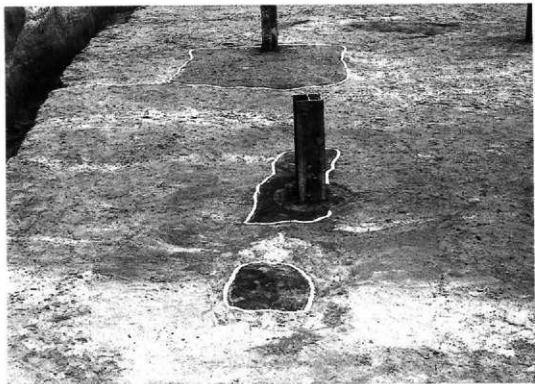
2. 井戸1井側



1. 井戸2



1. 井戸2



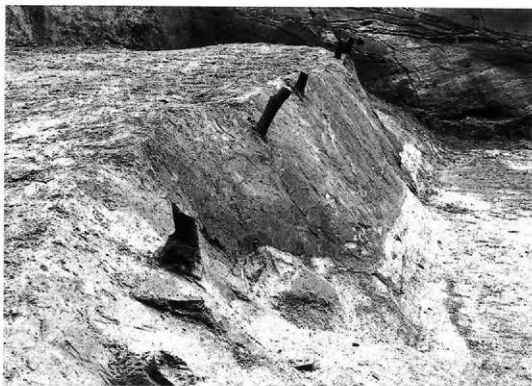
1. 土坑1.2 井戸1



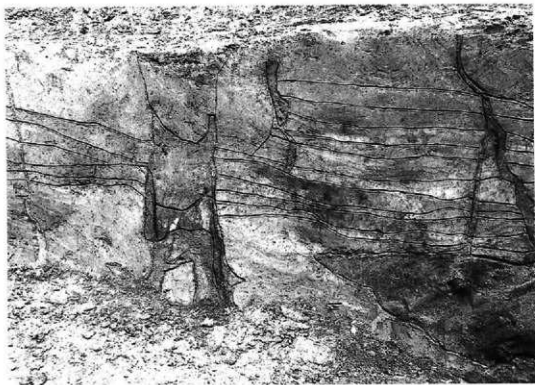
2. 土坑3 井戸1.2



1. 堤防



2. 堤防



1. 液状化跡



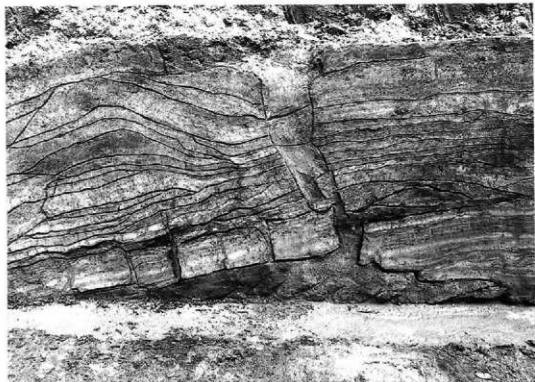
2. 液状化跡



1. 液状化跡



2. 液状化跡



1. 液状化跡



2. 吉田川Ⅳ期の地積層



14



15



13



16



1

1. 土師器皿、磁器碗



21

2. 備前焼すり鉢

Ⅷ 西ノ辻遺跡第31次発掘調査概報

本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 調査の概要	2
1) 調査地の順序	3
2) 検出の遺構	3
III. 出土遺物	5
1) 縄文時代の遺物	5
2) 古墳時代の土器	7
3) 整地後の上層遺物	9
IV. まとめ	9

挿図目次

第1図 調査地点位置図 (右1/2,500)	1
第2図 調査範囲と座標図	2
第3図 土層断面図 (Aトレンチ北端部)	3
第4図 上層の検出遺構図 (1/250)	4
第5図 下層の検出遺構図 (1/280)	6
第6図 縄文土器・石鏃 (1/2)	7
第7図 溝20内出土の土師器・韓式土器 (1/4)	7
第8図 自然河川跡及び溝19内出土の土師器・須恵器 (1/4)	8
第9図 整地層より上部の遺物 (1/4)	9

図版目次

図版1 西ノ辻遺跡第31次調査遺構	上 調査地全景
	下右 上層の溝状遺構 (Aトレンチ)
	下左 同上 (Bトレンチ)
図版2 西ノ辻遺跡第31次調査遺構	上 同上 (Bトレンチ東より)
	下 同上 (Dトレンチ北より)
図版3 西ノ辻遺跡第31次調査遺構	上 溝19内の状況 (Cトレンチ)
	下右 溝19の検出状況 (Bトレンチ西より)
	下左 同上 (Bトレンチ東より)

- | | | | |
|------|---------------|---|----------------------|
| 図版 4 | 西ノ辻遺跡第31次調査遺構 | 上 | 溝20内の土師器出土状況（北より） |
| | | 下 | 下層検出のピット群（Aトレンチ北より） |
| 図版 5 | 西ノ辻遺跡第31次調査遺構 | 上 | 下層検出の溝とピット（同上） |
| | | 下 | 同上（手前より溝21・22） |
| 図版 6 | 西ノ辻遺跡第31次調査遺構 | 上 | 下層検出のピット群（Aトレンチ北より） |
| | | 下 | 下層検出の溝22・21（南より） |
| 図版 7 | 西ノ辻遺跡第31次調査遺物 | | 溝19・溝20出土の土師器 |
| 図版 8 | 西ノ辻遺跡第31次調査遺物 | 上 | 溝19出土の土師器片 |
| | | 下 | 溝19出土の土師器・須恵器片 |
| 図版 9 | 西ノ辻遺跡第31次調査遺物 | 上 | 整地層より上層出土の須恵器・瓦器・鉄製品 |
| | | 下 | 縄文晩期土器・石畿・韓式土器など |

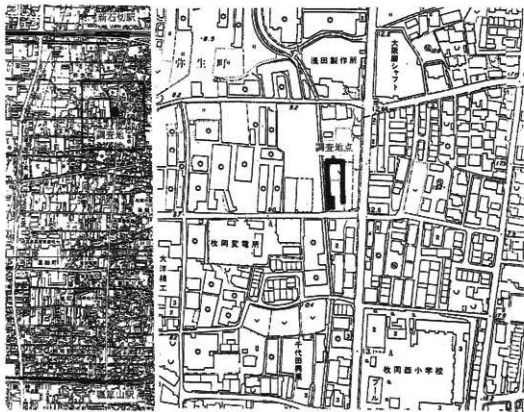
西ノ辻遺跡第31次発掘調査概報

I. 調査に至る経過

西ノ辻遺跡は、近鉄東大阪線の新石切駅南方、西石切町1・3丁目、弥生町、東山町にかけた南北約600m、東西約400mの範囲に広がる、弥生時代～中世にかけて営まれた大規模な複合遺跡である。古くは弥生時代中期末から後期の土器の基準とされた遺跡である。

西ノ辻遺跡の周囲には、大きな遺跡が隣接しており、西側には鬼虎川遺跡、東側には神並遺跡など、昭和55年～62年にかけて行われた近鉄東大阪線の建設と国道308号の延伸事業、さらには昭和63年以降進められてきた、第二阪奈有料道路建設に伴う発掘調査の実施により、縄文時代～中世にかけた各時代の集落遺構や墓塚が検出されるなど、数々の貴重な成果が得られている。

西ノ辻遺跡の南側には、縄文～弥生時代の遺跡として古くから知られる鬼塚遺跡があり、近年のマンション建設に伴う調査により、古墳時代の水田と祭祀跡や平安～鎌倉時代にかけた集



第1図 調査地点位置図 (1/2,500)

落跡の存在も、次第に明らかになってきている。

西ノ辻遺跡が広がる地域は、当地の地場産業である伸線工場や小規模な住宅が古くから混在した地域で、畑地を一部残し、近年は目立った工事はあまりなかった所である。

これまで、西ノ辻遺跡内で実施した発掘調査は、遺跡北端を東西に横切る近鉄東大阪線に沿った区域での調査がほとんどで、工場の新築に伴って今回実施した第31次調査は、新石切駅の南方、旧国道170線に沿って約450mほど行った西側、新川との間の土地で、宝町1615-1番地にあたり、面積約480m²を測る畑地である。

平成元年（1989）の7月10日付けで、土地所有者の東宝鋼材株式会社から文化財保護法に基づき、東大阪市教育委員会文化財課に対し、鉄骨造の伸線工場を新築したい旨の届出があった。

計画は、南北に細長い敷地内いっぽいに、ベタ基礎構造の建物を建設するもので、同月14日ただちに現地でも試掘調査が行われることになった。

調査の結果、現地表下約1mの下に、弥生土器片が検出されたため、届出者宛て、遺物を含む層に影響が及ばないよう指導が行われた。

しかし、翌年の平成2年1月に入って工事が開始され、広範囲に基礎杭の打設工事が行なわれていたため、工事の中止が指示された。

事業者並びに代理者と協議が重ねられた結果、基礎部分を中心とした発掘調査実施の理解と協力が得られたため、教育委員会より(財)東大阪市文化財協会に対し、現地の調査の実施につ

いて依頼があり、事業者と委託契約のうえ、現場調査を平成2年9月10日から10月20日までの間、実施することとなった。

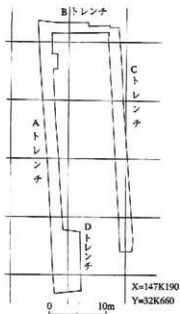
II. 調査の概要

調査地は、扇状地の末端部にあたり、標高約10~11mを測る。

敷地内に建設予定の工場基礎（布基礎）及びコンクリート基礎杭（径30cm 2本対）の打設部分を対象に、幅約2~2.5mのトレンチを建物の西・北・東の三方に設定した。西側トレンチをAトレンチ、東側トレンチをCトレンチとし、両トレンチをつなぐ北端のトレンチをBトレンチと呼称した。

また、Aトレンチの南端部は、事務所棟相当部分にあたる南北9.4m、東西5.0mの範囲を加え、Dトレンチとして調査した。南北に長いA・B両トレンチの間は約10.5mの間隔である。

調査地は、南半では約70~50cmの盛土層が被り、北



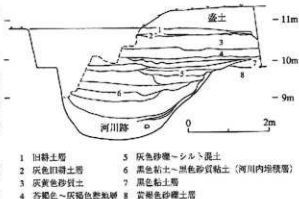
第2図 調査範囲と座標図

方の畑地へ薄く続いている。盛土下の旧畑地面で、TP10.8mを測る。

調査は、Aトレンチから北へB～Dトレンチの順に耕土床土までの機械掘削を行い、以下の土層については、人力による掘削により、各層ごとに遺物、遺構の検出作業を行った。

北側の畑地との境界部分については、植木等の関係から、一部調査ができなかった。

なお、調査地での各トレンチの位置及び座標位置は、第2図のとおりである。



第3図 土層断面図 (Aトレンチ北端部)

1) 調査地の層序

今回の調査地は、扇状地末端のため、周辺は当然西へ緩やかに下降傾斜する地形となっている。しかし敷地西側に、本来西へ向くべき新川が北流しており、その名前などから見て、かつて周辺で治水・造成工事などが行われたことが考えられた。

調査地は、厚さ約15～20cmの暗灰色旧耕土層（第1層）の下に、部分的に第2層となる灰色の古い耕土層が見られるが、調査地全体に瓦器小片を含む厚さ20～30cmの灰黄色砂質土（第3層）がベースの土層となっている。この第3層は、ほぼ中程に黄色の強い部分が見られ、大きく上下二時期に及ぶ古い耕土と考えられる。

第3層の下は、北半区域を中心として厚み約10cmほどの茶褐色～灰褐色整地層（第4層）が存在しており、Cトレンチ北半では、下層を削って黒色のブロック粘質土の貼付けが見られ、これらの層の上面で、南北に多数の浅い溝群を検出した。

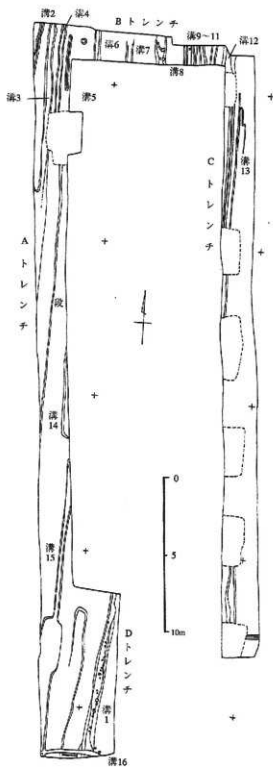
第4層の下は、ほとんど遺物を含まない厚さ15～40cmの第7層黒色粘土層が北に厚く続いている。下部は黄褐色砂礫土層（第8層）の地山層で、上面で東西方向の溝群とピットを検出している。

調査地北端付近では、第7層と8層を侵食して形成された幅3.5m、深さ1.2m～1.8mの小河川（第5図）が東西に走り、底部から上へ自然木を多く含む黒灰色粘土や礫混じりの黒色砂質粘土などが自然堆積（第6層）していることから、何度も地積と侵食が繰り返されたことが分かる。

2) 検出の遺構

まず、調査地全域の第4層上面で、やや斜めに並行して走る比較的新しい時期の南北溝群を検出した。その状況は第4図のとおりで、旧耕土下の第3層が、上下二層にわかれたことから、溝群は新旧あることになる。

Dトレンチで検出した幅60cmの南北溝1と、直行する小溝16は、比較的近年まで機能した水田及び畑の溝で、青灰色粘土または灰色砂が埋土となっていて、溝の底部に木杭が数本打たれているものがあり、埋土より寛永通宝1が出土している。



第4図 上層の検出遺構図 (1/250)

検出した他の溝は、下面の古い方の溝で、時期を明確に出来る伴出遺物はないが、西側から～北側にかけての部分で、ほぼ並行する幅20～90cmの南北溝を15本検出している。検出状況から畑作に伴う耕作溝と考えられる。しかし、幅広の深い溝も含まれるため東北部分の溝は別用途を持ったものであろう。両者とも遺物はほとんど無く、前者は近世、後者は中世後半を主としたものと考えられる。

古墳時代の遺構として、旧地表面から約60cm下に続く第7層の上面でA～Cトレンチ北端部分の東西に、U字形の河川跡と埋没末期に上部に掘られた溝19と溝20を検出した。河川跡は、幅3.8m、西端での深さ2m、東端深さ1.4mを測り、内部の堆積層下部には、自然木を比較的多く含む黒色シルト質粘土、同砂質粘土などが堆積していたが、上部に近い所から庄内式の甕1（第8図）が完形で出土した。

溝20は、河川が埋まった段階で並行して南寄りに掘られた深さ0.3mの浅い東西溝で、Cトレンチ部分からまともな土師器高杯・甕・韓式土器瓶片が出土している。（第7図）

この溝は、北端に少し後に掘られた幅約1.2～1.8m、深さ約50cmの溝19によって壊されている。溝19西半の底部を中心に拳大の自然石と共に、土師器甕・高杯・鉢などの他、須恵器つまみ付蓋が出土している。（第8図）

南北西端部が黒褐色土～暗黄褐色砂礫の地山層となり、中央付近には厚さ約10～15cmの第7層黒色砂質粘土層が存在しているが、ほとんど遺物は含まれていない。しかし、下層の地山面では、西に傾斜した窪み部分に、ほぼ並行して東西に続く大小の溝（溝21・22・23）3本と多数の小ピットと土壌を検出している。

溝21は幅40cm、深さ15cm、溝22は幅1.2m、深さ40cmをはかり、約12mの間隔で続く最も南側の溝23は、幅2m、深さ35cmを測る。溝間に径10～40cm、深さ10～20cmの小ピットを約35ヶ所、北側に約10ヶ所を確認したが、とくに規則的な配列等は見られない。溝22内より縄文晩期土器片が出土していることから、縄文時代晩期後半～末期の遺構と考えられる。

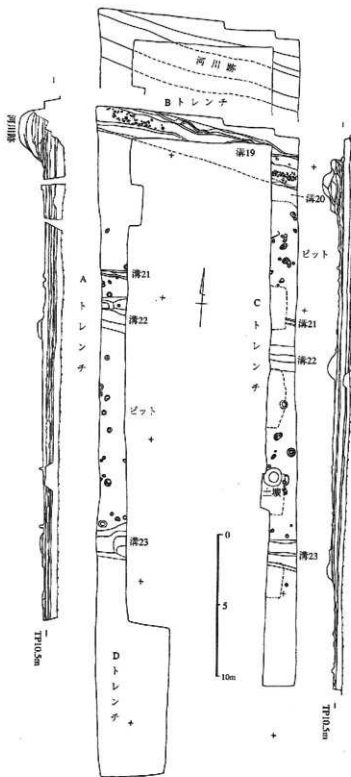
Ⅲ. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整地層より上部の層で出土したのものとして、須恵器・土師器・瓦器の各種小片・銭貨・鉄製鉛片などがある。

また、古墳時代の河川跡や溝（19・20）から土師器や韓式土器片・古式須恵器片がまともな形で出土している。

1) 縄文時代の遺物（第6図）

今回の調査で、わずかながら縄文時代の土器片及び石鏃が出土している。1は、Cトレンチ南端の第4層整地層に混じって出土した。長さ2.6cm、幅1.2cm、基部の挟りが浅いサヌカイト製の巴基無茎式石鏃である。2の縄文土器片も、Cトレンチ下層の溝22埋土上部（第7層）より唯一出土したもので、外面にD字形刻目の帯状貼付凸帯を施し、口唇端も同様に刻んでゆるく外反させた甕の口縁部片である。



第5図 下層の検出遺構図 (1/280)

晩期の遊賀里IV式以降の特徴を示している。

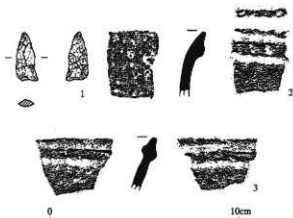
3も整地層より出土したもので、浅鉢の口縁部の小片で、外面と内面の口唇近くに刻目のない凸帯を施している。2・3とも在地の土器である。

2) 古墳時代の土器

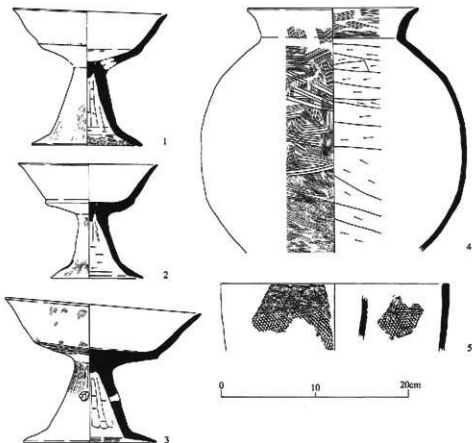
河川出土の土器

調査地北端で東西に検出した自然河川の上部堆積層から、唯一出土した土器として、小型甕(第8図1)

がある。口縁端は失われているが、口径及び高さとも約12.7cmを測るまで、胴部外面は斜めに、底部は縦方向のタタキ目を施している。



第6図 縄文土器・石鏃(1/2)



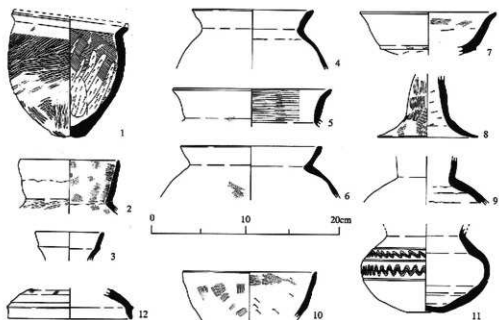
第7図 溝20内出土の土器器・韓式土器(1/4)

内面は細かいハケ目を施した後、底部から削り上げている。在地産の庄内式甕である。

2は口径10.4cm、高さ5.7cmの直口に近い壺の口縁部で、頸部にタタキ目を残している。他地域産。3は、二重口縁の小型甕で、口径7cmの口縁部片である。

溝20出土の土器

溝20の底部よりまとまって出土した土師器（第7図）として、高杯3（1～3）・甕1（4）



第8図 自然河川跡及び溝19内出土の土師器・須恵器（1/4）

等がある。1の高杯は、杯部口径16.2cm、高さ14cm、脚部底径11.6cm、段状に仕上げた杯部口唇と脚端部外面に黒斑が見られる。杯外面の段端は、凹線状に仕上げている。2は同形のやや小型の高杯で、杯部口径14.6cm、高さ12.1cm、脚部底径9.8cmある。

3は、口径20.6cm、高さ14.4cm、脚部底径14.0cmの高杯で、やや口を広げて脚端部を大きく折り曲げ、脚部に不整形な透孔1を施している。

4は、口径19.0cm、胴径28.2cm、復元高約30cmの甕で、胴部外面は縦と斜めのハケ目、内面は横方向に大きくへら削りを行っている。胴部外面上部に黒斑がある。1～3とも在地産。

5は、瓶の口縁部・胴部小片である。口径24.0cm、口縁部の3cm下から胴部にかけて、格子状のタタキ目を施した韓式土器である。胴部には、横位の沈線が見られる。

溝19出土の土器

溝19の底部及び埋土から出土した土器（第8図）として、土師器甕・鉢・高杯・壺のほか、須恵器片がわずかに伴っている。

土師器の4～6は、通有の甕片で、7は口径14.2cmの高杯の杯部片、8は底径10.4cmの同脚

部片である。

11は、胴径13.6cm、現高9.3cmで、はそう形の小型壺で胴部の3条の沈線間に櫛描波状文を2帯飾り、底部は径3.8cm程の粘土を貼り付けている。

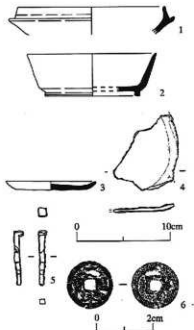
12は、口径約13.0cm、現高3.1cmの須恵器高杯の蓋片で、つまみ部分等を欠いているが、上面周囲に5条1単位の櫛描直線文を飾る、初期に近い段階の資料である。

3) 整地後の上層遺物 (第9図)

整地層(第4層)の上部の第3~2層より出土したのものとして、若干の弥生土器片や古墳時代~奈良時代にかけての須恵器・土師器片のほか、中世初め~前半頃の土師器・瓦器片、近世の陶器片・銭貨・鉄製品が若干ある。

ほとんど整地造成に伴って二次的に混入した遺物であるが、その一部について図示した。

1は須恵器の杯片で6世紀末、2は口径13.6cm、高さ4.5cmの高台をもつ奈良時代の杯である。3は瓦器の小皿片で、内面は連続的な平行線の暗文を施している。4は、唐鏝の先の一部、5は鉄製角釘、6は寛永通宝で、共にDトレンチの溝1に伴って出土した新しい遺物である。



第9図 整地層より上部の遺物(1/4)

IV. まとめ

今回の調査は、工事が事前着工のところ、事業者等の理解と協力が得られ、確認調査として実施できたのは、ひじょうに幸いなことであった。

特別顕著な知見はないが、古墳時代の遺構は、調査地が、鬼塚遺跡に近い西ノ辻遺跡の南端にあたり、従来より弥生時代中期~後期にかけての遺構と遺物が知られている遺跡北半付近の状況とは、やはり異なった状況となっており、むしろ、鬼塚遺跡の北半区域には、谷水田跡・溝・建物跡など古墳時代後半期にかけての遺構が広がっており、今回の溝状遺構などは、そうしたものと関連すると考えられる。



調査地全景

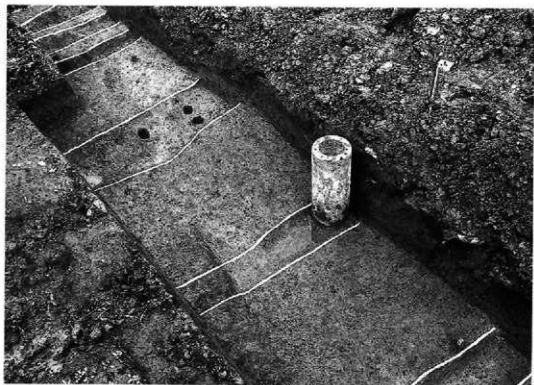


右岡 (Bトレンチ)



上層の溝状遺構 (Aトレンチ)

図版2
西ノ辻遺跡第31次調査
遺構



上層の溝状遺構（Bトレンチ東より）



上層の溝状遺構（Dトレンチ北より）



溝19内の状況 (Cトレンチ)



同右 (Bトレンチ東より)



溝19の検出状況 (Bトレンチ西より)



溝20内の土師器出土状況（北より）



下層検出のピット群（Aトレンチ北より）



下層検出の溝とピット (Aトレンチ北より)



下層検出の溝とピット (手前より溝21・22)



下層検出のピット群 (Aトレンチ北より)



下層検出の溝22・21 (南より)



7-1



7-4



7-2



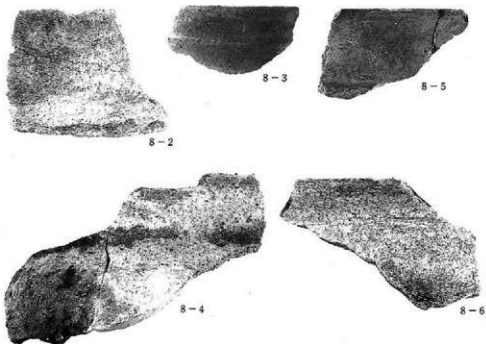
8-1



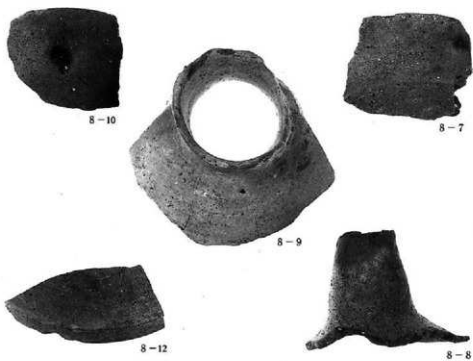
7-3



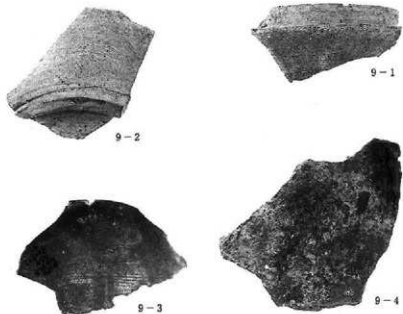
8-11



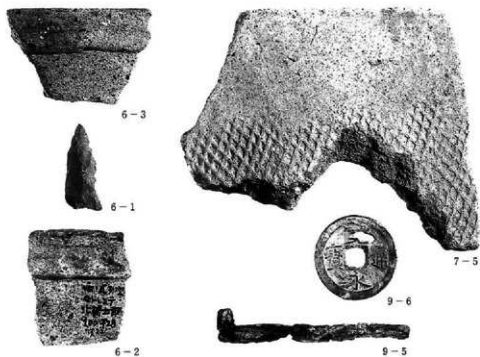
溝19出土の土師器片



溝19出土の土師器・須恵器片



整地層より上層出土の須恵器・瓦器・鉄製品



縄文晩期土器・石器・韓式土器など

報告書抄録(その1)

ふりがな	ざいだんほうじんひがしおおさかしぶんがざいきょうかいがいほうしゅう							
書名	財団法人 東大阪市文化財協会報集-1996年度(1) -							
副書名	I 山賀遺跡第4次発掘調査概報 II 西岩田遺跡第10次発掘調査概報 III 辻子谷遺跡第1次発掘調査報告 IV 若江遺跡第30・31次発掘調査概報 V 宮山遺跡第1次発掘調査概報 VI 榎町遺跡第2次発掘調査報告 VII 水走遺跡第10次発掘調査報告 VIII 西ノ辻遺跡第31次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	I・II 榎永信雄 III・IV 藤田邦夫 V (第30次) 上野利明、(第31次) 藤田邦夫 V 下村晴文 VI 中西克宏 VII 原田修							
編集機関	財団法人 東大阪市文化財協会							
所在地	〒577 東大阪市荒川3丁目28-21 TEL.06-736-0346							
発行年月日	西暦 1997.3.31							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東緯 °' "	調査期間	調査期間 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
I 山賀遺跡 (第4次調査)	東大阪市若江南町5丁目	27227				19820610 ～ 19820709	80m ²	中学校校 舎増築
II 西岩田遺跡 (第10次調査)	東大阪市西岩田町3丁目	27227				19820727 ～ 19821111	900m ²	マンシヨ ン建設
III 辻子谷遺跡 (第1次調査)	東大阪市中西切町2丁目 210～212番地	27227				19850118 ～ 19850330	260m ²	マンシヨ ン建設
IV 若江遺跡 (第30・31次調査)	東大阪市若江北町3丁目 若江本町3丁目	27227				19840820～ 19850201/ 0605～0614 19850919～ 19851112	600m ²	道路拡張
V 宮山遺跡 (第1次調査)	東大阪市上石切町1463番地	27227				19851001 ～ 19851024	250m ²	社殿復元
VI 榎町遺跡 (第2次調査)	東大阪市西石切町1丁目 70番地他	27227				19870205 ～ 19870319	800m ²	ビル建設
VII 水走遺跡 (第10次調査)	東大阪市川中279番地の1	27227				19870212 ～ 19870331	346m ²	ビル建設
VIII 西ノ辻遺跡 (第31次調査)	東大阪市宝町1615-1番地	27227				19900910 ～ 19901020	480m ²	工場建設

報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山賀遺跡 (第4次調査)	集落	弥生時代前期～古墳時代前期	溝・井戸・掘立柱建物	弥生土器・土師器・須恵器・磁石	系生時代前期土器 赤管式古段舞土器
西岩田遺跡 (第10次調査)	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	竪穴住居・倉庫・掘立柱建物・土壇・溝・井戸	土師器	S字状口縁差古墳時代前期末の一括資料
辻子谷遺跡 (第1次調査)	集落	縄文時代～歴史時代 (江戸時代)	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・製塩土器	
若江遺跡 (第30・31次調査)	集落 城	弥生時代～歴史時代 (江戸時代)	溝・ピット・土壇・井戸・堀	土師器・瓦器・陶磁器・須恵器・瓦・金属製品	
宮山遺跡 (第1次調査)	祭祀	平安時代後半頃～近世 (江戸時代始め頃)	礎石建物・石垣・石敷参道	土師器・瓦器・瓦・鉄釘	
植附遺跡 (第2次調査)	集落	弥生時代～中世	溝・土壇・井戸・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・木製品・金属製品・土製品	呪符木簡
水走遺跡 (第10次調査)	集落	縄文時代～歴史時代 (江戸時代)	川・土坑・堤防 地震痕跡	土師器・瓦器・陶磁器	
西ノ辻遺跡 (第31次調査)	集落	弥生時代～中世	溝・川・ピット	縄文土器・土師器・韓式系土器・須恵器・金属製品	

(財) 東大阪市文化財協会概報集 —1996年度(1)—

1997年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 株式会社 近畿印刷センター